新潟県埋蔵文化財調査報告書　第129集

上信越自動車道関係発掘調査報告書XI

八 斗 蒔 原 遺 跡

２００４

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅺ

八斗蒔原遺跡（はっとまきはら）

２００４

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として、群馬県藤岡インターチェンジから分岐し、群馬県・長野県を経て新潟県上越市に至る総延長203kmの高速自動車道です。平成11年に全線が開通し、日本海側と太平洋側を結ぶとともに、中央・北陸自動車道とも連結することで、沿線地域の産業・経済・文化の交流発展に貢献しています。

本書は、この上信越自動車道建設に先立って調査した八斗蒔原遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、縄文時代早期の生活跡が発見され、妙高山の広大な裾野が縄文時代から活発に利用されていたことがうかがえます。出土した土器から、信州・関東・東北地方、特に信州と結びつきを持っていたことがわかってきました。

今回の調査結果が、地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助をいただきました中郷村教育委員会、地元の方々、並びに発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮を賜りました日本道路公団北陸支社・同上越工事事務所に対して厚くお礼申し上げます。

平成16年2月

新潟県教育委員会

教　育　長　板屋越　麟一

例　　言

1　本報告書は、新潟県中郷村大字板橋新田字八斗蒔原593－1ほかに所在する八斗蒔原遺跡の発掘調査記録である。

2　本調査は、上信越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団（以下、公団）から受託したもので、調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に委託し、平成7・8年度に実施したものである。

3　整理作業および報告書作成に係る作業は、県教委が埋文事業団に委託し、平成15年度に実施した。

4　出土遺物および調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は県教委に問い合わせ願いたい。

5　遺物の注記は八斗蒔原遺跡の略記号「ハマキ」とし、出土地点・層位などを併記した。

6　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

7　遺物番号は種別に関わりなく通し番号とし、本文および観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。

8　本文の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

9　炭化材の樹種同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、了解を得て編集した。

10　遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託した。

11　本書の執筆・編集は坂上有紀（埋文事業団嘱託員）がこれにあたった。第Ⅴ章3、第Ⅶ章2については澤田　敦（埋文事業団班長）の指導を得た。ただし、第Ⅰ章1、第Ⅱ章については過去の新潟県埋蔵文化財調査報告書をもとに加筆編集したものである。

12　縄文土器については長岡市立科学博物館学芸員　小熊博史氏にご教示いただいた。

13　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

小笠原永隆　　金子直行　　倉品敦子　　黒坂禎二　　小島正巳　　神　昌樹　　高橋　勉　　谷藤保彦

中郷村教育委員会　　長野県立歴史館　　中村由克　　野村忠司　　早津賢二　　細田　勝　　綿田弘実

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理作業 …… 1

A　一　次　調　査 …… 1

B　二　次　調　査 …… 1

C　調　査　体　制 …… 2

D　整　理　体　制 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 4

1　地　理　的　環　境 …… 4

2　周　辺　の　遺　跡 …… 5

第Ⅲ章　調　査　の　概　要 …… 7

1　グリッドの設定 …… 7

2　基　本　層　序 …… 7

第Ⅳ章　遺　　構 …… 10

1　概　　要 …… 10

2　各　　説 …… 10

第Ⅴ章　遺　　物 …… 12

1　概　　要 …… 12

2　土　　器 …… 12

A　分　　類 …… 12

B　各　　説 …… 13

C　縄文土器の分布 …… 19

3　石　　器 …… 24

A　各　　説 …… 24

B　石　器　の　分　布 …… 27

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 28

1　炭化材の樹種 …… 28

A　試　　料 …… 28

B　方　　法 …… 28

C　結　　果 …… 28

D　考　　察 …… 28

第Ⅶ章　ま　と　め …… 30
1　土　　器 …… 30
A　早期中葉の土器群について …… 30
B　早期末から前期初頭の土器群について …… 35
C　小　　結 …… 36
2　石　　器 …… 36
《要　　約》 …… 37
《引 用 文 献》 …… 38

挿図目次

第 1 図　一次調査トレンチ位置と二次調査範囲…… 1
第 2 図　遺跡の位置…… 4
第 3 図　周辺の遺跡…… 6
第 4 図　グリッド設定図…… 8
第 5 図　土層柱状図…… 9
第 6 図　土器実測図 …… 14
第 7 図　土器93モチーフ推定図 …… 16
第 8 図　縄文土器分布図1…… 20
第 9 図　縄文土器分布図2…… 21
第10図　縄文土器分布図3…… 22
第11図　縄文土器分布図4…… 23
第12図　石器分布図 …… 27
第13図　検出樹種の顕微鏡写真 …… 29
第14図　Ⅱ群土器分布図1…… 32
第15図　Ⅱ群土器分布図2…… 33
第16図　磨石類・特殊磨石長幅分布図 …… 37

表　目　次

第 1 表　縄文土器出土状況 …… 12
第 2 表　石器組成 …… 24
第 3 表　樹種同定結果 …… 28
第 4 表　Ⅰ群土器の分類別比率 …… 30
第 5 表　Ⅱ群Ｄ類口縁部刺突文の比率 …… 34
別 表 1　遺構計測表 ……41
別 表 2　土器観察表 ……42
別 表 3　石器観察表 ……54

図版目次

［図　面］

図版 1　遺構全体図
図版 2　遺構個別図1
図版 3　遺構個別図2
図版 4　縄文土器1
図版 5　縄文土器2
図版 6　縄文土器3
図版 7　縄文土器4
図版 8　縄文土器5
図版 9　縄文土器6
図版10　縄文土器7
図版11　縄文土器8
図版12　縄文土器9
図版13　縄文土器10・その他土器・縄文時代の石器1
図版14　縄文時代の石器2
図版15　縄文時代の石器3
図版16　縄文時代の石器4

［写　真］

図版17　八斗蒔原遺跡周辺の景観・基本層序・２号集石
図版18　１号集石土坑・押型文土器出土状況・SK17・SK19
図版19　SK1・SK2・SK5・SK13
図版20　SK14・SK20・SK26・SK27
図版21　SK28・P15・SK15・１号炭窯
図版22　１号炭窯・３号焼土・４号焼土・95年度、96年度調査区全景
図版23　縄文土器１
図版24　縄文土器２
図版25　縄文土器３
図版26　縄文土器４
図版27　縄文土器５
図版28　縄文土器６
図版29　縄文土器７・その他土器
図版30　縄文時代の石器１
図版31　縄文時代の石器２

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

上信越自動車道は群馬県藤岡市で関越自動車道と分岐し、長野市を経て上越市で北陸自動車道に連結する、総延長203kmの高速道路である。北陸・中部圏と首都圏とを直結させ、産業・経済・文化の交流を促進させる重要な役割を担っている。

上信越自動車道のうち八斗蒔原遺跡にかかる第11施工命令区間（中頸城郡中郷村～上越市）は昭和48年11月に基本計画が、平成元年1月に整備計画がそれぞれ決定され、平成2年11月に工事施工命令が出された。施工命令に先立ち、県教委は公団から上越市～中頸城郡中郷村の遺跡分布調査の依頼を受け、平成2年4月に法線内を踏査した。その結果、周知の遺跡18か所、新発見の遺跡10か所、遺跡推定地25か所を確認し、公団に通知した。本遺跡は周知のNo.26地点「八斗蒔原遺跡」として取り上げられており、一次調査対象地域は22,800m^{2}とされた。

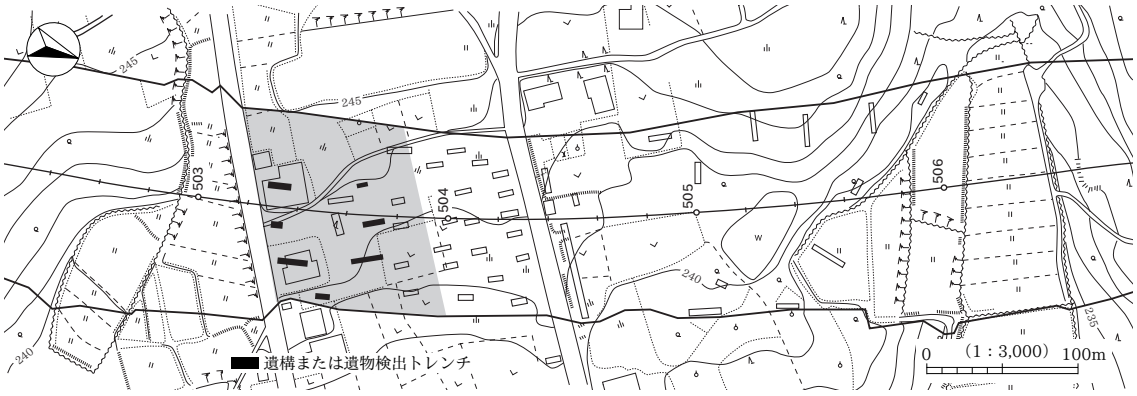
2　調査と整理作業

A　一 次 調 査

一次調査は、平成6年9月8日から14日、平成7年5月23日から26日、6月28日、10月31日から11月1日の4回にわたり行われた。対象地域全体（22,800m^2）の任意の位置にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況などを確認した。45基のトレンチを調査した結果、ピットや焼土が検出され、縄文時代早期から前期の土器・石器が出土した。これにより遺構・遺物の確認された範囲5,800m^{2}が二次調査対象となった。

B　二 次 調 査

調査は平成7・8年度に実施した。当初は平成8年度調査予定であったが、公団から平成7年度中に自動車道のカルバートボックスを建設したい旨要望があり、該当範囲1,080m^{2}について平成7年度に二次



第1図　一次調査トレンチ位置と二次調査範囲

調査を行うこととなった。6月12日から、土層観察用のセクションベルトを残しながら重機による表土除去を開始し、同月9日からは作業員を投入して包含層掘削・遺構精査・遺構発掘作業を進めた。遺物は小グリッド単位で層位別に取り上げた。遺構の検出は地山面で行った。調査区西側は遺構・遺物がほとんど検出されないことから、これ以上の調査は不要とした。7月6日に調査を終了した。

平成8年度は4月23日から表土除去を開始し、5月18日からは人力による包含層掘削・遺構精査・遺構発掘に入った。遺構は調査区北側・南西側に、遺物は南西側に集中し、南東側は希薄であった。遺物は基本的に1点ずつ出土地点・層位・標高を計測し取り上げを行った。7月19日に調査を終了した。

C　調 査 体 制

平成6年度　［一次調査］

調査期間　　平成6年9月8日～9月14日
調査主体　　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）
　調　査　　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
　管　理　　総　　括　　藍原　直木（事務局長）
　　管　　理　　渡辺　耕吉（総務課長）
　　庶　　務　　泉田　　誠（　〃　主事）
　調　査　　調査総括　　茂田井信彦（調査課長）
　　調査指導　　藤巻　正信（　〃　調査第1係長）
　　調査担当　　田海　義正（　〃　主任調査員）
　　調査職員　　橋谷田裕治（　　〃　　）

平成7年度

調査主体　　新潟県教育委員会（教育長　平野清明）
調　　査　　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
　管　理　　総　　括　　藍原　直木（事務局長）
　　管　　理　　山上　利雄（総務課長）
　　庶　　務　　泉田　　誠（　〃　主事）
　調　査　　調査総括　　茂田井信彦（調査課長）
　　調査指導　　藤巻　正信（　〃　調査第1係長）

［一次調査］

調査期間　　平成7年5月23日～5月26日
　調査担当　飯坂　盛泰（調査課文化財調査員）
調査期間　　平成7年6月28日
　調査担当　田海　義正（調査課主任調査員）
調査期間　　平成7年10月30日～11月1日
　調査担当　小池　義人（調査課主任調査員）

［二次調査］

調査期間　　平成7年6月12日～7月6日
　調査担当　飯坂　盛泰（調査課文化財調査員）
　調査職員　橋谷田裕治（　〃　主任調査員）
　　佐藤　　恒（　〃　嘱託員）

平成８年度　［二次調査］

調査期間　　平成８年４月22日～７月19日

調査主体　　新潟県教育委員会（教育長　平野清明）

調　　査　　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　理　　総　　括　　藍原　直木（事務局長）

管　　理　　山上　利雄（総務課長）

庶　　務　　泉田　　誠（　〃　主事）

調　査　　調査総括　　茂田井信彦（調査課長）

調査指導　　藤巻　正信（　〃　調査第１係長）

調査担当　　飯坂　盛泰（　〃　文化財調査員）

調査職員　　島田　昌幸（　〃　文化財調査員）

瀧澤　　誠（　〃　嘱託員）

山崎　忠良（　〃　嘱託員）

D　整理体制

出土遺物の水洗・註記作業は調査現場で発掘調査と並行して実施し、基礎整理は平成９年度の冬季に行った。報告書作成に関わる本格的な整理作業は、県教委が埋文事業団に委託して平成15年度に実施した。遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集については、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集をし、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、遺構写真と合わせてCD化し編集した。なお、図版作成・編集作業にかかり、業者に支給した資料は以下の通りである。

本文・挿図：テキスト形式、Excel形式のデータ・トレース原図・貼り込み版下

遺構図面図版：原図（修正済）・レイアウト図・文字データ

遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図

写真図版：デジタルデータ（CD）

体制は以下のとおりである。

整理期間　　平成15年４月１日～平成15年11月７日

整理主体　　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

整　　理　　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　理　　総　　括　　黒井　幸一（事務局長）

管　　理　　長谷川二三夫（総務課長）

庶　　務　　高野　正司（　〃　班長）

整　理　　整理総括　　藤巻　正信（調査課長）

整理指導　　高橋　　保（　〃　整理担当課長代理）

整理担当　　澤田　　敦（　〃　班長）

整理職員　　坂上　有紀（　〃　嘱託員）

作　　業　　田口　和子　島倉はるみ（以上、調査課嘱託員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

中頸城郡中郷村は新潟県の南西部に位置し、南は中頸城郡妙高村、北は新井市、西は西頸城郡名立町と接している。総面積43.75km^2、人口約5,150人（平成15年）と、県内でも小規模の村であるが、産業は第2次産業（鉱工業）が中心で、新潟県青海町と並んで特異な化学工業都市を形成している。また、日本海側と信濃を結ぶ北国街道が通り、各時代をとおして繁栄してきた。街道として整備される以前も、例えば縄文時代に信州産の黒曜石が頸城地方に搬入されていることなどから、人々の往来があったことが推測される。

中郷村の南西側には、妙高山（標高2,454m）、火打山（標高2,462m）など新第三紀層の山々が形成する西頸城山地、東には魚沼山系の西端にあたる高床山（標高527m）などの小山塊と、三方を山に囲まれている。村内の大地は、妙高火山の造山活動に伴う火砕流と、その後の山体の崩壊による岩屑なだれ堆積物[註)]や泥流によって形成され、それが片貝川・渋江川・矢代川などによって開析されている。これらの河川は、火打山・焼山の山麓に源を発する関川と新井市で合流し、頸城平野を流れ日本海に注いでいる。

妙高山は数十万年前から現在に至るまで4回の活動期と活動期に挟まれる3回の休止期があり、その間噴火と崩壊・浸蝕を繰り返しながら今日見られるような複式成層火山となった。このうち、発掘調査で認められる堆積物は第4回目の活動期（第Ⅳ期）に堆積したものが主体である。第Ⅳ期は約3万年前のシブタミ川火砕流の発生に始まり、現在はその終末期にあたる［早津1985］。

八斗蒔原遺跡付近の基盤の層をなしている矢代川岩屑なだれ堆積物は、1万9千年前のカルデラ形成期

第2図　遺跡の位置

註）「岩屑流：「岩屑なだれ」などと同義に使用されるが適切な用語とは言えない」「岩屑なだれ：粘性の高いマグマの貫入による火山体の変形や水蒸気爆発、地震などが原因で、火山体の不安定な部分が表層なだれのように高速で崩れ落ちる現象」「岩屑なだれ堆積物：表面に流れ山地形をもち、分解しきれなかった給源火山体構成物の大きな塊を含むことが特徴。低温のことが多く、運搬機構に水は寄与しない」［地学団体研究会編1996］。「矢代川岩屑流堆積物」も現象を忠実にとらえた場合、「矢代川岩屑なだれ堆積物」と言うのが正しい（早津氏のご教示による）。よって本報告では「矢代川岩屑なだれ堆積物」に用語を統一する。

の崩壊によって堆積したもので、17,900 ± 450 の ^{14}C 年代値が示されている［早津 1985］。本遺跡では矢代川岩屑なだれ堆積物よりも新しい火山性堆積物（赤倉火砕流堆積物・大田切川火砕流堆積物など）は到達しておらず、現地表面から地山面までの層厚は1m 前後と浅い。そのため、現地表下 10cm で縄文時代早期の遺物包含層にあたる場所もある。ちなみに、本遺跡の南東約 250m に位置する上中島遺跡では赤倉火砕流堆積物と大田切川火砕流堆積物が土層中に挟在している（妙高火山群由来の堆積物と遺跡の年代については、埋文事業団の既刊報告書［荒川ほか 2000］［小池 2002］などに詳しい）。

2　周辺の遺跡（第3図）

ここでは八斗蒔原遺跡周辺の、妙高山山麓に位置する縄文時代の遺跡について概観してみたい。

当該地域における縄文時代の遺跡分布は、妙高山の裾野周縁部に集中している。白田切川・大田切川周辺では遺跡分布密度が少ないが、これは火山性堆積物が厚く、調査がそれより上位の層にとどまっているためである。つまり、赤倉火砕流堆積物が厚い地域では前期中葉以前、大田切川火砕流堆積物が厚い地域では中期後葉以前の様相は不明ということである。

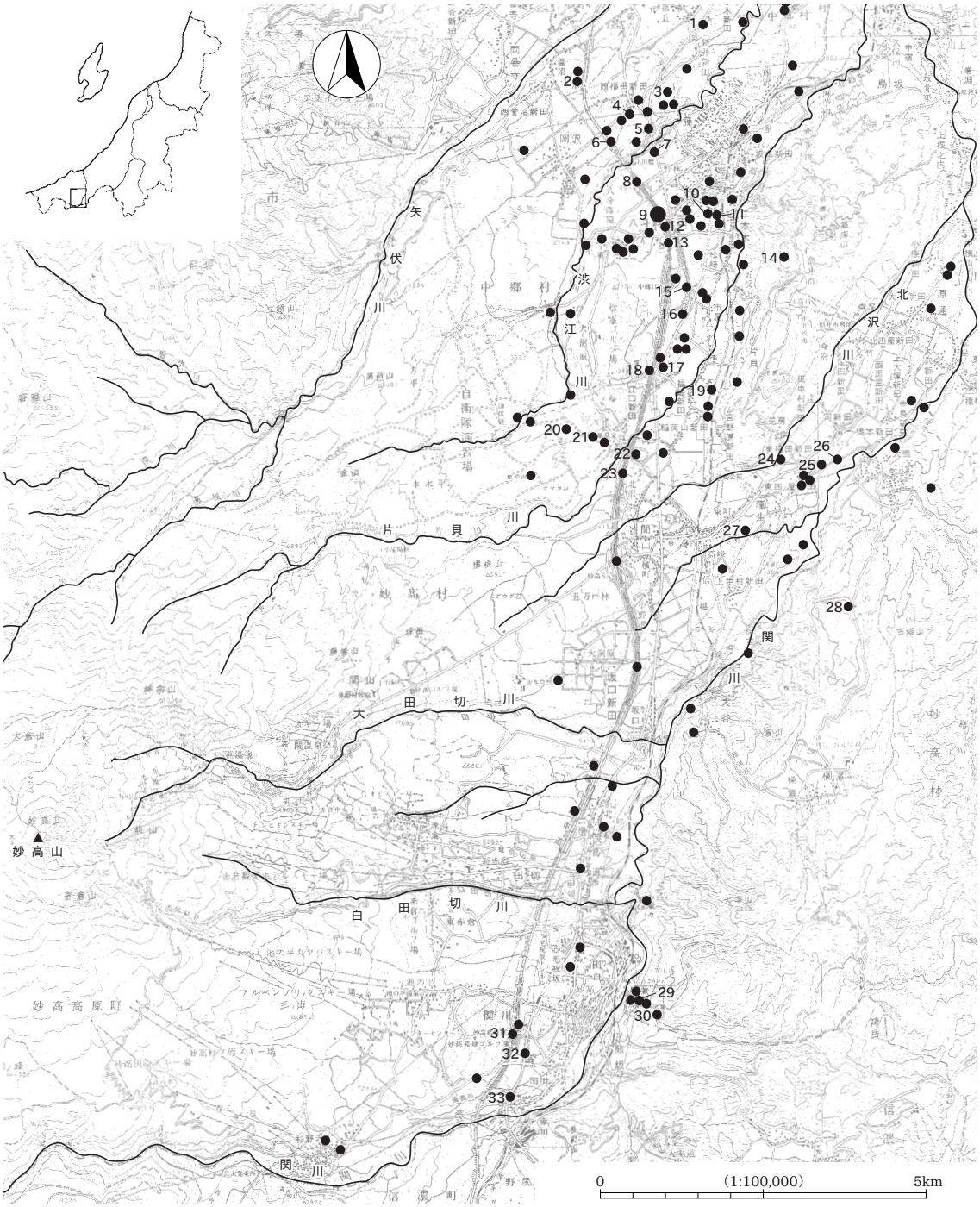
草創期では、妙高高原町大堀遺跡で田口岩屑なだれ堆積物（約 8,000 年前）の下層から草創期の可能性が考えられる無文土器が出土しているのみである［立木（土橋）ほか 1996］。

早期では妙高高原町関川集落西方の緩斜面に位置する関川谷内遺跡［小池ほか 1998 ・ 土橋 2003］・大堀遺跡・中ノ沢遺跡［立木（土橋）ほか 1997］で押型文土器・条痕文系土器の良好な資料が出土している。妙高山北東側緩斜面では八斗蒔原遺跡に加え、小重遺跡［小池 2002］・前原遺跡［橋谷田 1997］・松ヶ峯遺跡群［小島 1991 ・ 1993］などで押型文土器を中心とした当該期の遺物が出土している。その中でも、八斗蒔原遺跡は上越地方では発見例の少ない沈線文土器がまとまって出土しており、当地域の編年研究に寄与する良好な資料となろう。また、古塔山西方の盆地状地形に位置する中古遺跡［室岡 1986］、高床山周辺の遺跡群［高橋 1994］においても、押型文土器をはじめとする早期から前期前葉の遺物が出土している。新井市萩清水遺跡［立木（土橋）ほか 1997］では絡条体圧痕文土器の良好な資料が出土している。

前期後葉から中期前葉の遺跡は、主に妙高山北東側の斜面に点在する。湯ノ沢Ｂ遺跡［室岡 1966］・籠峰遺跡［中郷村教育委員会 1996 ・ 2000］・柿ノ木町遺跡［親跡 1992］・和泉Ａ遺跡［荒川ほか 2000］では赤倉火砕流堆積物と大田切川火砕流堆積物に挟まれた土層で遺構・遺物が検出された。また、高床山南方の平坦地に位置する南田遺跡［親跡 1988］・道添遺跡［室岡ほか 1994 ・ 1995］、台地上にある大貝遺跡［岡本 1967］も当該期が主体を占める。中期中葉から後期にかけては、前原遺跡・兼俣遺跡Ａ地区［本間ほか 1976］が存在する。

後期の遺跡では、まず籠峰遺跡があげられる。籠峰遺跡は後期中葉から晩期末葉にかけての大規模遺跡として知られており、石棺状配石 80 基を含む様々な形態の配石や掘立柱建物跡などの遺構とともに、充実した遺物群が検出された［中郷村教委前掲］。上述の石棺状配石は東頸城群浦川原村顕聖寺遺跡において初めて発見され［中川ほか 1959］、頸南地方では葎生遺跡で発見されたのを契機に［中川ほか 1967］、中郷村奥の城（西峰）遺跡・二本木西林遺跡［岡本 1982］・小丸山遺跡［親跡 1990］でも確認されている。

晩期では、和泉Ａ遺跡で前葉の土坑群、後葉の充実した遺物群が検出されている。このほか、後期中葉から晩期を主体とする兼俣遺跡Ｄ地区［室岡 1986］、晩期後葉を主体とする上ッ平遺跡［上ッ平遺跡発掘調査団 1992］などが調査されている。



国土地理院「高田東部」「高田西部」「飯山」「妙高山」1：50,000原図

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	三本木新田B	縄文（早・前）	12	上中島	縄文（早・前・晩）	23	和泉A	縄文（中・晩）
2	道灌林	縄文（中）・平安	13	南野畔	縄文（早・中）	24	上ツ平	縄文（晩）・中世
3	大久保	縄文（前～中）	14	寿池	縄文（早）	25	道添	縄文（中・後）
4	小丸山	縄文（後・晩）	15	中ノ原D	縄文（早～後）・平安	26	柿ノ木町	縄文（前・中）
5	西福田新田	縄文（早・前）	16	窪畑B	縄文（早～後）・平安	27	葎生	縄文（後・晩）
6	前原	縄文（早・中・晩）	17	小重	縄文（早～中）・中世	28	中古	縄文（早・前）
7	郷清水	縄文（前・晩）・平安	18	横引	縄文（前）・古墳・平安	29	兼俣A	縄文（前～後）
8	野林	縄文（前）	19	南田	縄文（中～晩）	30	兼俣D	縄文（後）
9	**八斗蒔原**	**縄文（早～前）**	20	松ヶ峯	縄文（早・中）	31	関川谷内	縄文（早・前）・平安
10	二本木西林A	縄文（早～後）	21	湯ノ沢B	縄文（前～後）	32	中ノ沢	縄文（早・前）・平安
11	奥ノ城（西峯）	縄文（後・晩）	22	籠峰	縄文（前～晩）	33	大堀	旧石器・縄文（早・前）

第３図　周辺の遺跡

第Ⅲ章　調査の概要

1　グリッドの設定

上信越自動車道のセンター杭を用いて、これをグリッドの基準線とした。平成７年度はSTA502＋20（X＝108090.773　Y＝-24553.128）とSTA503＋60（X＝108221.324　Y＝-24603.373）を結ぶ方を横軸とし、これに直行する方向を縦軸として、STA503＋60を起点に10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。STA503＋60杭が6Eグリッドの起点となる。このためグリッドの縦軸方向は真北より21度20分西傾している。グリッドは東西方向をアルファベット、南北方向を算用数字とし、この組み合わせにより表示した。大グリッドはさらに2m方眼に25分割して１～25の小グリッドとし、1A5・4C16のように表記した。

平成８年度はSTA504（X＝108257.210　Y＝-24621.036）とSTA505（X＝108343.587　Y＝-24671.342）を結ぶ方を横軸とし、これに直行する方向を縦軸として、STA504を起点に10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。STA504杭が5Bグリッドの起点となる。グリッドの縦軸方向は真北より30度13分西傾している。グリッドは東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、この組み合わせにより表示した。大グリッドはさらに2m方眼に25分割して１～25の小グリッドとした。

上述したように同一調査区内でグリッド軸が異なり、整理作業を進める上で様々な問題が生じてきたため、平成７年度設定のグリッド軸を基準とし調査区全体にかかるグリッドを新たに設定した（第４図）。

2　基本層序

遺跡は北東向きの緩斜面に位置しており、標高241～245mを測る。土層は基本的に地形の傾きに沿って堆積するが、場所によって一部土層の欠落、土質、色調に若干の相違が認められる。基本層序はⅠ～Ⅳ層に区分される。

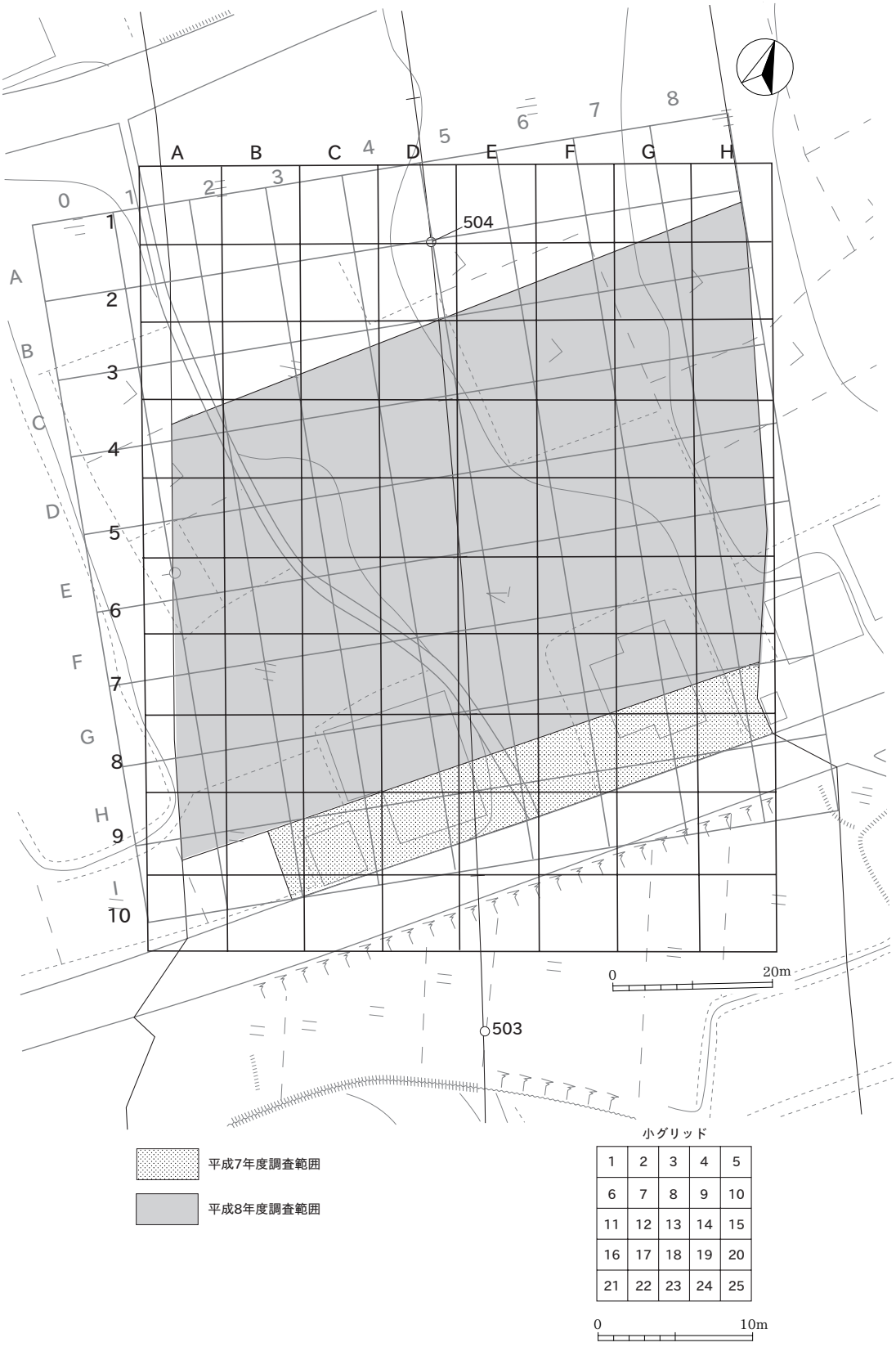
遺物包含層はⅡ層である。縄文時代早期中葉から前期初頭の遺物が主体となるが、中期・晩期の遺物も数点含まれる。なお、遺物はⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層から出土している。

Ⅰ層：表土層。黒褐色を呈する。しまりは強い。径５～10mm程度の礫を少し含む。

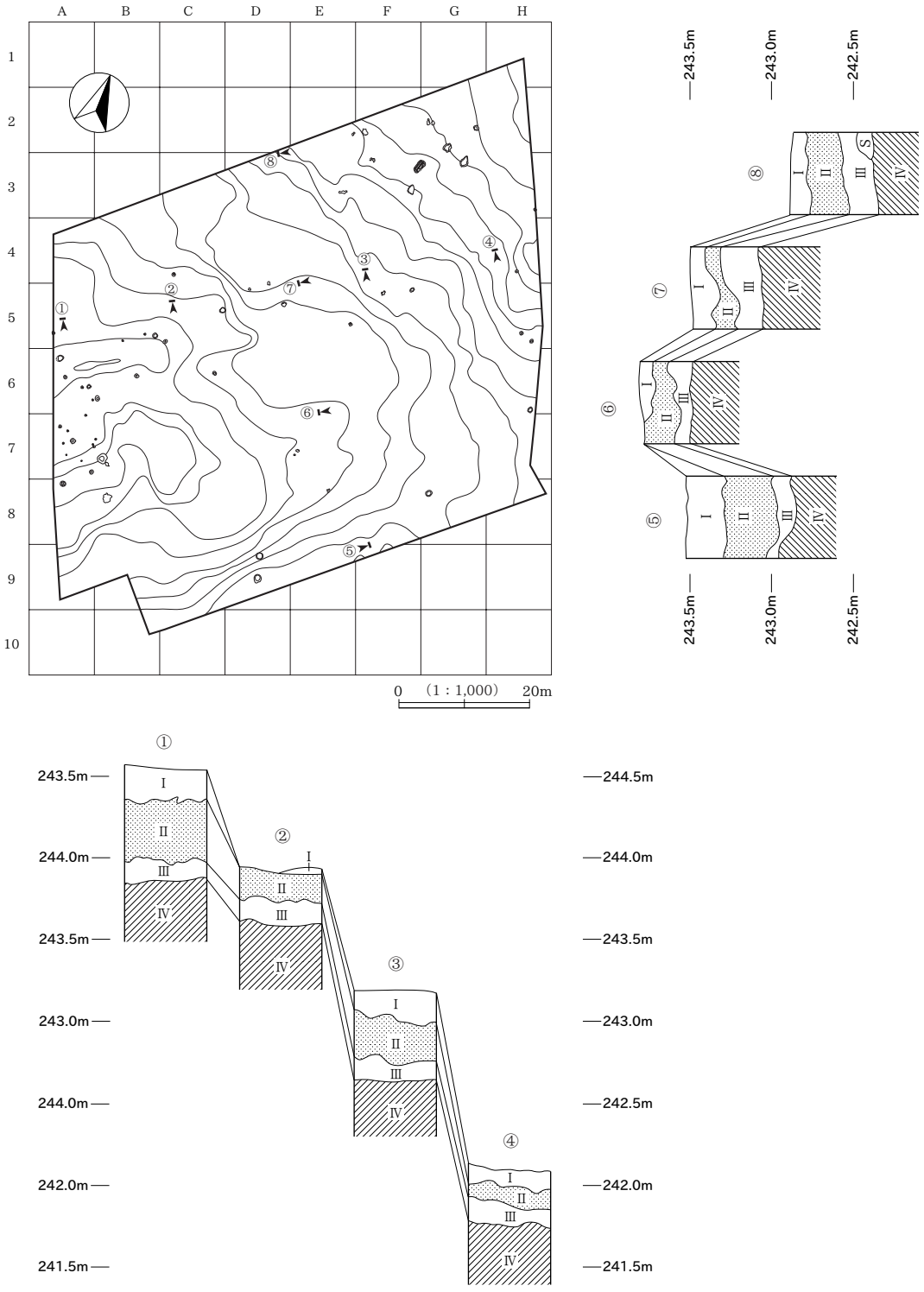
Ⅱ層：黒色土。主に縄文時代早期後半から前期初頭の遺物を包含する。粒子は均質だが粘性は弱い。しまりがある。径5mm程度の礫をやや多く含む。

Ⅲ層：黒褐色～暗褐色土。粘性は弱くしまりがある。径5mm程度の礫を少し含む。Ⅳ層との漸移層。

Ⅳ層：矢代川岩屑なだれ堆積物である。黄褐色～褐色土を呈し、礫塊を含む。この層が遺構確認面である。


A
B
C
D
E
F
G
H
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
504
503
0
20m
平成7年度調査範囲
平成8年度調査範囲
小グリッド
1 2 3 4 5
6 7 8 9 10
11 12 13 14 15
16 17 18 19 20
21 22 23 24 25
0
10m

第4図　グリッド設定図


A B C D E F G H
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
0 (1 : 1,000) 20m
243.5m
243.0m
242.5m
⑧
⑦
⑥
⑤
I II III IV S
①
②
③
④
244.5m
244.0m
243.5m
243.0m
242.5m
242.0m
241.5m

第５図　土層柱状図

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

八斗蒔原遺跡では集石土坑１基、集石１基、土坑26基、ピット18基、焼土遺構13基、炭窯１基が検出された。遺構は調査区の北東側と南西側に分かれる傾向が認められるが、散在している。遺物のほとんどが包含層出土であることから、遺構の所属時期は明確にできない。ただし、炭窯とSK15については、火山灰と思われるものが覆土に含まれ、古代と推定される。

記述の方法

遺構名は遺構種別の略称と通し番号を組み合わせて表記した。土坑は「SK」、ピットは「P」である。集石、炭窯についてはそのままの表現とした。遺構の平面および断面形態については、和泉Ａ遺跡［荒川ほか1999］の分類に従った。

2　各　　説

各遺構については観察表を作成した（別表1）。よって記述は主要な遺構のみにとどめる。

１号集石土坑（図版２・18）

7Cに位置する。長径125cm、短径105cmを測り、円形を呈する。検出時に土坑と認識できなかったため、南側の平面図は推定である。土坑の底面は起伏があり、立ち上がりは急である。出土した礫の大多数は矢代川岩屑なだれ堆積物（Ⅳ層）に含まれる安山岩と思われ、亜角礫あるいは亜円礫である。礫は被熱しており、中心部ほど赤変の度合いが高くなっている。

２号集石（図版２・17）

5Bに位置する。出土した礫は集石土坑同様、矢代川岩屑なだれ堆積物に含まれる安山岩と思われる。磨石類２点、特殊磨石１点が出土した。

SK19（図版２・18）

3Gに位置する。長径186cm、短径114cmを測り、不整形を呈する。Ⅳ層上面で検出された。底面は凹凸があり礫が多く見られる。覆土は２層に分けられるが、いずれの層からも砂岩の砕けたような砂礫をわずかに含む。SK19の西約80cmにSK18が位置するが、形態や覆土が近似しており、同時期のものと推測される。どちらの土坑からも遺物が出土していないため、所属時期は確定できない。

SK1（図版２）

6Hに位置する。長径85cm、短径75cmで不整形を呈する。Ⅲ層で検出された。底面はほぼ平らで、断面は逆台形状である。土坑壁の立ち上がり部分から沈線文系土器が１点（図版４－１）出土した。

SK2（図版２）

5Hに位置する。長径61cm、短径51cmを測り、不整の円形を呈する。Ⅲ層で検出された。覆土は細かい砂礫をわずかに含み、しまりがない黒色土で、地山との境界は明瞭である。SK2の西約1mにSK3が位置するが、覆土の様相が近似しており、同時期の所産と考えられる。出土遺物はなく所属時期は不明である。

SK12（図版３）

6Aに位置する。長径68cm、短径52cmを測り、不整形を呈する。Ⅲ層で検出された。掘り込みは明瞭である。押型文土器の細片が２点（図版４－６）出土している。

SK27（図版３・20）

9Dに位置する。直径106cmの円形を呈する。Ⅲ層で検出された。覆土は0.1～4cm程度の砂礫を多く含む黒色シルトの単一層であるが、底面近くは地山面に沿って褐色味を帯びている。底面に礫が見られる。

ピット（図版１）

18基検出された。大半が6A・7Aに集中している。長径平均35.8cm、短径平均33.8cm、深さ平均17.9cmである。P6～11・13のまとまりは楕円形を描いている。掘り込みは確認されなかったが、竪穴住居が存在した可能性も考えられる。住居と考えた場合、推定長径は7.9mとなる。

焼土遺構（図版３・22）

13基検出されており、検出面はⅡ層である。規模は平均で長径82cm、短径48cm、深さ11cmである。土坑や遺物の比較的集中する南西側においても分布は散漫的である。南西側に位置する３号焼土・４号焼土にのみ炭化物が認められた。地面を掘り込んだ痕跡は認められなかった。

３号焼土からは押型文土器の細片１点（図版４－９）が出土している。

１号炭窯（図版３・21・22）

3F・3Gに位置する。長径430cm、短径216cmを測り、長楕円形を呈する。南東側は一次調査のトレンチにより削平されている。同形態の炭窯は中郷村郷清水遺跡など妙高山麓一帯で多数の検出例があり、それらの覆土には焼山火山灰（KG－cか）が入る。KG－cは約1,000年前の降下とされている［早津1994］。１号炭窯も同様の土が確認され、平安時代の伏窯と考えられる。

この形態の伏窯は、炭材を置いた上に、細い木・木の葉などを載せ、さらに土を被せ、焚き口を密閉して焼くというものである［遠藤1995］。長軸は南北方向である。遺跡の地形は北に向かって緩やかに標高を下げているため、焚き口を南側、煙道を北側に設定したものと思われる。また、遺跡の立地する中郷村は妙高山麓の山裾にあたるため、四季を通して南北方向の風が多く、特に南から吹く風は「妙高おろし」と呼ばれている［細谷1978］。郷清水遺跡でも炭窯の多くが南北方向を長軸として構築されていた［立木（土橋）ほか1997］ことから、地形とあわせて風向きも考慮されていたことがうかがえる。

底面の外縁と中央には浅い溝がめぐる。この溝の用途については説が分かれている。焚き口と煙道を結ぶ空間を造りだすことにより火の回りを良くするものと考える説［小池ほか1998］、もう１つはこの溝に丸木を設置し、木材を橋渡しするように並べるためのものと考える説［遠藤1995］がある。

炭化材の樹種を分析したところ、すべてブナ属という結果が得られた。本遺跡周辺に位置する郷清水遺跡・上中島遺跡などでも全点ブナ属であった。やや離れたところに位置する関川谷内遺跡では全点コナラ属という結果が出ている。立地および植生環境はそれほど変わらないと思われるが、この傾向の違いは注目される。

SK15（図版３・21）

炭窯の南約1m、3Fに位置する。長径140cm、短径は残存長100cmである。東側は一次調査のトレンチにかかり不明だが、不整の円形を呈するものと推測される。１層から焼山火山灰と推定される土が斑状に含まれ、１号炭窯に近接することから、これに伴う遺構と考えられる。炭窯に隣接して不整形の土坑が伴う例は、中郷村野林遺跡などに類例があり、窯を被覆する土が掘り出されたもの［小池ほか1998］と考えられている。この土坑もそれらと同様のものと思われる。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

八斗蒔原遺跡から出土した遺物には、縄文時代早期から晩期、古墳時代、古代のものが存在する。このうち主体となるのは縄文時代早期中葉から前期初頭である。遺物量は土器が平箱で29箱、石器７箱である。遺物はほとんどが包含層からの出土であるため、全体の様相が把握できるように図化した。

2　土　　器

縄文時代早期中葉から前期初頭の土器が約97％を占める。包含層であるⅡ層からの出土が多いが、Ⅰ層からもかなり多く出土している（第1表参照）。

掲載したすべての遺物については、出土位置・種別・法量・調整・胎土・焼成・色調などを観察し、巻末に遺物観察表としてまとめた。よって、この項では観察表からは読み取れない情報を中心に、特徴的な遺物についてのみ記述する。縄文時代早期から前期の遺構出土土器、包含層出土土器、その他の時期の土器の順で述べる。

A　分　　類

縄文時代早期中葉から前期初頭の土器について系統別にⅠ～Ⅳ群に分類し、さらに文様などの要素により細分した。

Ⅰ群　押型文土器

A類　山形文を施すもの。

B類　楕円文を施すもの。小破片が多いためC類のものを含んでいる可能性もある。

C類　異種文様を併用するもの。

1種　楕円文＋山形文。

2種　楕円文＋矢羽状山形文。

3種　楕円文＋重層山形文。変形と考えられるものを含む。

4種　楕円文＋格子目文。

5種　楕円文＋平行線状文。

Ⅱ群　沈線文土器

A類　太い沈線を施すもの。

B類　単沈線あるいは2本同時施文の沈線を施すもの。

1種　押引沈線を施すもの。1点のみ（57）である。

2種　沈線間に刺突文などを加えるもの。

3種　それ以外のもの（沈線文のみ）を一括した。

	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	不明	計
Ⅰ　群	100	132	7	6	245（7.0%）
Ⅱ　群	426	620	19	49	1,114（32.0%）
Ⅲ　群	22	37	4	1	64（1.8%）
Ⅳ　群	189	342	15	30	576（16.6%）
無　文	506	764	39	91	1,400（40.3%）
異時期	12	40	3	23	78（2.2%）
計	1,255 （36.1%）	1,935 （55.7%）	87 （2.5%）	200 （5.7%）	3,477（99.9%） （100.0%）

（数値は破片数を表す）

第1表　縄文土器出土状況

C類　貝殻腹縁文を施すもの

1種　入り組んだ沈線区画に貝殻腹縁文を充填するもの。口縁部と胴部に施文する場合が多い。

2種　横位沈線を主として貝殻腹縁文を充填するもの。

3種　鋸歯文に沿って貝殻腹縁文を充填するもの。

4種　それ以外のものを一括した。

D類　細沈線文を施すもの。

1種　細沈線文間に刺突文を加えるもの。

2種　細沈線文を主とするもの。

E類　沈線文＋貝殻腹縁文＋絡条体圧痕文を施すもの。1点（227）のみ。

Ⅲ群　条痕文土器

A類　絡条体押圧を主とするもの。

B類　絡条体押圧と回転手法を組み合わせるもの。

1種　絡条体圧痕文＋縄文。

2種　絡条体圧痕文＋撚糸文。

3種　絡条体圧痕文＋絡条体回転文。撚糸文と縄文の2種類が認められる。

C類　内面に縄文あるいは条痕を施すもの。いわゆる縄文条痕系土器である。

1種　外面に縄文、内面に条痕を施すもの。

2種　内外面とも縄文を施すもの。

Ⅳ群　羽状縄文系土器

A類　口縁部に隆帯をめぐらせるもの。

1種　撚糸側面圧痕を有するもの。1点（250）のみ。

2種　それ以外のもの。

B類　縄文のみで構成されるもの。

1種　羽状縄文を施すもの。

2種　斜行縄文を施すもの。

C類　撚糸文を施すもの。

Ⅰ～Ⅳ群のほか、無文の土器が多く出土している。この中にはⅠ群に伴うと考えられている、いわゆる無文土器も多く含まれていると思われる。しかし口縁部破片は数点のみの出土であり、胴部破片はⅡ群が混在している可能性が高いため、上記4群のような分類は行わなかった。

B　各　　説

1）遺構出土土器

SK1（1）　Ⅱ群D2類である。矢羽状に細沈線を施す。口縁内面の刺突文は深く、密に施文される。

SK5（2～4）　2・3はⅡ群である。4の底部も同系統の可能性が高い。底部から胴部に向かってケズリが行われている。

SK15（7・8）　7はⅡ群D1類である。横方向の細沈線間に刺突文が充填される。原体は1種類と思われ、1単位8本程度、1.4cm前後の櫛歯状工具と推測される。包含層出土の160と同一個体であろう。8はRL単節縄文を施す。

2）包含層出土土器

土器はⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層から出土しているが、層位による時期区分は不可能であるため、層位別ではなく分類別に図版を構成した。以下、分類ごとに述べていきたい。

Ⅰ群　押型文土器（10～52）

A類（10～12）　10は山形文が帯状施文される。原体長[1)]は25mm前後である。11・12は同一個体の可能性がある。山形文の密接施文で、横位主体だが底部では縦位に変わる。器厚は10mmと厚い。この個体は雲母が特に多く認められる。繊維痕は、肉眼で観察した限りでは3点とも認められなかった。

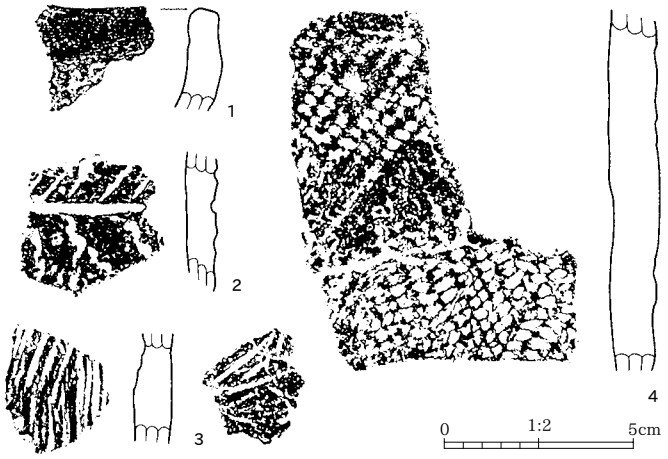
B類（13～35）　Ⅰ群のうち最も出土量が多い。ただし、ほとんどが小破片であるためC類になる可能性もある。13・14・17を除いては密接施文である。楕円粒は多少の大小はあるものの、すべて穀粒状で大形と呼べるものは存在しない。原体長は15・19が25mm、16・24が37mm、27が35mmで、比較的長い原体を使用しているものと思われる。全点で繊維痕が確認できる。口縁形態は端部が丸味を帯びるもの（17・18・24・26・27）と端部に面を持つもの（15・16・19～23・25）に区別できるが、ほぼ直立するという器形は両者とも共通しており、外反する器形は見られない。35は横位施文した上に、一部斜位に施文している。斜位施文の原体長は17mm前後であろう。横位施文の原体長は不明であるが、楕円粒の大きさや形態が近似しており、斜位施文の原体と同一のものを使用したと考えられる。松ヶ峯No.237遺跡［小島1993］・関川谷内遺跡［土橋2003］にも横位＋斜位の類例が見られる。

C類1種（37）　山形文の溝は0.5mmと非常に細い。山形文原体の上下に、横位の溝を2条ずつ彫り込んでいる。原体長は27mmである。

C類2種（38～43）　県内での類例は少なく、現在のところ、松ヶ峯遺跡群［小島1991・1993］、おざか清水遺跡［佐藤ほか1994］で見られる程度である。42は山形文1単位の両側に梯子段状モチーフが彫り込まれる。43は矢羽状とならず同一方向の斜線となるが、モチーフが類似することからこの類に含めた。

C類3種（44～50）　44・46～50は山形状ではなく菱形状のモチーフとなる。3種の変形と考え本類に含めたが、菱形文あるいは複合鋸歯文などといった名称を考える必要があるかもしれない。44については2種のモチーフが崩れたものとも考えられる。46の菱形文原体は40mm以上と推定される。

C類4種（51）　本遺跡からは1点しか出土していない。格子目は非常に



第6図　土器実測図

1）「焼成時に多少の収縮があるとしても、ほぼ原体の長さに相当するものと考えられる」［小熊1997］ため、ここでは原体長という語句を使用する。

細かい。

C類5種（36・52）　52は楕円粒間の間隔が他と比べて広く、形状は横長である。平行線状文は横位であるが、一部縦位施文も見られる。36は小破片のため文様構成は不明であるが、横位楕円文の下に斜位の平行線状文らしき文様を施す。この平行線状文は回転ではなく原体引きずりによるものと考えられる。平行線状文ではなく山形文の可能性もある。さらに下位には楕円文が斜位に施文される。器厚は4mm、薄いことが特筆される。

第6図1はⅠ群に伴うと思われる無文土器である。口縁部が2点出土した。

Ⅱ群　沈線文土器

A類（53～55）　53は浅く太い横位沈線を施す。54は横位沈線2条を区画文として多段構成をとるものである。区画内には複合鋸歯文を充填する。一部押引沈線が認められる。端部は面を持ち、同一工具による押圧がなされる。55は端部面の幅が広く、面取りされる。胎土に雲母を多く含み、繊維痕も比較的顕著である。

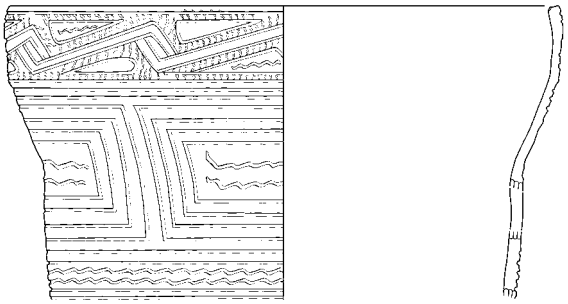
B類1種（57）　頸部に段を有する器形で、口縁部文様帯と胴部文様帯とに分かれる。口縁部は波状文と横位沈線を区画文とし、区画内を複合鋸歯文で充填する。押引沈線によるものだが、すべてが押引ではなく単沈線も含まれている。複合鋸歯文の上にも横位沈線・波状文を描く。口縁端部の刺突文と外面の刺突文の方向を変えることで矢羽状とする。胴部は細く鋭い工具で斜格子目文を施し、その上に波状文を2条1単位で数段施文している。

B類2種（56・65・76・80・99）　65の刺突文は櫛歯状工具によるものであり、7などの刺突と類似する。D2類の可能性もある。56・76の沈線は2本描きと思われる。56はV字の頂部に、76が弧状沈線間に刺突文を施す。76の刺突文原体は貝殻の可能性がある。また、内面はミガキ調整される。80の沈線は非常に細く、幅は均一でない。沈線間に丸棒状工具による刺突が加えられる。

B類3種（58～64・66～72）　多く見られる文様パターンが2種類ある。一つは波状文もしくは鋸歯文である。61・62は口縁に平行する沈線であるが、波状口縁のため山形状を呈する。63は破片資料のため断定はできないが、複合鋸歯文になると思われる。沈線は非常に細く、器厚も3～4mmと薄い。68は条痕地文で、2本の沈線を区画として鋸歯状もしくは山形状文を施すと思われる。68aの端部は擬口縁である。もう一つは横位沈線間に波状文もしくは山形文というパターンであり、70～72が該当する。貝殻腹縁文を加えればC2類となる。これらはすべて破片資料であり、胎土も区別されないためC2類に含まれる可能性を有する。72の口縁端部には押引沈線、内端には細かい刺突文を施す。口縁外面の横位沈線も、間隔は長いが処々に止めたような痕跡を残し、押引沈線状となっている。

C類1種（73・81～98・100～107）　口縁部と胴部に文様を描くものが多い。口縁形態は波状縁と平縁の2種類が認められるが、平縁のものが多い。C類のうち、口縁部が残存する28個体をみると、波状縁2個体（7.1％）、平縁18個体（64.3％）、不明8個体（28.6％）であった。平縁のものが多いことが特徴的である。82・83は沈線が細く、貝殻原体の放射肋の幅も細い。他の個体と区別され得る。82は山形のモチーフ頂部に円形の刺突文を施す。刺突文の工具は沈線を描いた工具と同一と思われる。84・93は口縁部と胴部に文様を描くタイプである。口縁部に鍵手状入組文を描き、以下の文様帯を微隆帯で区画する。84は新東京国際空港No.7遺跡［西川ほか1984］から出土した田戸上層式土器として有名な完形土器（報文第52図7）と文様パターンが同一であり、同様の器形となるものと思われる。93は入組文に加え

て、それが変化したと思われるモチーフも描かれる（93c・d）。93e・f・gは口縁部と頸部の境であるが、モチーフがそれぞれ微妙に異なる。胴部には重四角形のモチーフが描かれる。沈線区画の中に短い波状文を配するのが特徴的である。区画内に波状文というモチーフのみ見た場合、関東地方には見られず、むしろ青森県千歳遺跡［北林ほか1975］に存在する。73は93の同一個体と思われる。破片が接合せず実測図上での表現が困難であったため、文様のモチーフ推定図を第７図に示す。83・85～90はクランク状のモチーフが描かれるが、これは鍵手状入組文が変化したものと考えられる。83は長野県飯山市新堤遺跡［飯山市教委1991］の例と同類であろう。86・88・89・92のモチーフは飯山市貫ノ木遺跡［中島1998］に類例がある。口縁端部に刺突文がめぐる例も多い。貝殻腹縁によるものと棒状工具によるものが認められる。84・86・90・93・115は微隆帯により口縁部文様帯と胴部文様帯とを区画している。微隆帯は田戸上層式古段階における特徴のひとつであるが、県内ではほとんど認められず、特筆される。90の微隆帯上の刺突文は非常に浅く、口縁部の貝殻腹縁文原体と放射肋の幅が一致することから、貝殻による刺突と考えられる。76の沈線間の刺突文はこれと近似していることから貝殻による刺突と考え、本類に含めた。95～98・100～107は斜位沈線や曲線的な沈線の間に貝殻腹縁文が充填されるものである。文様構成は不明であるが、平行パターンをとらないと予想されることからこの類に含めた。100は貝殻原体の押圧方法に変化をつけている。破片の上部は貝殻表面を下に向け、器面に対して斜位に、下部は器面に直交するように押圧したものと考えられる。



第７図　土器93モチーフ推定図（S=1：4）

Ｃ類２種（74・75・78・79・112～128）　横位沈線と波状文を組み合わせる例がほとんどである。破片資料が大多数を占めるため断定はできないが、115のように口縁部のみに施文するタイプのものが主体となると推測される。74・75は口縁端部の刺突文の有無から別のNo.を付したが、胎土・調整等が非常に近似しており、同一個体の可能性もある。78・79も上記２個体と同一個体の可能性がある。条痕調整で、横位沈線間に刺突文を充填する。刺突文の原体は、放射肋で刻まれることのない、腹縁が平滑な貝殻と推測される。福島県のいわゆる常世１式に類するものと考えられる。貝殻腹縁は斜位に施すものが多いが、沈線に沿って横位に施すもの（123～128）もある。これらは貝殻原体も異なり、放射肋幅の広いものを使用したと考えられる。121は波状文の上下にわたって貝殻腹縁文を充填しており、当遺跡ではこの１点しか見られない。

Ｃ類３種（135～141・145・146）　鋸歯文に貝殻腹縁文を平行に充填するものであるが、１種・２種に比して貝殻文の放射肋の幅が広い。多くのものは殻表面を下にして施文しているものと考えられる。135の口縁端部に使用した貝殻は放射肋の幅が広い。沈線の原体は幅1mm前後の細く鋭い原体で施文されるものが目立つ。137の口縁部は、横位沈線を１条ひいた後、沈線を埋めるように貝殻腹縁文を横位に施す。沈線を挟んで上下２段に施文した可能性もある。内面には同一原体による刺突文がめぐる。

Ｃ類４種（76・77・108～111・129～134・142～144・147～156）　貝殻腹縁文を施すもので、上記３種以外を一括した。108・110・111は１種あるいは２種である可能性が高いが、文様構成が不明なため本類に含めた。110・111は鋸歯文を施している。県内での類例は意外と少なく、糸魚川市岩野Ｅ遺跡［高橋ほか1986］・下田村長野遺跡［家田ほか1990］で見られる程度である。131～133は同類で

あろう。貝殻腹縁文を横位沈線間に平行方向に充填する。142以下は文様構成が判然としない。150・152・155は口縁部など区画する部分以外には沈線が施されず、貝殻腹縁文のみのパターンとなる可能性がある。第6図2は横位沈線を挟んで貝殻腹縁文が施され、矢羽状を呈する。貝殻原体は上下で異なる。C2類に含まれる可能性もある。

D類1種（157～166）　細沈線文を一面に施さず、施文しない無文部分に沿うかたちで刺突をめぐらせる。刺突文を施す工具は一様ではない。篦状（157～159）・丸棒状（162・164）・角棒状（165）・竹管状（166）・複数状を1単位とするもの（160・161・163）が認められる。163の工具は2本1組で緩く結束させたものと思われる。細沈線文はほとんどが斜方向施文で、その組み合わせにより矢羽状や変形菱形状を呈する。

D類2種（167～226）　当遺跡で最も多く出土している。ほとんどが破片資料であり、D1類になる可能性を有している。口縁部に刺突文を有するものが9割近くを占める。細沈線の施文具は棒状のものを複数本束ねて1単位としたものと考えられるが、単位が判然としないものが多く、半截竹管状原体の「先端が不揃いで先端の割れた」工具［阿部1997］が当遺跡でも多く使用されていると考えられる。川口町西倉遺跡［佐藤1988］例のように、明確に単位がわかるものは本遺跡では少ない。貝殻条痕の可能性があるものは172のみである。細沈線は斜方向に施されるものが多数を占め、矢羽状や菱形状を呈するものもある。また、稀に格子目状（200～203）とするものも見られる。223は条痕文系としたほうが良いかもしれない。

E類（227）　1個体のみ出土した。横位沈線の施される付近で、わずかだがくびれが認められる。沈線は1本描きと思われる。左側は何らかのモチーフが描かれる可能性もある。絡条体側面圧痕（以下、絡条体圧痕）が1か所認められる。絡条体の巻きは非常に細かい。

Ⅲ群　条痕文土器（絡条体圧痕文土器）

A類（228～238）　隆帯を有するものが多く見られる。228は小波状を呈するものと思われ、波状の頂部を三角形の頂点として三角形の隆帯をめぐらせる。口縁は12単位ほどの波状になると推測される。229～233は口縁部に横位の隆帯を有する。隆帯が2段になるもの（229～231）は、隆帯上の絡条体圧痕の施文方向が変えられ、矢羽状を呈する。233は横位隆帯の下に撚り紐を軟軸に巻きつけた曲線状圧痕が認められるが、当遺跡ではこの1点のみである。施文原体の長さ[1)]は25mm程度と推定される。234は口縁部にT字状の隆帯を有し、絡条体圧痕による鋸歯文が隆帯間に施文される。絡条体はいわゆる「芋虫状」であり、撚り紐は間隔をおいて巻かれている。胎土に繊維が多量に含まれているためか非常に軽く、器面は灰色から灰白色を呈する。Ⅲ群・Ⅳ群には234のように非常に軽く、灰色～灰白色を呈する土器が少量だが認められる。237は口縁部にUの字状の隆帯を有する。希少な例である。隆帯を貼り付けた後、微隆起線を4条作り出している。本類では、内面に絡条体条痕と思われる調整痕を残すものが存在する。

B類1種（239～241・243・244）　地文の縄文はほとんどがLRかRLの単節縄文である。240・241の施文原体の長さは20mm前後と想定される。243は口縁に4単位の山形状の突起を持つものと思われる。244は口縁外面に絡条体側面圧痕を施すが、絡条体の節間は緻密である。外面の低い隆帯は、沈線を引き上下からの刺突を施すことによって作り出している。内面は条痕調整であるが、口縁部施文に使用

1）軸に巻きつけられた撚り紐の節の長さのことをここではこう呼称する。巻きつける軸や、自縄自縛の場合の原体自体はもっと長くなると思われるが、土器観察からは判別不可能であり、ここでいう「施文幅」は原体長と一致しない。

した絡条体とは異原体によるものである。

B類2種（245）　245は撚糸文を地文とし、直線状の絡条体を縦方向と斜方向に押圧する。

B類3種（242・246）　242は口縁部に芋虫状の絡条体を2列2段、横位に押圧して横位区画としている。下位は絡条体を縦位に回転した縄文LRが施される。口縁端部にも縄文が施文される。絡条体を回転させたものであろうか。246の撚糸文は、口縁部から胴部にかけては縦位施文[1)]であるが、胴部下半は多方向から施文する。口縁端部も絡条体回転の撚糸文を施す。地文施文後に横位隆帯を貼り付け、隆帯上に斜方向の絡条体側面圧痕を施す。

C類1種（247・248）　247は244の口縁の絡条体圧痕を除けば、同じ文様となる。248の口縁端部は面取りされ、内剥ぎ状を呈す。

C類2種（249）　外面の縄文は原体2種、0段多条と単節縄文を使用し、多方向から施文する。内面は不明瞭であるが、0段多条縄文のみであろうと思われる。第6図3は内外面条痕を施す。本遺跡ではこの小片1点のみである。

Ⅳ群　羽状縄文系土器

A類1種（250）　口縁部貼付隆帯よりも上部を無文、下部はLR単節縄文を施す。無文部分には1段撚りRとLの2本組を軸に巻きつけたものを曲線状に押圧する。隆帯上には丸棒状工具の側面を斜位に押圧する。

A類2種（251・252）　どちらも隆帯上に丸棒状工具による側面圧痕を有するが、251は縦位、252は斜位に施す。また、251は帯状の斜行縄文、252は非結束羽状縄文となっている。

B類1種（253～258・260・261）　いずれも非結束で、RL・LRの異方向施文により羽状を描き出す。原体は単節のものが多く使用されるが、多条のものも認められる。菱形状を呈するもの（258・260）と、単なる羽状のもの（253～257）とに大別される。小破片資料は菱形状になる可能性もある。254の撚りは非常に細かく、原体幅も小さいと推測される。257の左端は原体を縦位施文した痕跡と思われる。260・261は縄文LR・RLを縦位に施す。第6図4は縦長の菱形構成をとるものである。1点出土した。縄文LR・RLを縦位・横位に施していると思われる。

B類2種（259・262～266・268・272・273）　1種同様、単節縄文が多い。262・263はLR単節縄文を斜位に施す。265は灰色を呈し非常に軽い。RL単節縄文を施す。273は縄文がほぼ1条おきに抜けている。これは原体の撚り方が不均一で、隣り合う条に高低ができたため［野口編1981］と考えられる。268は緩い波状口縁となり、4単位と推定される。口縁は外剥ぎ状を呈し、丸棒状工具側面圧痕を有する。0段多条縄文が施されるが、1条の横位沈線を区画として上位は横位、下位は斜位と施文方向を変えている。底部外面にも縄文が施文され、外端には角棒状工具による側面圧痕が見られる。

C類（267・274～276）　いずれも1段撚りR・Lの2本組を軸に巻きつけた原体を用いている。267の原体は縄を比較的密に巻きつけている。275は非結束の羽状撚糸文である。軸に縄を、間隔を開けて斜方向に巻きつけている。下段は原体端部処理痕が明瞭に残る。276の下部は、縄の軸への巻きつけ方が緩く、やや崩れた感じになっている。267と274、275と276はそれぞれ同一個体の可能性もある。

底部（269～271）　底部の出土は非常に少なく、4・224・268と合わせても合計7点（1点不掲載）

1）ここでは、「縄文施文法入門」（［野口編1981］）に従い、「縦位」＝原体を縦方向に回転する、「縦走」＝縄文の条が縦方向であるという意味でこれらの語句を使用している。

である。269は実測図からは読み取れないが、突起を持ち、269～271はいずれも乳房状となる。押型文系土器の底部と思われる。

3）その他の時期の土器（277～294）

277の胎土は細かい白色粒子を含み、砂っぽい感じである。やや鋭い棒状工具で山形ないし波状口縁の形に沿って沈線が4条ずつひかれる。前期末葉に位置づけられると思われる。278は柔軟性のある櫛歯状工具により3段の刺突列が施される。胎土は277に類するが、所属時期は不明である。279・280は中期前葉から中葉に属するものであろう。281は単節縄文RLが施されるが、撚りが細かい。282は羽状縄文を施すものだが、繊維が全く混入せず胎土が異なることから、ここに含めた。内面は平滑にされている。281・282とも所属時期は不明である。

285～292は晩期に属する土器である。285は波状口縁を持つ。渦巻状の文様が描かれ、沈線内は赤彩される。晩期前葉のものと考えられる。286は小破片のため口縁の形状は不明だが、やや盛り上がる部分があり、小突起を持つ可能性がある。沈線内には赤彩が残る。晩期中葉、佐野Ⅱ式に比定されるものであろうか。287は浅い沈線を2条ひき、沈線間は押圧に近い刺突文がめぐる。大洞C1式に比定されると思われる。288は横位沈線と爪形状の刺突文が交互に配される。外面は炭化物が付着している。佐野Ⅰ式に比定されると考えられる。289～292は粗製の深鉢である。289は内湾気味に立ちあがる器形、292は口縁部が屈曲して開く器形である。290は口縁内面に、291は口縁外面に横位沈線を有する。いずれの土器もミガキ調整される。

293は口径10.6cm、古墳時代前期の小型壺と考えられる。294の口縁部はわずかながらロクロナデにより直立気味になる。おおよそ9世紀に位置づけられると思われる。

C　縄文土器の分布

Ⅱ層出土土器の分布を第8図～第11図に示す。

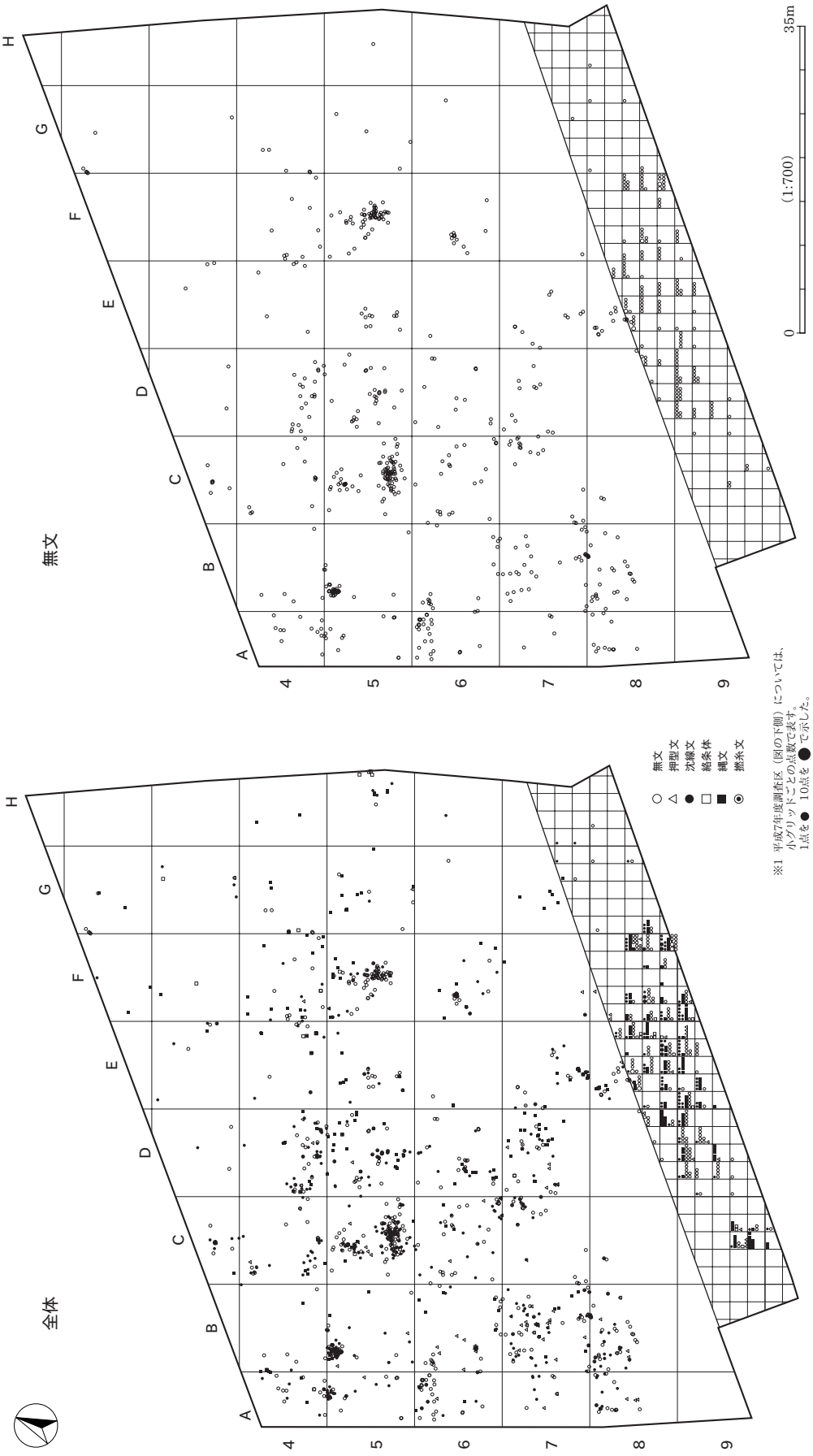
Ⅰ群土器は遺構が比較的多く分布する調査区西側に偏って分布している。分類別では1種が7E・7F・8Gから出土しており、全体の集中域とは異なるように見えるが、点数が非常に少ないため分布が異なるとは断定できない。2種から5種については特定の傾向は認められなかった。

Ⅱ群土器については南北4～8グリッド、東西A～Fグリッドにおおよそ収まる。分布範囲はⅠ群よりも広いと言えるかもしれない。集中地点が何か所か見られるが、5Aの集中地点はNo.57、5BはNo.307、5CはNo.93の同一個体破片が主体となっている。

Ⅲ群土器は点数が少なく不明な部分もあるが、敢えて言うならばD・Eグリッド付近で、線状に分布する。Ⅳ群土器もおおむねⅡ群土器の範囲に収まる。5Aの集中地点はⅡ群の集中地点（No.307同一個体）とほぼ重なる。D類は6D・7D・7Eに集中する。

縄文土器が比較的集中している2か所については、平面的分布に加えて垂直的な分布を検討した。A範囲ではⅠ群土器が比較的下位にまとまっているが、その他は各群混在しており、群別で層位的に上下に分かれるというような傾向は認められなかった。

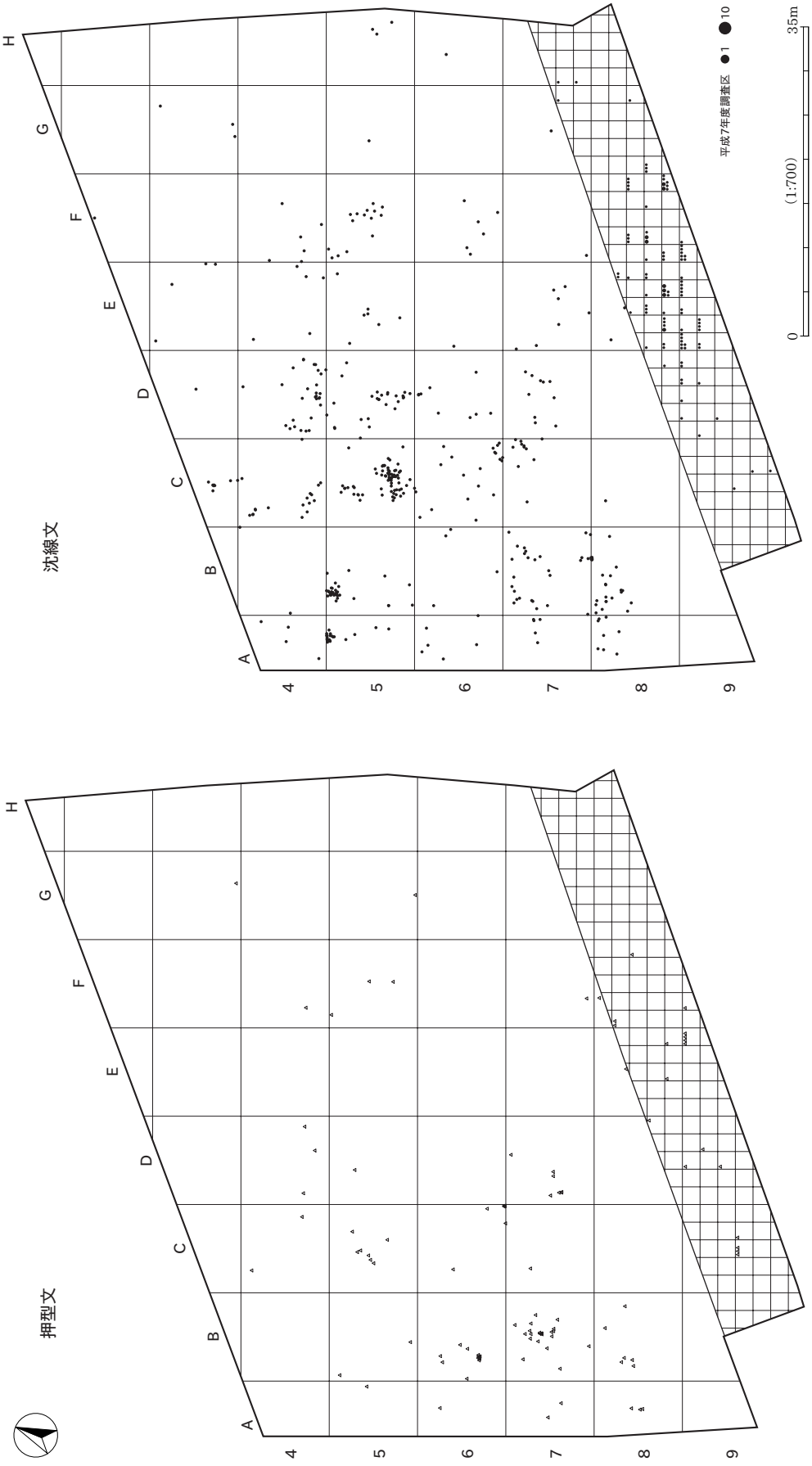
各群とも微妙な違いはあれど分布状況はそれほど異なるものではなく、はっきりとした傾向は見出せなかった。特に、Ⅰ群とⅡ群の分布は注目されるところであるが、やはり特定の傾向は認められなかった。



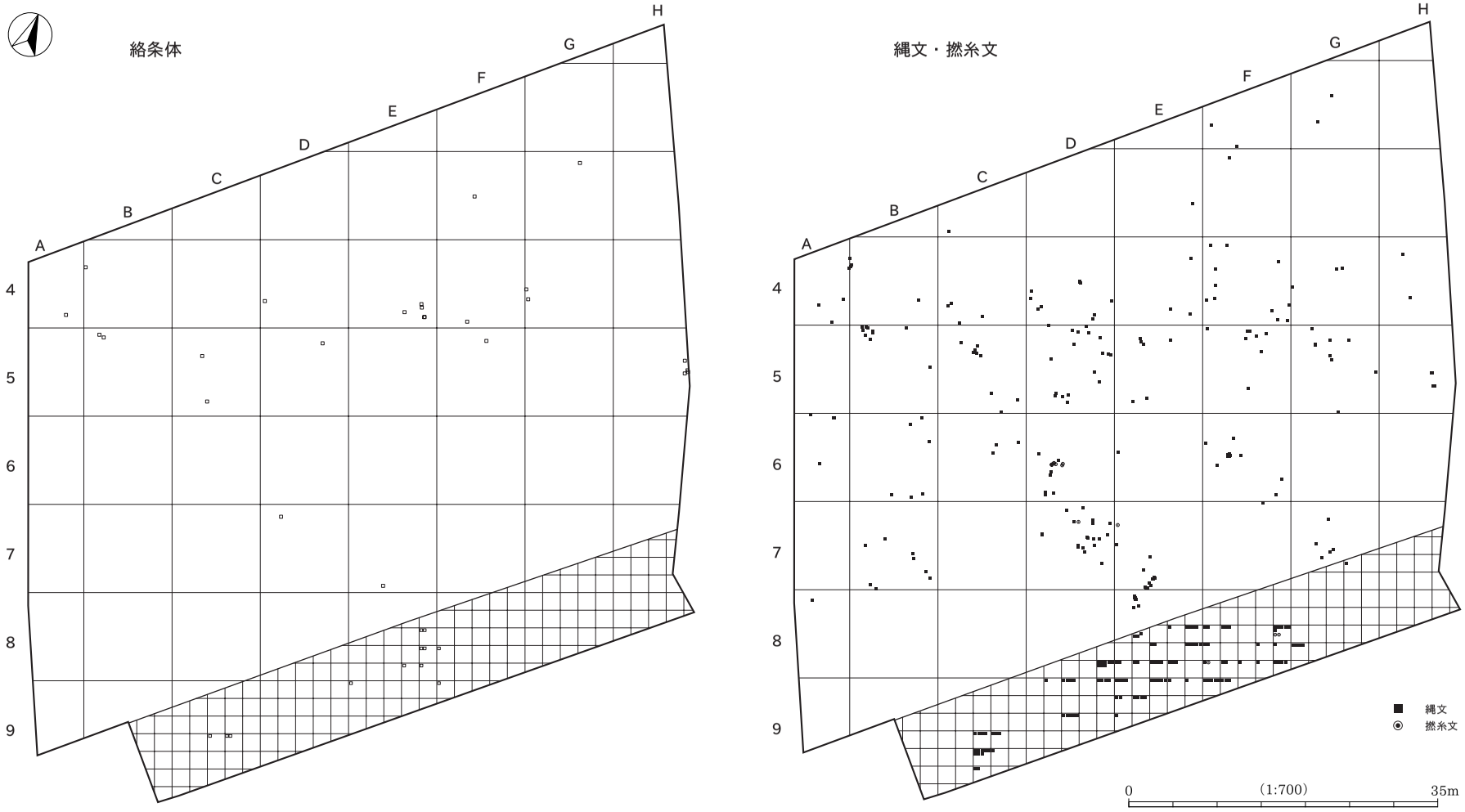
※1 平成7年度調査区（図の下側）については、小グリッドごとの点数で表す。
1点を● 10点を ● で示した。

※2「無文」は文様のない破片としたため、いわゆる無文土器の他に、沈線文系土器の胴部片を含む可能性が高い。

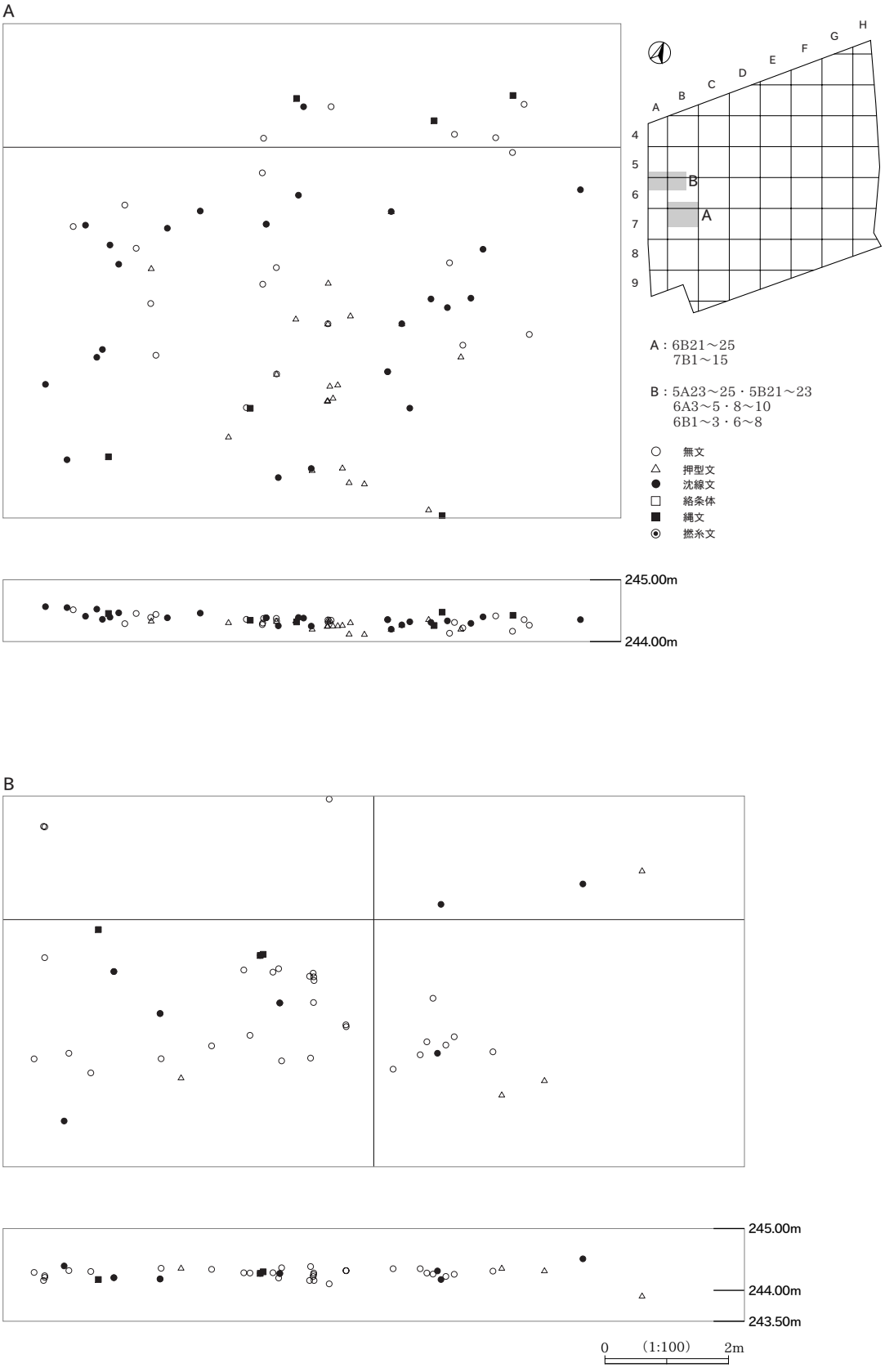
第8図　縄文土器分布図1（II層）



第９図　縄文土器分布図２（Ⅱ層）



第10図　縄文土器分布図3（Ⅱ層）



第11図　縄文土器分布図4（5A～6B／6B・7B）

器種名 ＼ 石材名	石鏃	石鏃未成品	石錐	石匙	両極石器	不定形石器	両面加工石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	磨石類	特殊磨石	石皿	砥石	石錘	石核	剥片	石材別計	総重量（g）	平均重量（g）
黒曜石	5	2			1											1	14	23	198.59	8.63
石英	1																	1	1.20	1.20
玉髄																	3	3	7.99	2.66
チャート		1	1	1	10	1					1						18	33	228.39	69.21
頁岩																	4	4	58.51	14.63
無斑晶質安山岩		2		2	2	17	5	2								1	56	87	2464.71	29.00
安山岩									1		43	21			1			66	36410.28	556.00
凝灰岩						1											2	3	128.71	42.90
珪質凝灰岩							1											1	177.25	177.25
凝灰質砂岩																	1	1	8.44	8.44
流紋岩				1													1	2	266.27	113.13
蛇紋岩									7	2								9	226.94	113.47
砂岩									2		9	2	2	2			1	18	9000.73	529.45
硬質砂岩											3	5						8	3502.15	437.77
片岩									1									1	84.68	84.68
器種別　計	6	5	1	4	13	19	6	2	11	2	56	28	2	2	1	2	100	260	52764.84	206.04

第２表　石器組成

3 石　　器

八斗蒔原遺跡からは石器が260点出土した。すべて包含層からの出土である。出土層位はⅡ層が主体だがⅠ層、Ⅲ層からも出土している。このうち、石核・剥片類を除いた器種は158点である。磨石類・特殊磨石が際立って多いことが特徴的である。石器組成は第２表に示した。

次に、個々の石器について記載を進める。トゥールは出土した全点について、出土位置・種別・法量・遺存状態などを観察し、巻末に石器観察表（別表3）としてまとめた。よって、この項では観察表からは読み取れない情報を中心に、特徴的な遺物について記述を行う。なお、実測図は向かって左側を正面、右側を裏面と称する。石器の左右は正面図の左右に統一する。

A 各　　説

土器同様、石器もⅠ・Ⅱ・Ⅲ層から出土しているが、層位による時期区分は不可能であるため、層位別ではなく器種別に図版を構成した。以下、器種ごとに述べていきたい。

石　鏃（295～300）　６点出土した。凹基無茎鏃で、基部の抉りが浅いものが多い。石材は黒曜石が主体で６点中５点である。残りの１点は石英で、硬質で緻密な石材を使用していることがうかがえる。296は裏面中央、300は表裏面中央に素材の剥離面を残し、周縁部と基部のみの加工を施す。298は石英で、両側縁下半から基部にかけて軽度に摩耗しており、剥離の稜が丸くなっている。やや深い抉りが入り、鍬形鏃の形態に近い。早期に位置づけられよう。

石鏃未成品（301～305）　301の石材はチャートで、剥片素材の周縁と基部に連続的な剥離を施す。基部に抉りを作り出していることから、石鏃未成品と判断した。302～305は石鏃未成品の可能性があるものとしてここに分類したもので、別の器種である可能性も否定できない。302の正面には素材剥片の打点が残る。302・303は黒曜石であることから未成品と考えたが、303は剥離が大きいことから別器種の可能性もある。304は剥片を素材として左右側縁に急角度の連続剥離を施す。305は右側縁に押

圧剥離を施す。右側縁は折れ面を有する。304・305とも石材は無斑晶質安山岩である。

石匙（306～308）　抉りのあるつまみと刃部を有する剥片石器。4点出土した。306の裏面左半分は素材剥片の打面をそのまま残す。正面右側縁には急角度の剥離を連続的に施す。307は流紋岩製である。左側面上半部に残る自然面を素材剥片の打面としている。左側面下半部は節理面で、多少加工を加えて調整している。裏面上半部の左からの剥離は、素材剥片剥離の際に逆方向から同時に割れたものと考えられる。308は上部の自然面を素材剥片の打面としている。刃部は両面加工がなされ、直線状に整えられている。306・308は無斑晶質安山岩製である。

石錐（309）　剥片の一部または全面に二次加工を加え、錐部を作出した石器。1点出土した。309はチャート製で、剥片を素材として両側縁に加工を施す。左側面下部には折れ面がある。右側縁の先端から1cmほどまでには、回転による使用痕が認められる。

両極石器（310～312）　両極に打痕・剥離痕のある石器を一括する。13点すべて1対の両極剥離痕を有するものである。石材は、13点中チャートが10点と圧倒的に多い。また、本器種にのみ赤色のチャートが認められ、特筆される。他に無斑晶質安山岩1点、黒曜石1点が出土している。

不定形石器（313・314）　従来「掻・削器類」・「スクレイパー」・「二次加工のある剥片」・「使用痕のある剥片」・「微細剥離のある剥片」・「不定形石器」などと言われている石器を一括し、分類は鈴木［1996］に従った。分類は以下のとおりである。

A類　いわゆるスクレイパー。刃部には中型で急角度の二次加工が片面に連続的につくもの。

B類　いわゆるスクレイパー。刃部には小型で急角度の二次加工が片面に連続的につくもの。

C類　鋸歯縁石器。刃部には大型・中型で急角度の二次加工が片面に鋸歯状につく。

D類　鋭利な尖頭部を持ち、それに続く側縁に二次加工を持つもの。

E類　抉入（ノッチ）状の加工を有するもの。

F類　刃部に中・小型の二次加工が不連続につくもの。

G類　刃部に大型・中型で浅角度の二次加工がつくもの。

H類　正面に礫表皮を多く残す素材を用い、刃部に浅角度の二次加工がつくか、使用痕と考えられる微細剥離、摩耗・光沢等がみられるもの。

I類　素材の一端部のみに連続的な二次加工がつくもの。

J類　使用痕と考えられる微細剥離・摩耗・線条・光沢等がみられるもの。

K類　大型・中型の浅角度の剥離により両面加工の刃部をつくるもの。従来「削器」と呼ばれた一群である。

なお、本遺跡ではD・H・I・J類にあたるものは出土していない。出土数が少ないためこれ以上の細分は行わなかった。

本遺跡からは19点出土した。内訳はK類が6点、C類4点、E類・F類が各3点、A類・B類・G類が各1点である。石材は無斑晶質安山岩が17点で大多数を占め、チャート・凝灰岩が各1点ずつとなっている。

313はB類である。左上の自然面を素材剥片の打面としている。刃部には急角度の剥離が連続的に施され、直線状に仕上げられる。石材はチャートである。314は剥片素材で上下両端に連続的な二次加工がなされる。左右に折れ面が認められるが、右の折れ面は打点がしっかりしており、意図的な折断かもしれない。

両面加工石器（315・316）　厚手の剥片を素材とし、ほぼ全周にわたって比較的粗い両面加工の施さ

れた石器。本遺跡ではこのような石器が特徴的に見られたため、本報告では1分類として取り上げた。6点出土し、うち5点は無斑晶質安山岩である。315の左側面は自然面であるが、平らな面を有する。

打製石斧（317）　比較的大型の剥片を素材とし、両面加工がなされる。無斑晶質安山岩製である。

磨製石斧（318～320・322～324）　11点出土した。定角式磨製石斧と比較して側面の作り出しが弱く、素材の変形の度合いが低かったと思われ、一部に礫面が残るものが多い。318は基部から刃部に向かって両側縁は緩やかに開く。片刃の円刃で、刃部に明瞭な稜を有する。正面の刃部先端右側には縦方向の線状痕が認められ、右利きの人間が使用した結果と推測される。319・320は両刃、322・323は片刃である。刃部形態がわかるものは8点のうち、片刃が5点、両刃が3点である。全面を研磨しないもの（319・320・323）も多く、本遺跡の特徴と言えるかもしれない。324は定角式磨製石斧である。刃部は縦方向の線状痕と刃こぼれが認められる。324は他のものとは明らかに形態が異なり、時期を異にするものと思われる。石材は蛇紋岩が7点と多く、その他は砂岩が2点、安山岩と片岩が各1点ずつである。

磨製石斧未成品（321）　両極剥離痕のあるもの（321）1点と研磨痕を有するもの1点が出土した。両者とも蛇紋岩製である。本遺跡では蛇紋岩は磨製石斧にしかみられないことから未成品と判断した。

石錘（325）　扁平な円礫の両端に抉りを作出したもの。安山岩製のものが1点出土した。

磨石類（326～333）　素材となる礫（転石）の正面および側縁に磨痕・敲打痕・凹痕を有するもの。使用痕の組み合わせにより4類に細分した。分類は鈴木［1996］に従ったが、D類にあたるものは出土していない。56点出土した。

A類（326・327）　磨痕だけのもの。56点中39点で、約70％を占める。石材は安山岩30点、砂岩7点、硬質砂岩2点である。形態は扁平な楕円形状のものが多く、327のような球状のものは少ない。

B類（329～333）　磨痕と凹痕が見られるもの。10点（17.8％）出土した。石材は8点が安山岩、砂岩と硬質砂岩が各1点ずつである。332・333のように表裏2か所ずつ凹痕が認められるものはこの2点のみである。ほとんどのものが表裏に凹痕を有するが、磨痕は片面のみのものも少なくない。

C類　磨痕と敲打痕が見られるもの。安山岩製のものが1点（1.8％）出土した。

E類（328）　凹痕のみのもの。安山岩製のものが3点（5.4％）出土した。

特殊磨石（334～339）　三角柱・四角柱・楕円状などの川原石（転石）を素材とし、その稜の部分に細長い機能面を有するもの。使用痕の組み合わせで次のように細分した。分類は立木（土橋）［1996］に従った。28点出土した。

A類（334）　稜上の磨面のみのもの。9点（32.1％）出土した。石材は安山岩4点、硬質砂岩3点、砂岩2点である。9点中5点は下半部を欠損している。334は10m以上離れた地点から出土した破片が接合した。335は角閃石と思われる鉱物を多量に含む。

B類（335～338）　稜上の磨面以外にも、磨面を持つもの。特殊磨石の中では最も多く、16点（57.1％）出土した。石材は安山岩が圧倒的に多く14点、砂岩が2点である。336のようにきちんとした三角柱状のものは少なく、337・338のような形状のものが多く見られる。

C類（339）　稜上の磨面のほかに、端部に敲打痕があるもの。安山岩製のものが2点(7.1％)出土した。

D類　稜上の磨面以外にも、磨面、敲打痕があるもの。安山岩製のものが1点（3.6％）出土した。

砥石（340）　不定形の比較的平坦な礫の1面ないし複数面に、使用による磨面が認められるもの。2点出土したが、どちらも破片である。

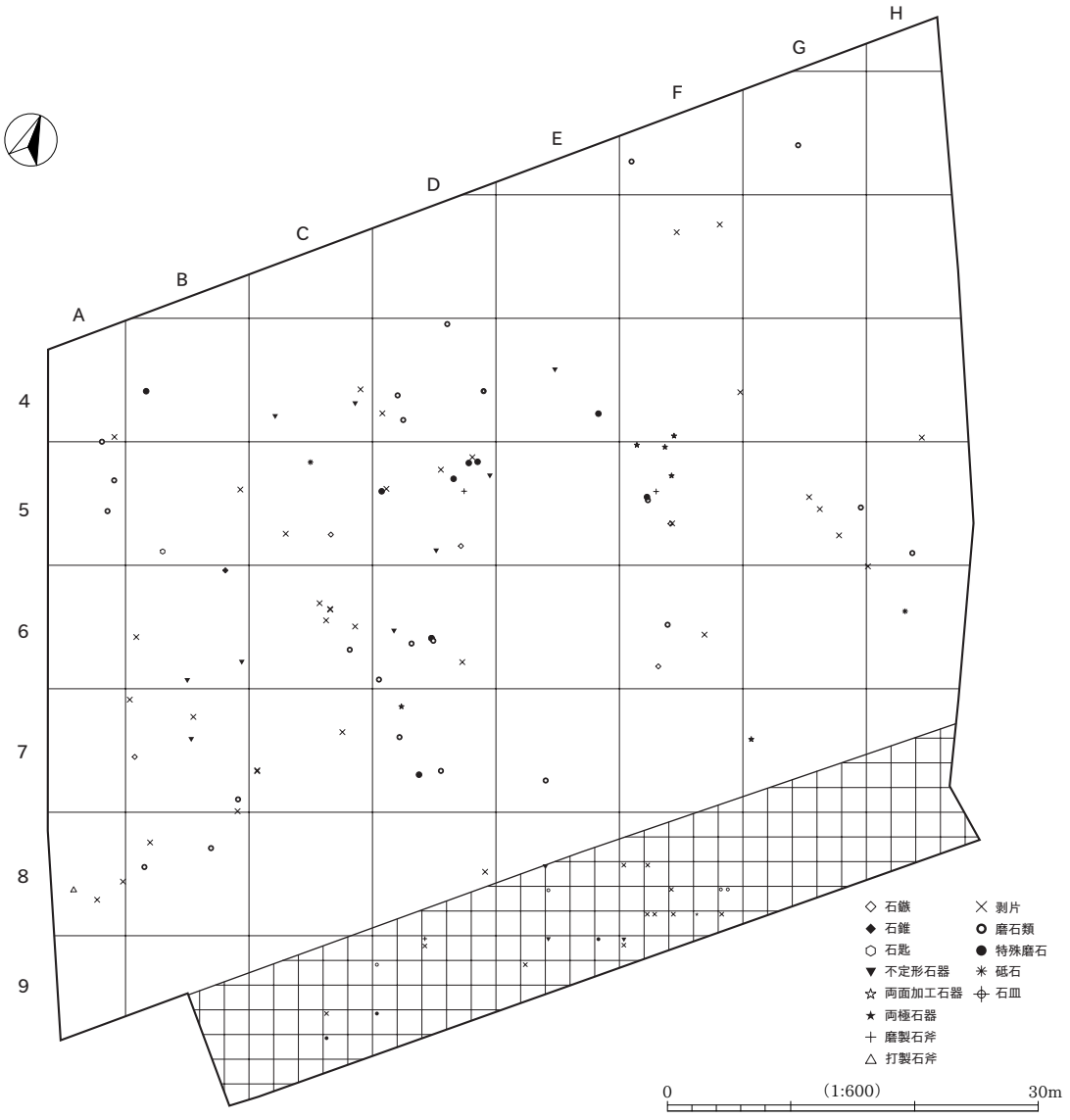
石皿（341・342）　円形ないし楕円形の大型扁平礫で表面あるいは表裏面に、使用による磨面が認め

られるもの。2点出土した。341は上下端に敲打痕が認められる。皿面が弓状に窪み、繰り返しの使用がうかがえる。皿面中央に幅2～5mmほどの溝が認められる。

その他、剥片が100点、石核が2点出土した。剥片の石材組成は無斑晶質安山岩が過半数を占め（56点）、次いでチャート（18点）、黒曜石（14点）、頁岩（4点）、玉髄（3点）、凝灰岩（2点）、凝灰質砂岩・流紋岩・砂岩（1点）となっている。玉髄・頁岩・凝灰質砂岩は剥片にしか見られない石材である。

B　石器の分布

Ⅱ層出土石器の分布を第12図に示す。全体的に調査区の中央よりに分布しているが、散漫的である。どの器種も、数点まとまって出土という状況は認められない。両極石器は5Fにややまとまっている。また、磨石類は遺構が比較的集中する6～7A・Bに分布せず、その周縁部に分布しているように見える。ただし、Ⅰ層ではそれらのグリッドからも比較的多く出土しており、断定はできない。他の器種では特定の傾向は見出せなかった。



第12図　石器分布図（Ⅱ層）

第Ⅵ章　自然科学分析

1　炭化材の樹種

はじめに

八斗蒔原遺跡は、新潟県中頸城郡中郷村に所在し、妙高山北東麓の緩斜面に位置している。本遺跡の発掘調査では、縄文時代早期に比定される遺物・遺構や古代に属すると考えられる炭窯などが確認されている。本報告では、古代に属すると想定される炭窯から出土した炭化材の樹種同定を実施し、当時の木材利用に関する検証を行う。

A　試　　料

試料は、1号炭窯覆土から出土した炭化材である。これら炭化材は、2瓶に梱包された状態であったことから、各瓶に1．2の番号を付した。さらに、これら炭化材を観察し、各瓶から5点、計10点を抽出した。これら抽出した炭化材には、同定試料として識別可能なようNo.1～10の番号を付し、それぞれを対象に炭化材同定を実施した。

B　方　　法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

C　結　　果

結果を第3表に示す。抽出した炭化材は全て広葉樹のブナ属に同定された。以下に、主な解剖学的特徴を記す。

ブナ属（*Fagus*）　　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

D　考　　察

1号炭窯は、長軸約430cm、短軸約220cm、深さ約35cmの長楕円形を呈する炭窯である。炭化材は、覆土2層および底部（3層）に認められている。いずれも焼成された木炭の一部が残存した可能性がある。採取された炭化材は黒色を呈していることから、いわゆる黒炭が焼成されていたと判断され、炭窯の深さや炭窯に土を被せるために掘ったと考えられる土坑が検出されていることなどを考慮

遺構	試料	番号	形状	樹種
1号炭窯	瓶1	1	割材	ブナ属
		2	破片	ブナ属
		3	丸材（径2.5㎝）	ブナ属
		4	割材	ブナ属
		5	割材	ブナ属
	瓶2	6	割材	ブナ属
		7	破片	ブナ属
		8	割材	ブナ属
		9	割材（板状）	ブナ属
		10	割材	ブナ属

第3表　樹種同定結果

すると、当遺構は伏焼きの炭窯であった可能性がある。

本遺構から出土した炭化材は、全てブナ属であった。ブナ属の木材は、緻密でやや重硬な材質を有しており、薪炭材としての用途も知られている［平井1979］。ブナ属は木炭の樹種としては比較的良質な部類であり、焼成すると軟質の炭となる［岸本・杉浦1980］。

本遺跡の立地する日本海側山間部の多雪地域では、自然状態ではブナを中心とした森林となり、ブナの林床はチシマザサが発達する［宮脇1985］とされる。ただし、現在では、後背山地はスギなどの植林や、里山林などの二次林がほとんどを占め、自然度の高い地域にわずかにブナ林が残っている［宮脇前掲］。したがって、本遺跡の炭窯から出土した炭化材は、周辺のブナを中心とした森林から採取、利用した可能性がある。

本地域では、近隣の丸山遺跡から検出された炭窯の炭化材は全点がブナ属と同定され、本遺跡の傾向と一致する。一方、関川谷内遺跡で検出された平安時代の所産とされる炭窯の炭化材同定の結果、全点がコナラ節であり、本遺跡や丸山遺跡と種類構成の異なる傾向も把握されている［パリノ・サーヴェイ株式会社1998］。

このような遺跡あるいは炭窯ごとの炭化材の樹種構成は、木炭とする樹種によりその材質も異なることから、木炭の利用目的を反映している可能性がある。ただし、本地域では生産遺構などから出土した炭化材の樹種の調査例が少なく、現段階では樹種と用途の関係について言及することは困難である。

今後は、さらに炭窯から出土する炭化材の調査を行い、木炭の樹種と用途に関する検証を行うとともに、周辺植生との関わりについても検討したいと考えている。

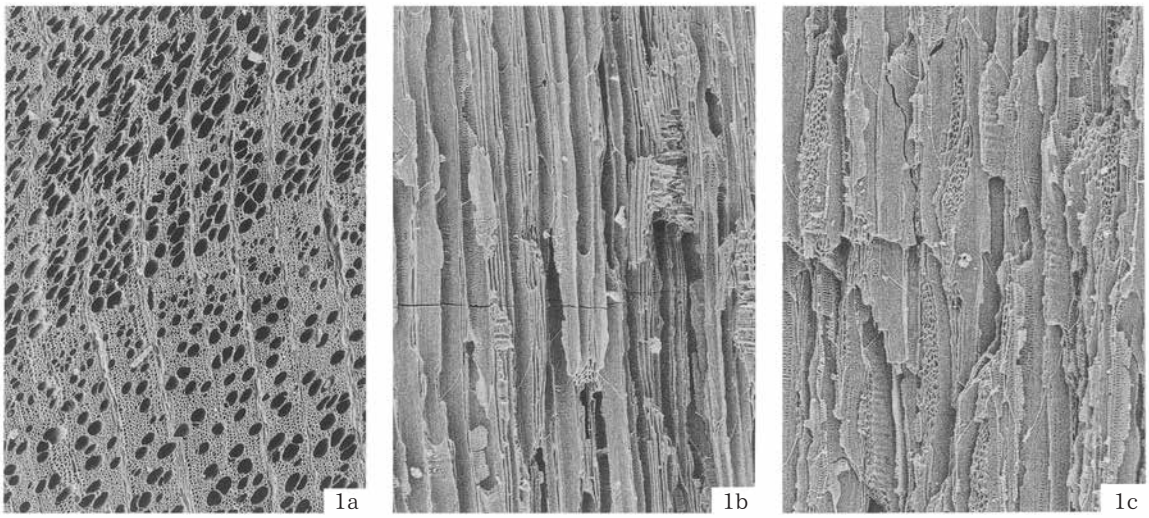
引用文献

平井信二　1979　『木の事典』第２巻　かなえ書房

岸本定吉・杉浦銀治　1980　『日曜炭やき師入門』　総合科学出版

パリノ・サーヴェイ株式会社　1998　「関川谷内遺跡における自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第90集　上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅳ　関川谷内遺跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

宮脇　昭　1985　『日本植生誌　中部』　至文堂



1．ブナ属（1号炭窯覆土　瓶1　No.1）

200μm：a
200μm：b，c

第13図　検出樹種の顕微鏡写真

第Ⅶ章　ま　と　め

1　土　　器

A　早期中葉の土器群について

1）Ⅰ群（押型文）土器について

八斗蒔原遺跡から出土したⅠ群土器の分類別比率は第４表のとおりである。文様・胎土からＡ類とＢ・Ｃ類に大別できるが、Ａ類4.1％、Ｂ・Ｃ類95.9％と、楕円文もしくは異種文様併用のものが圧倒的多数を占める。Ｃ類の中では２種（矢羽状山形文）が過半数を占め、ついで３種（重層山形文）が多くなっている。これは東北地方日計式のいわゆる「重層山形文」とは異なっており、日計式あるいは中部高地の菱形文様が重なるモチーフが変化したという可能性も考えられるが､現在のところ県内に類例は認められない。

Ｂ・Ｃ類は密接施文・異種文様併用・繊維混入という要素から「卯ノ木第Ⅱ類型」［小熊1997］に位置づけられる。長野県地方では、細久保遺跡出土資料の段階にあたると考えられる。

「細久保式」と、その前段階と言われている「樋沢式」については、研究者間で形式範囲の認識が異なり、現在も確立していない状況にある。また、異種文様併用の土器は、密接・異方向施文のものとともに「塞ノ神式」とし、「細久保式」に後続させる考え方［会田1988］もある。よって、今回は、型式名と安易に比定させることは差し控えたい。いずれにせよ、押型文系土器の終末期に位置づけられることは確実であろう。

Ａ類については、繊維が全く混入せず、Ｂ・Ｃ類とは胎土が明瞭に異なる。文様が異なる点からも、Ｂ・Ｃ類とは明らかに区別され、１段階古く位置づけられる可能性がある。しかし、11・12のような山形文密接施文の例は、近年信濃町市道遺跡［中村2001］で良好な資料が出土しており、中村氏はこれらを楕円密接施文と同時期、いわゆる「細久保式」の段階とされており、八斗蒔原遺跡出土土器の編年的位置づけについては慎重な検討を要する。

周辺の遺跡と比較してみると、妙高村松ヶ峯遺跡群、妙高高原町関川谷内遺跡Ⅰ群、信濃町市道遺跡Ⅲ・Ⅳ群の様相と近似している。関川谷内遺跡や信濃町市道遺跡では沈線文を併用する土器が出土している。沈線文系土器については、県内で最も豊富な内容を有する八斗蒔原遺跡では、そのような土器は１点も認められない。地域差によるものか、あるいは時期差によるものか、資料の増加を待って検討したい[1)]。

分類	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	不明	計
A	0	8	0	2	10（4.1%）
B	86	82	7	6	181（73.9%）
C1	0	4	0	0	4（1.6%）
C2	8	27	1	0	36（14.7%）
C3	4	7	0	0	11（4.5%）
C4	0	2	0	0	2（0.8%）
C5	0	1	0	0	1（0.4%）
計	98	131	8	8	245（100.0%）

第４表　Ⅰ群土器の分類別比率

1）八斗蒔原遺跡出土押型文系土器の胎土も火山灰を含んでおり、それは長野県三水村赤塩のQB火山灰（広域火山灰層のクリスタルアッシュ）であると中村氏よりご指摘を受けた。氏は胎土の詳細な観察により「細久保式」と「塞ノ神式」の区別を試みられている［中村2001］。八斗蒔原遺跡では中村氏のⅢ群とⅣ群に対応する土器が出土しているが、明確な違いを見出せなかった。筆者の観察力不足である可能性も否めない。再検討の課題としたい。

2）Ⅱ群（沈線文）土器について

八斗蒔原遺跡からは関東地方の田戸下層式から田戸上層式に併行すると思われる土器群が出土した。53は太い沈線を施すことから、田戸下層式に位置づけられると考えられる。54も太沈線、横位多段構成をとることから田戸下層式の範疇に含まれるとも考えられるが、より新しい段階に属するものか。

本遺跡と近似した様相を示す長野県地方では、近年まで田戸上層式から子母口式にかけての沈線文系土器群の様相は不明で、編年上は空白期となっていた。1997年のシンポジウム「押型文と沈線文」において、該期に併行する資料が提示・再評価され、編年整備にむけて大きく前進した。しかし、関東地方型式の土器と共伴した事例がないため、型式学的な検討に頼らざるを得ない。そのような状況下で、田中聡氏、小笠原永隆氏、阿部芳郎氏らが論考を重ねられている。諸氏の意見は系統観や時期細分などにおいて若干の違いはあるものの、大筋の流れは一致していると思われる。田戸上層式は、貫ノ木遺跡［中島前掲］→新水Ｂ遺跡［福島1981］→下荒田遺跡［小山ほか1995］・判ノ木山西遺跡［小林ほか1981］という変遷でとらえられる、という考え方である［田中1999・小笠原1999・阿部1997］。新水Ｂ遺跡段階以降の土器は田戸上層式の範疇でとらえがたく、在地的な土器群と考えられる。

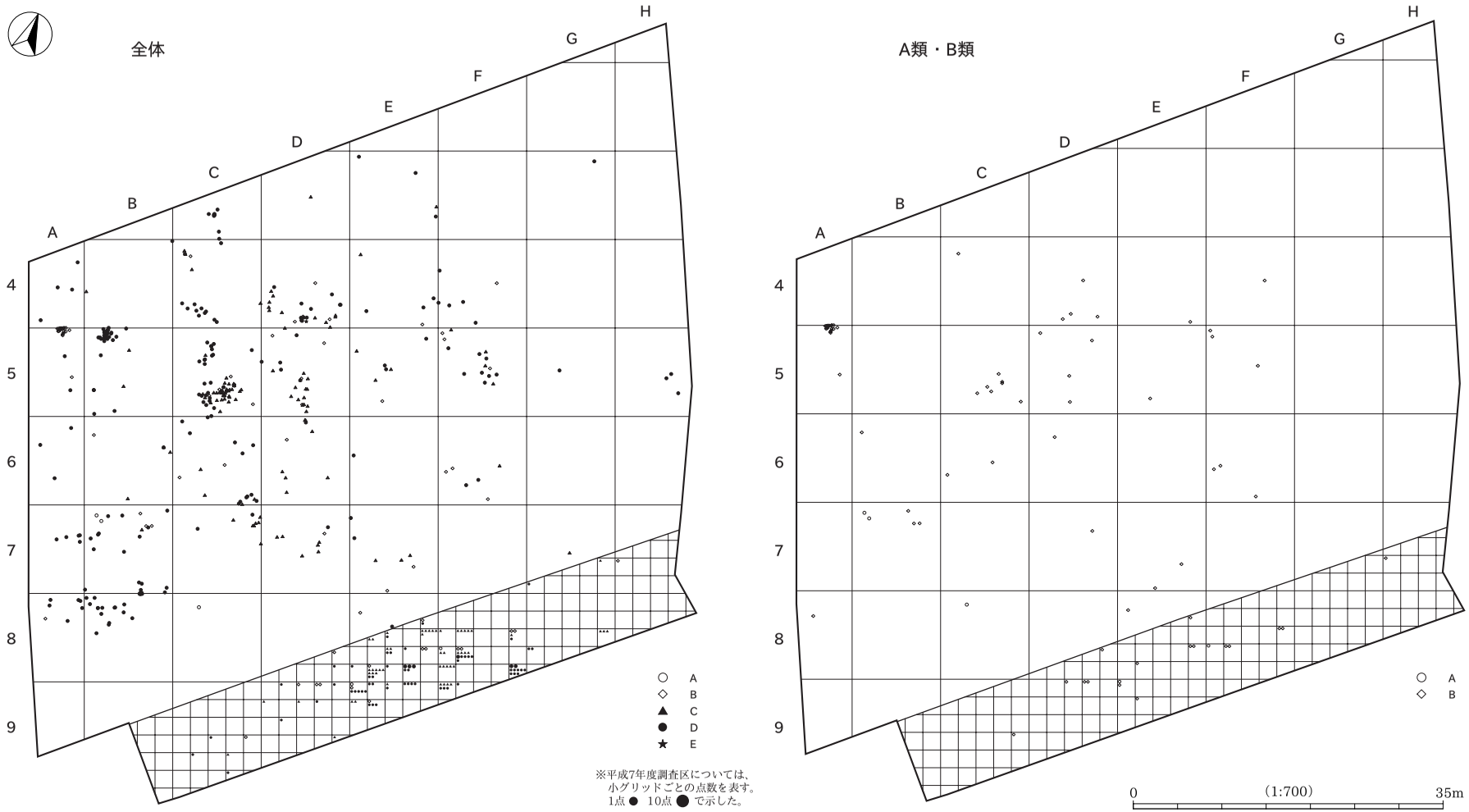
残念ながら本遺跡も層位的な出土例ではなかったが、上記４遺跡それぞれに類する土器が出土しているため、貝殻腹縁文土器（C類）と細沈線文土器（D類）の分布に違いがあるかどうか、検討を行った。結果は第14・15図に示したが、分布の明瞭な異なりを見出すことはできなかった。C類・D類とも１か所ずつ集中地点が見られるが、これらは同一個体である。またC3類は新水Ｂ遺跡の土器と近似するものであるが、これらの分布も散漫的であった。垂直分布においても、第Ⅴ章で述べたとおりD類が上の方に偏るなどといったような、特定の傾向は認められなかった。そこで、上述の編年案に対応させながら八斗蒔原遺跡の土器群をみてみたい。

貫ノ木遺跡の段階は主にC1類・C2類の大部分が充てられよう。貫ノ木遺跡は本遺跡と地理的に近いこともあり、非常に似た様相を示す[1)]。口縁部にクランク状のモチーフを描き、貝殻腹縁文を充填する。胴部は文様を施すものと施さないものがあるが、施文される場合は鋸歯状沈線に貝殻腹縁文を充填するものが多い。ただし、本遺跡からは田戸上層式の典型的な鍵手状入組文が描かれた土器が２個体出土しているが、長野県地方、また県内でも現在のところ認められないようである。県内の類例としては、上川村北野遺跡［高橋ほか2003］、下田村長野遺跡［家田ほか1990］、塩沢町万條寺林遺跡［池田・荒木1988］、糸魚川市岩野Ｅ遺跡［高橋ほか1986］などが挙げられるが、出土量は少ないと思われる。近年では上川村大谷原遺跡で該期の土器と前段階の土器が多量に出土しており、公表が期待される。

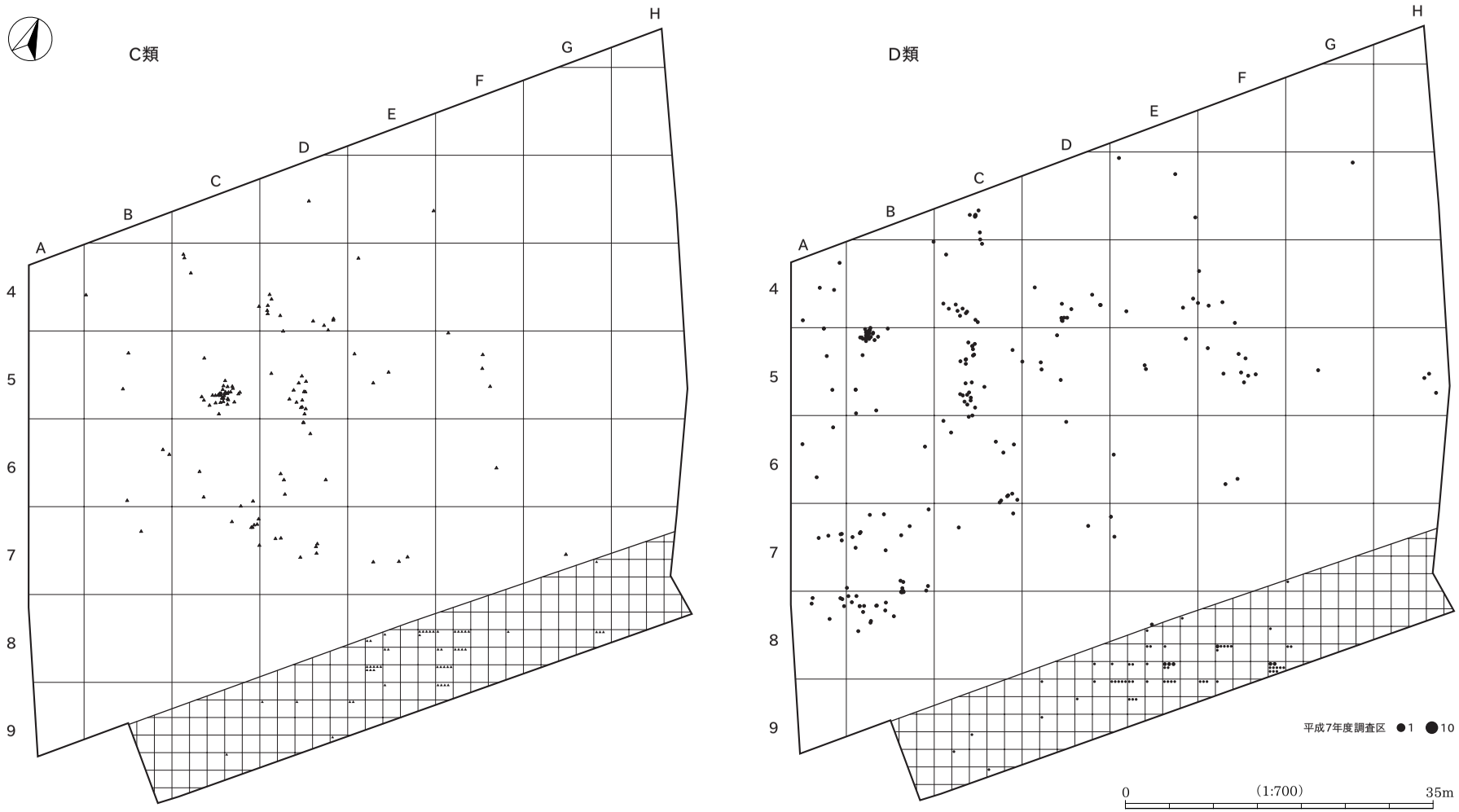
新水Ｂ遺跡の段階には、C3類が相当すると考えられる。C4類の131・132・147～152・155なども含まれるかもしれない。口縁部に鋸歯状沈線を描き、貝殻腹縁文を沈線に平行させて充填する。県内では岩野Ｅ遺跡で数片認められるのみである。また、貝殻腹縁を棒状工具に置換させた土器が存在するが、80はその例にあたると考えられる。貝殻腹縁文のみで矢羽状モチーフを描くものもあり、150・155などはこのパターンとなる可能性も考えられる。

下荒田遺跡・判ノ木山西遺跡の段階、これはD類が相当するであろう。八斗蒔原遺跡では沈線文系土

1）信濃町東裏団地遺跡においても、貫ノ木遺跡と近似した土器が出土している。実見させていただいた個体についてはほとんどが胎土Ｂ（34p参照）であった。



第14図　Ⅱ群土器分布図1（Ⅱ層）



第15図　Ⅱ群土器分布図２（Ⅱ層）

器の中で最も多く出土している。複数状１単位の工具もしくは先割れ状の工具で細沈線文を施す。斜方向施文が多いが、鋸歯状や矢羽状になるものもある。本遺跡の土器は山ノ内町上林中道南遺跡出土土器と非常に近似している。この類では口縁部に刺突文を施すものが多く見られるが、本遺跡ではその割合は86.1％であった（第５表）。部位は口唇部または内面が圧倒的に多く、次いで外面、外面と内面両方に施すものの順になっている。県内では川口町西倉遺跡［佐藤1988］、堂付遺跡［遠藤ほか1996］、岩原Ⅰ遺跡［北村ほか1990］で見られ、信濃川流域の挟在的な土器群という指摘がなされているが、本遺跡のほか関川谷内遺跡でも認められ、関川流域にも分布することが明らかになった。信濃町大道下遺跡（４次）でも同類の土器が見つかっており、県下の細沈線文土器は中部・東海地方の影響を受けて成立した可能性も出てきたと言えよう。

D類	数（%）	刺突部位	数（%）
刺突文なし	6（13.9%）		
刺突文あり	37（86.1%）	内	25（67.6%）
		外	7（18.9%）
		外＋内	5（13.5%）
計	43（100.0%）		37（100.0%）

第５表　Ⅱ群Ｄ類口縁部刺突文の比率

一方、下荒田遺跡に特徴的な、口縁部横位多段沈線に刺突文を有する土器は認められない。ただし、モチーフを抽出してみると、「複列刻帯文」や曲線状モチーフは本遺跡には存在しないが、口縁部に鋸歯状沈線、胴部に斜格子状沈線というパターンは57に認められる。胴部の斜格子状沈線は新しい要素とする説もある［田中1997］。口唇部と口縁外面の刺突列の向きを変え矢羽状とする手法も共通する。とりあえずこの段階の土器が変容したものと考えておきたい。

ところで越後の場合、東北地方型式の常世式[1)]（いわゆる「常世１式」のこと。以下常世式と称する）土器や、影響を受けたとみられる土器が分布することは以前から知られている。本遺跡でも、74・75はこの系統につながるものと考えられ、全体的に胎土や製作技法が近似している[2)]。県内では室谷洞窟・扉山遺跡［扉山遺跡発掘調査会1988］などで出土している。また、本遺跡でD1類とした、横位細沈線間に櫛歯状工具による刺突文を縦方向に充填する事例が堂付遺跡でも認められるが、これらは常世式との関連が指摘されている［遠藤ほか前掲］。

常世式など東北地方に特徴的な要素として、口縁部内面の貝殻腹縁の刺突文がある。岩野Ｅ遺跡出土の田戸上層式古段階に位置づけられる土器に施されているほか、新水Ｂ遺跡や大岡村鍋久保遺跡［森島ほか1976］（新水Ｂ遺跡と同時期）で認められる。田中氏は、この刺突文により東北から越後、そして中部へというつながりを想定できると指摘された［田中1997］。本遺跡でも出土していることは、氏の指摘通り、日本海側（上越地方）から長野県地方へという流れが存在した可能性が高いのではないだろうか。

最初にも述べたが、八斗蒔原遺跡の様相は長野県地方の編年案に、ほぼ対比できるほど近似していることが判明した。しかし、本遺跡での出土状況は押型文系土器から沈線文系土器まで混在しており、果たしてそれらの土器群が実際にどの程度時期差を持つものかどうかは不明である。今回は対比できる可能性を述べるにとどめ、今後の資料増加、層位的事例の発見に期待したい。

ところで、Ⅱ群土器の胎土は大きく２種類に分けられる。１つは胎土が非常に緻密で砂粒をあまり含まず、橙～褐色を呈するもの（A）、もう１つは、砂粒を多く含み胎土が粗く、灰褐～黒褐色を呈するもの（B）の２種類である。例えば、Ｃ類１種では84・90・93は（A）、86・88・89はＢであり、Ｄ類で

1）常世式土器についても、その編年的位置づけは確立していないが、最近は田戸上層式新段階に併行ということでおおむね意見が一致していると思われる。
2）小笠原永隆氏のご教示による。

は175・216はA、179・209はB、というふうに分類に関係なく認められる。この傾向はⅡ群以外の土器には認められない。

また、繊維を含有するものと含有しないものが認められる。D類は全点で繊維痕が見られるが、A～C類は両者が存在する。C類においては、1種はほとんど認められないのに対し、3種では全点、4種でも大多数の個体に含まれる。上述の編年案に対比させると、新しい段階のほうが繊維含有の割合が高いと言え、編年案の4遺跡でもその傾向が見て取れる。しかし、川口町西倉遺跡や堂付遺跡のD類類似の土器には繊維を含有しない土器も多く、これが地域差によるものなのかどうか、詳しく検証する必要があろう。今後の検討課題としたい。

B　早期末から前期初頭の土器群について

まずⅢ群土器について見る。絡条体押圧を主とするA類と回転手法を取り入れるB類が存在するが、出土量はA類のほうが若干多い。A類は絡条体が比較的太く、234のような芋虫状圧痕もある。押圧は隆帯上は勿論、両脇や口縁端部にも及ぶ。内面は絡条体の引きずりによると思われる条痕が施されるものがある。一方B類は内面に条痕を有するものはほとんどなく、隆帯を有するものも246のみである。地文は縄文のものが多い。

小熊氏は県内の絡条体圧痕土器群を集成され、「前半期」と「後半期」の2段階に分けている［小熊2000］。それに従えばA類は前半期（おおむね茅山上層式段階～入海Ⅱ式段階）、B類は後半期（おおむね石山式段階～早期最終末）にあたると考えられる。

周辺地域の遺跡と比較してみると、前半期では妙高高原町大堀遺跡［立木（土橋）ほか1996］Ⅲ群A、新井市萩清水遺跡［立木（土橋）ほか1997a］がこの段階に比定されている。八斗蒔原遺跡では横位多段の絡条体圧痕は少なく、隆帯が目立ち、やや異なった様相を呈しているように思われる。238の鋸歯状モチーフの押圧は一般的だが、隆帯を鋸歯状めぐらせる例は現在のところ類例が見られない。埼玉県下には鋸歯状の隆帯は見られるが、横位の隆帯間に施していることから、系譜を求めるには無理があると思われる。234は芋虫状圧痕が見られることと、鋸歯状の押圧から前半期に位置づけられると考えた。しかし、縦位の隆帯を有することは羽状縄文系土器の初現である塚田式土器の特徴と共通しており、早期の終末期に属する可能性を残している。

後半期は新井市三本木新田B遺跡［立木（土橋）ほか1997a］、大堀遺跡Ⅲ群B、関川谷内遺跡［土橋2003］Ⅱ群A類が比定される。おおよそ様相は近似しているが、八斗蒔原遺跡では撚りの細かい絡条体がⅡ群に含めた227にしか認められないことが、特徴となり得るかもしれない。

247～249は縄文条痕土器と言われるもので、絡条体圧痕文土器の最終段階に位置づけられる［小熊1989・1994］。244を見てみると、口縁部の絡条体圧痕の有無を除けば、247と施文パターンは同じとなる。絡条体圧痕文土器から縄文条痕土器へのつながりを示すものとして貴重な資料となろう。

Ⅳ群A類2種は前期初頭の塚田式［下平1994］に比定される。塚田式土器は千曲川水系を中心とする東信地方に濃密に分布するとされていたが、新潟県でも関川谷内遺跡での出土が確認された。八斗蒔原遺跡は関川谷内遺跡より約13km北に位置し、さらに分布域が拡大することが明らかになった。また、C類も同時期の所産であり、塚田遺跡［小山ほか1994］で土坑共伴例が確認されている。

羽状縄文のなかには菱形構成をとるものが存在するが、これは塚田式の特徴のひとつとしてとらえられる。ただし、第6図4のように菱形が縦に長くなるものはこの限りではなく、関東地方に分布する。群馬

県富士見村久保田遺跡［羽鳥1989］や埼玉県荒川村下段遺跡［西井ほか1989］に類例が求められる。これらの土器は前期初頭に位置づけられている［谷藤1994・金子1994］。

また、A類1種は関東地方を中心に分布する花積下層式に比定される。塚田式同様、前期初頭に位置づけられるもので、長野県でも東部町鍛冶屋遺跡［翠川1988］3号住居では塚田式土器と花積下層式土器が共伴して出土した。A類1種は鍛冶屋遺跡出土例とほぼ同じパターンをとるものと推測される。

268は、縦走縄文が見られることから東北の影響がうかがえるが、東北や、縦走縄文の施される土器が出土している関東地方においては底部は丸底が一般的である。底部形態はむしろ糸魚川市岩野E遺跡［高橋ほか1986］や富山市南太閤山I遺跡［岸本・山本1986］に近い。また、縄文の施文方向変換の区画として平行沈線を描くことも珍しい。位置づけとしてはⅣ群の他の土器同様の時期と考えられるが、特異な土器である。

以上のことから、Ⅳ群土器は前期初頭[1)]の段階におおむね限定されると考えられる。

C 小　　結

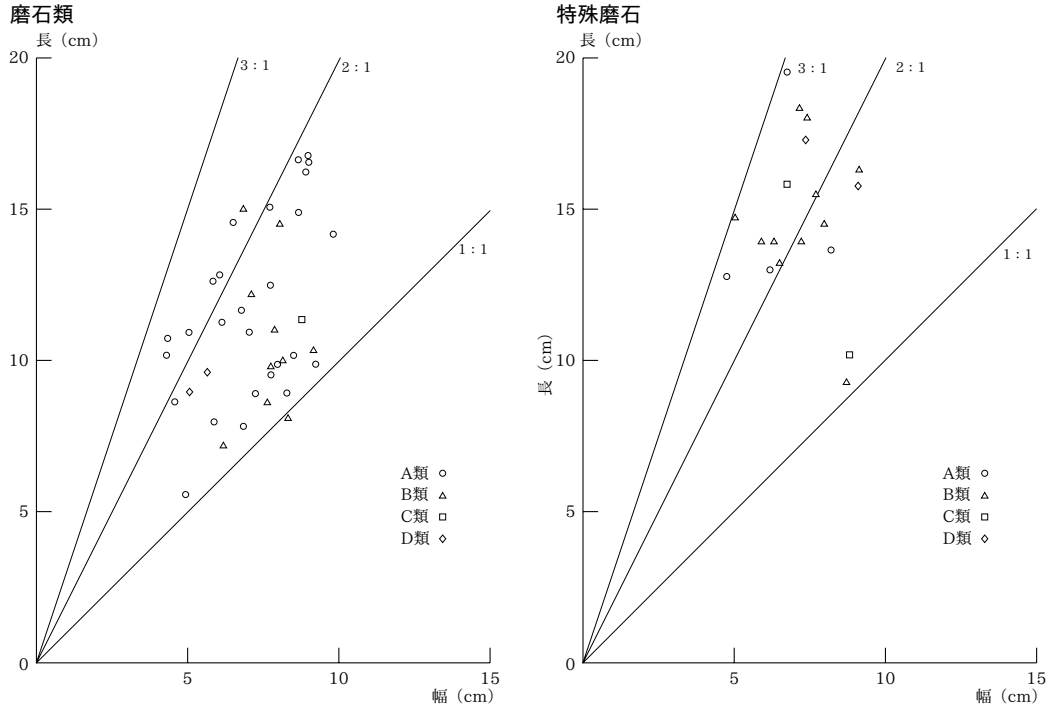
以上、八斗蒔原遺跡出土土器群について各群ごとにまとめたが、最後に成果と問題点について簡単にまとめたい。本遺跡の調査により、これまで不明瞭であった上越地方の沈線文系土器群の様相が確認されたことが、第一の成果として挙げられる。残念ながら層位的な出土状況ではなかったため、明確な編年的位置づけを行うことはできなかったが、ある程度の変遷が追えるようになったことの意義は大きいと考える。また、Ⅲ群・Ⅳ群土器も、早期末から前期初頭にかけてのまとまった土器群として評価されるものであろう。今後の課題としては、押型文系土器群の最終末段階が沈線文系土器群のどの段階と併行するのか、また、沈線文系土器群の変遷は前述したように細分されるものなのか、という問題がある。早期末から前期初頭にかけても、早期と前期の線引きをどこで行うのかという問題が残り、土器の編年的位置づけも確立していない。課題は多いが、今後の資料増加を待って検討していきたい。

2 石　　器

八斗蒔原遺跡から出土した石器は、同一器種においてそれほど形態差が見られない。石鏃は凹基無茎鏃、磨製石斧は礫の形状を残す形態が主体となる。これらの器種の形態と、特殊磨石が目立つことを考えると、所属時期は土器と同様、早期中葉から前期初頭におおむね収まるものと考えられる。土器についても当該期以外のものがごく少量であるため、石器についても同様のことが言えると思われる。出土量はそれほど多くはないが、当該期のまとまった資料として評価されよう。

前章でも少し触れたが、八斗蒔原遺跡出土石器260点のうち、石核・剥片類を除いた器種石器は158点である。特に磨石類・特殊磨石が目立ち、53.8％を占める。そこで磨石類と特殊磨石について、完形品57点（磨石類41点・特殊磨石16点）を対象として長幅分布図を作成した（第16図）。磨石類は、最大長：最大幅が1：1から2.5：1の範囲にほぼ収まる。一方特殊磨石は、磨石類よりも多少ばらつきはあるものの、1.5：1～3：1の範囲に多く分布し、磨石類よりも縦長の形態をとるという傾向がうかがえ

1） 今回は『第7回　縄文セミナー』に掲載されている諸氏の論文に従い前期初頭としたが、塚田遺跡報告書においては、塚田式土器についても早期末にかかる部分をもちうるという考え方も示されている［中沢1994］。



第16図　磨石類・特殊磨石長幅分布図

る。この傾向は関川谷内遺跡［土橋2003］でも認められる。石器組成においても、関川谷内遺跡（B地点Ⅱ区）と近似していると考えられ、周辺遺跡との比較なども検討すべきところであるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

要　　約

1　八斗蒔原遺跡は新潟県南西部、中郷村大字板橋新田字八斗蒔原に所在し、妙高山北東麓の緩斜面に位置する。標高は241～245mで、現況は荒蕪地・畑・宅地である。

2　調査は上信越自動車道建設に伴い、平成7・8年度の二か年実施した。実質調査面積は5,800㎡である。

3　調査の結果、縄文時代・古墳時代・古代の遺物と縄文時代・古代の遺構が検出された。

4　集石土坑1基、集石1基、土坑25基、ピット18基、焼土遺構13基が検出された。これらはおおむね縄文時代に属するものと考えられるが、集落（住居域）が営まれた場所ではないようである。

5　縄文土器は早期中葉から前期初頭のものが大多数を占める。これまで不明瞭であった上越地方の沈線文系土器群の様相が確認されたことの意義は大きい。早期末から前期初頭にかけても、まとまった土器群として評価される。

6　平安時代に属すると考えられる炭窯1基と土坑1基が検出された。遺物は土師器甕が2点出土した。炭窯は妙高山麓一帯で検出されているものと同形態であり、この時代の山麓開発の一端を示している。

引用文献

会田　進　　1988　「中部山岳地方押型文文化の様相」『縄文早期を考える 押型文文化の諸問題』 帝塚山考古学研究所

阿部芳郎　　1997　「判ノ木山西遺跡出土土器の分類と編年」『シンポジウム 押型文と沈線文 本編』 長野県考古学会縄文時代（早期）部会

荒川隆史ほか 2000　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第92集 和泉Ａ遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

飯山市教育委員会　1991　『国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告Ⅰ 新堤遺跡・トトノ池遺跡』

家田順一郎ほか　1990　『下田村文化財調査報告書 第29号 長野遺跡発掘調査報告書』 下田村教育委員会

池田　亨・荒木勇次　1988　『塩沢町文化財調査報告 第7輯 万條寺林遺跡』 塩沢町教育委員会

上ッ平遺跡発掘調査団　1992　『上ッ平遺跡発掘調査概況報告書』 妙高村教育委員会

遠藤ケイ　　1995　「炭焼き窯職人伝」『男の民俗学』 山と渓谷社

遠藤孝司ほか 1996　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第78集 堂付遺跡・百塚東Ｅ遺跡・百塚西Ｃ遺跡・割目Ｂ遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

小笠原永隆　1999　「中部地方を中心とする縄紋時代早期中葉土器編年の展望－「シンポジウム」の再検討を中心とした若干の予察－」『長野県考古学会誌－縄文早期部会特集－』87・88号　長野県考古学会

岡本郁栄　　1982　『奥の城（西峯）遺跡第二次発掘調査概報』 中郷村教育委員会

岡本　勇ほか 1967　『大貝遺跡の調査』 立教大学考古学研究会

小熊博史・北村　亮　1994　「新潟県における縄文早期末・前期初頭の土器様相」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会

小熊博史　　1989　「縄文時代早期終末における絡条体圧痕文土器の一様相－新潟県中魚沼地方の資料を中心に－」『信濃』第41巻4号　信濃史学会

小熊博史　　1997　「卯ノ木遺跡出土土器の研究Ⅰ」『長岡市立科学博物館研究報告』32号　長岡市立科学博物館

小熊博史　　2000　「新潟県における絡条体圧痕文土器の様相」『第13回縄文セミナー 早期後半の再検討』 縄文セミナーの会

金子直行　　1994　「縄文早期終末から前期初頭に於ける羽状縄文系土器群の成立について」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会

岸本雅敏・山本正敏　1986　『都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（4）－南太閤山Ⅰ遺跡』 富山県教育委員会

北林八洲晴ほか　1975　『青森県埋蔵文化財調査報告書第27集 千歳遺跡（13)』 青森県教育委員会

北村　亮ほか 1990　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩原Ⅰ遺跡 上林塚遺跡』 新潟県教育委員会

小池義人ほか 1998　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第90集 関川谷内遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人ほか 2002　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第108集 小重遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

小島正巳　　1991　「妙高山麓採集の押型文土器－松ヶ峯No.202・208遺跡ほか（17地点）－」『新潟考古学談話会会報』第7号　新潟考古学談話会

小島正巳　　1993　「妙高村松ヶ峯No.237遺跡の縄文早期土器」『新潟考古』第4号　新潟県考古学会

小林秀夫ほか 1981　「第Ⅱ章第1節　判ノ木山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3』 長野県教育委員会

小山岳夫ほか 1994　『塚田遺跡』 御代田町教育委員会

小山岳夫ほか 1995　『下荒田遺跡』 御代田町教育委員会

佐藤雅一　　1988　『川口町埋蔵文化財報告第2輯 西倉遺跡』 川口町教育委員会

佐藤雅一ほか 1994 『中里村文化財調査報告書第７輯 小丸山遺跡・おざか清水遺跡』 中里村教育委員会
下平博行 1994 「3 「塚田式」の設定とその様相について」『塚田遺跡』 御代田町教育委員会
翠川泰弘 1988 『鍛冶屋遺跡』 東部町教育委員会
鈴木俊成 1996 「第Ⅳ章２－Ｃ 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告第72集 清水上遺跡Ⅱ（本文編）』新潟県教育員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋 保ほか 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 中原遺跡・岩野Ａ遺跡・岩野Ｅ遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋 勉 1994 「高床山遺跡群」『新井市遺跡確認調査報告書』 新井市教育委員会
高橋保雄ほか 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告第119集 北野遺跡Ⅰ（下層）』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
田中 聡 1997 「中部・東海地方における沈線文土器の様相」『シンポジウム 押型文と沈線文 本編』 長野県考古学会縄文時代（早期）部会
田中 聡 1999 「中部地方における縄文早期沈線文土器群の終末について－関東以西における早期前半から後半への移行期の問題」『長野県考古学会誌－縄文早期部会特集－』87.88号 長野県考古学会
谷藤保彦 1994 「群馬県における早期末・前期初頭の土器」『第７回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会
地学団体研究会編 1996 『新版 地学事典』 平凡社
親跡 喬 1988 『図録 南田遺跡』 中郷村教育委員会
親跡 喬 1990 『図録 小丸山遺跡』 中郷村教育委員会
親跡 喬 1992 『図録 柿ノ木町遺跡』 妙高村教育委員会
立木（土橋）由理子ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第75集 大堀遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
立木（土橋）由理子ほか 1997a 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第83集 萩清水遺跡 三本木新田Ｂ遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
立木（土橋）由理子ほか 1997b 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第84集 中ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
立木（土橋）由理子ほか 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第94集 西福田新田遺跡・郷清水遺跡・上中島遺跡・上滝ノ沢遺跡・中の原Ｄ遺跡・窪畑Ｂ遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
土橋由理子 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第124集 関川谷内遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
扉山遺跡発掘調査会 1988 「縄文早期扉山遺跡発掘調査報告」『北越考古学』創刊号 北越考古学研究会
中川成夫ほか 1959 『浦川原村文化財調査報告 第一 顕聖寺遺跡』 浦川原村教育委員会
中川成夫ほか 1967 「葎生遺跡」『頸南』 新潟県教育委員会・頸南地区総合学術調査会
中郷村教育委員会 1996 『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編』 中郷村教育委員会
中郷村教育委員会 2000 『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』 中郷村教育委員会
中沢道彦 1994 「1 塚田遺跡出土早期土器群について」『塚田遺跡』 御代田町教育委員会
中島英子 1998 「第２章 貫ノ木遺跡」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 35 貫ノ木遺跡・西岡Ａ遺跡』 建設省関東地方建設局・(財) 長野県埋蔵文化財センター
中村由克 2001 『市道遺跡発掘調査報告書』 信濃町教育委員会
西井幸雄ほか 1989 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第87集 下段遺跡』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
西川博孝ほか 1984 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－No.7遺跡』 千葉県文化財センター
野口義麿編 1981 『縄文土器大成』3 後期 講談社
橋谷田裕治 1997 「前原遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成８年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
羽鳥政彦 1989 『白川遺跡・由森遺跡・久保田遺跡』 群馬県勢多郡富士見村教育委員会

早津賢二　1985　『妙高火山群－その地質と活動史－』 第一法規
早津賢二　1994　「新潟焼山火山の活動と年代－歴史時代のマグマ噴火を中心として－」『地学雑誌』Vol.103　2（社）東京地学協会
福島邦男　1981　『新水－長野県北佐久郡望月町新水A.B遺跡緊急発掘調査報告書』望月町文化財調査報告第７集 望月町教育委員会
細谷　一　1978　「第一章　五　気候」『中郷村史』　中郷村史編集会
本間信昭・室岡　博　1976　『兼俣遺跡　新潟県中頸城郡妙高高原町兼俣遺跡発掘調査報告』 妙高高原町教育委員会
室岡　博　1966　「先史・古代の頸南」『頸南』 新潟県教育委員会・頸南地区学術総合調査会
室岡　博・早津賢二　1986　『中古遺跡』 妙高村教育委員会
室岡　博　1986　『兼俣遺跡（Ｄ地区）』 妙高村教育委員会
室岡　博　1994　『道添遺跡Ⅰ』 妙高村教育委員会
室岡　博　1995　『道添遺跡Ⅱ』 妙高村教育委員会
森島　稔ほか 1976　「長野県更科郡大岡村鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌』23・24号　長野県考古学会

遺構計測表

遺構種別	遺構番号	グリッド		形　態		規模（cm）			底面標高（m）	検出順位	備　考	出土遺物（No.）
		大	小	平面	断面	長径	短径	深度				
集石	1号	7C	6・11	円形	半円状	105	120	21	244.20	Ⅱ	土坑	
集石	2号	5B	12・13・14・17・18・19	－	－	200	120	－	－	Ⅱ		
SK	1	6H	24	不整	台形状	89	70	24	242.29	Ⅲ		1
SK	2	5H	24	円形	弧状	61	51	12	241.91	Ⅲ		
SK	3	5H	18・23	円形	弧状	55	55	15	241.69	Ⅲ		
SK	4	7B	16	不整	弧状	76	66	12	244.27	Ⅲ		
SK	5	8A	3	円形	箱状*	80	64	22	244.06	Ⅲ		2・3・4
SK	6	5F	5	楕円	台形状	76	70	16	242.43	Ⅲ		
SK	8	6B	14	円形	弧状	68	48	14	244.03	Ⅲ		
SK	9	6C	10・15	円形	弧状	64	68	16	243.43			
SK	10	7A	14	不整	弧状	106	70	10	243.28	Ⅲ		
SK	11	7A	3・8	円形	弧状	44	42	8	244.41	Ⅲ		
SK	12	6A	15・20	不整	弧状	68	52	8	244.22	Ⅲ		6
SK	13	6A	14・19・20	円形	台形状	42	34	12	244.03	Ⅲ		
SK	14	6B	16・21	円形	弧状	86	67	15	244.18	Ⅲ		
SK	15	3F	14・15・19・20	（円形）	台形状	140	100	18	244.12	Ⅲ	短径は残存長	7・8
SK	17	2G	15・20	不整	弧状	84	70	22	241.17	Ⅳ上		
SK	18	2G	22・23	不整	半円状	128	100	20	241.31	Ⅳ上		
SK	19	3G	4・9	不整	弧状	186	114	16	241.28	Ⅳ上		
SK	20	5B	20・25	円形	台形状	96	72	28	243.58	Ⅲ		5
SK	21	5C	21	円形	弧状	70	52	18	243.68	Ⅳ		
SK	24	6A	3	楕円形	弧状	85	74	14	243.90	Ⅲ		
SK	25	5D	10	不整	箱状	76	22	40	242.68			
SK	26	5C	10・15	円形	弧状	90	78	10	243.60	Ⅲ		
SK	27	9D	3・8	円形	弧状	106	104	18	243.42	Ⅲ		
SK	28	9D	13	円形	箱状	140	110	29	243.01	Ⅲ		
SK	29	8G	1・6	円形	半円状	100	85	32	242.74			
P	1	5A	17	不整	弧状	60	42	10	243.75	Ⅲ		
P	2	5B	23	円形	V字状	36	26	24	243.64	Ⅲ		
P	3	5B	19・24	円形	台形状	27	24	20	243.59	Ⅲ		
P	4	6A	13	円形	弧状	56	46	14	244.10	Ⅲ		
P	5	6A	20・25	円形	弧状	26	22	13	244.26	Ⅲ		
P	6	7A	5	円形	弧状	30	24	12	244.28	Ⅲ		
P	7	7A	8	円形	半円状	30	26	18	244.23	Ⅲ		
P	8	7A	13	円形	半円状	26	24	16	244.23	Ⅲ		
P	9	7A	18	円形	U字状	20	52	30	244.11	Ⅲ		
P	10	7A	19	円形	半円状	20	16	15	244.18	Ⅲ		
P	11	7B	6・11	円形	U字状	31	26	30	244.04	Ⅲ		
P	12	7A	15	円形	U字状	26	22	28	244.08	Ⅲ		
P	13	7A/7B	15/11	楕円	半円状	40	27	16	244.07	Ⅲ		
P	14	7A	25	円形	半円状*	33	29	10	244.20	Ⅲ		
P	15	4C	21・22	円形	台形状	56	52	28	243.09	Ⅳ上		
P	16	7E	16	円形	弧状	24	78	10	243.42			
P	17	3H	24	円形	弧状	46	32	10	241.45	Ⅲ		
P	18	4H	23	円形	V字状	54	40	19	240.98	Ⅲ		
焼土	3号	8B	6・7			140	98	14	244.16	Ⅱ下		9
焼土	4号	7B	16・17・21・22			98	44	16	244.25	Ⅱ		
焼土	7号	5F	2・3			80	56	9	242.94	Ⅱ		
焼土	8号	2G	11			95	50	10	241.99	Ⅱ上		
焼土	9号	2G	11・12			70	40	10	241.96	Ⅱ上		
焼土	10号	3F	2			59/48	41/27	10	242.31			
焼土	11号	2E	20			60	30	12	242.29			
焼土	12号	2F	16			111	80	14	242.22			
焼土	13号	3E	19・20			127	48	8	242.21			
焼土	14号	5D	2			40	30	12	242.79	Ⅱ下		
焼土	15号	4D/5D	24/4			56	32	11	242.78	Ⅱ下		
炭窯	1号	3F/3G	5・10/1・6	楕円	弧状	430	216	35	241.84	Ⅱ		

断面＊は底面の凸凹が著しいものを示す。

土器観察表

凡例

1. 出土位置　大グリッドの北西端を0として、西から・北からの2方向で位置を示した。ドット位置を示したのは掲載した破片のみである（他に同一個体が存在する場合は備考欄に記した。）
2. 口径・底径　単位は㎝である。
3. 繊維痕　×含有せず　○含有する　◎多く含有　●非常に多く含有
4. 色調　『新版　標準土色帖』［小山・竹原1994］による。
5. 胎土　石：石英、長：長石、雲：雲母、角：角閃石、チャ：チャート、白：白色粒子、海：海面骨針を表す。断面等の観察により、多く認められたものから列記した。

報告No.	グリッド	層位	出土位置 西から	出土位置 北から	群	分類	残存部位	口径底径	胎土	繊維痕	色調 外面	色調 内面	調整	文様 外面	文様 内面	備考
1	6H24	不明	—	—	Ⅱ	D2	口		石.雲	○	にぶい橙	灰褐	内:ナデ	斜位細沈線交差	口端:刺突（ヘラ状工具）	SK1出土
2	8A3	Ⅲ	—	—	Ⅱ	D2	胴		長.チャ.石	○	橙	灰褐		横位細沈線		SK5出土　№1
3	8A3	Ⅲ	—	—	Ⅱ	B3	胴		石.白.雲	○	褐	褐		横位沈線		SK5出土　№2
4	8A3	Ⅲ	—	—			底		石.白.雲	○	橙	黒褐	外:ケズリ			SK5出土　№3　内:スス
5	5B20.25	Ⅲ	—	—	Ⅱ	C2	胴		石.白（少）	×	にぶい褐	黒褐	内:ナデ	横位沈線間に波状文・貝殻腹縁文		SK20出土　外:スス
6	6A15	不明	—	—	Ⅰ	B	胴		石.雲	○	黄橙	灰黄褐		楕円文		SK12出土　№1　器面剥落
7	3F15.20	不明	—	—	Ⅱ	D1	胴		石.雲	○	褐	褐		横位沈線間に刺突（櫛歯状工具）		SK15出土
8	3F15.20	不明	—	—	Ⅳ	C2	胴		長.白.雲	○	灰褐	褐灰		縄文RL		SK15出土
9	8B6.7	Ⅱ下	—	—	Ⅰ	C3	胴		白.石	○	にぶい褐	灰褐		重層山形文		3号焼土出土　№2
10	8F2	Ⅱ	3.33	0.60	Ⅰ	A	口		長.黒.チャ	×	にぶい褐	にぶい褐		山形文　帯状施文		原体長　25mm
11	9D9	Ⅱ	—	—	Ⅰ	A	胴		角.雲	×	にぶい褐	にぶい橙		山形文 密接施文か		
12	不明	撹乱	—	—	Ⅰ	A	胴		角.雲.石	×	橙	橙		山形文　横位密接施文（下位縦位）		内上:スス
13	7A13	Ⅱ	5.82	4.79	Ⅰ	B	胴		白.長.雲	○	橙	灰褐		楕円文　帯状施文		
14	9D3	Ⅱ	—	—	Ⅰ	B	胴		長.角（少）	○	にぶい赤褐	灰褐		楕円文　帯状施文		
15	4F17	Ⅱ	2.22	7.37	Ⅰ	B	口		角.雲.白	○	灰褐	灰褐		楕円文　密接施文		原体長　25mm
16	7B13	Ⅱ	5.49	5.19	Ⅰ	B	口	22.3	石.雲	○	黒褐. にぶい黄橙	橙.黒褐		楕円文　密接施文		原体長　37mm
17	9D3	Ⅱ	—	—	Ⅰ	B	口・胴		白.角.石	○	にぶい橙. にぶい褐	褐・灰褐		楕円文　帯状施文		内:スス
18	6B2	Ⅰ	3.61	1.90	Ⅰ	B	口		石.白.角.チャ	○	にぶい橙	にぶい橙		楕円文		器面摩耗
19	7D16 7D16	Ⅱ Ⅱ	1.28 1.28	6.03 6.32	Ⅰ	B	口	17.4	石.長.角	○	灰褐	にぶい橙		楕円文		原体長　25mm
20	6B17	Ⅱ	2.59	7.05	Ⅰ	B	口		石（多）.雲.角	○	褐灰	黒褐		楕円文		
21	7B9	Ⅰ	7.64	2.88	Ⅰ	B	口		石.角.白	○	橙	橙		楕円文		
22	4C2	Ⅱ	2.46	1.23	Ⅰ	B	口		石.角	○	にぶい褐	にぶい黄橙		楕円文		
23	8A18	不明	—	—	Ⅰ	B	口	23.0	石.長.雲	○	暗褐	褐		楕円文		
24	4D16	Ⅱ	1.21	7.09	Ⅰ	B	口		石.長.チャ	○	灰褐	黒褐		楕円文		原体長　37mm
25	4D24	Ⅱ	6.05	8.38	Ⅰ	B	口		石.角	○	にぶい橙	にぶい橙		楕円文		
26	8E8	Ⅱ	5.28	3.63	Ⅰ	B	口		雲.石.角	○	灰褐	にぶい褐		楕円文		外:スス
27	7B3	Ⅰ	5.01	0.04	Ⅰ	B	口		長.石.角	○	にぶい褐	にぶい褐		楕円文		原体長　35mm
28	5B23	Ⅰ	5.85	9.27	Ⅰ	B	胴		雲.石.角	○	褐	黒褐	外:縦方向擦痕	楕円文　密接施文		内外:スス
29	3G24	Ⅱ下	6.31	9.47	Ⅰ	B	胴		雲.石.角	○	にぶい黄橙	灰褐		楕円文　密接施文		
30	7B13 7B13	Ⅱ Ⅱ	5.25 5.26	4.10 4.10	Ⅰ	B	胴		雲.石.角	○	橙	暗褐		楕円文　密接施文		内:スス
31	7B9	Ⅱ	7.41	3.39	Ⅰ	B	胴		石.長.角.白	○	にぶい黄橙	灰黄褐		楕円文		

報告No.	グリッド	層位	出土位置		群	分類	残存部位	口径底径	胎　土	繊維痕	色　調		調　整	文　様		備　考
			西から	北から							外　面	内　面		外　面	内　面	
32	5B19	Ⅰ	7.01	6.50	Ⅰ	B	胴		長.角.白	○	にぶい橙	にぶい褐		楕円文　密接施文		
	5B19	Ⅰ	6.80	6.17												
33	7A24	Ⅰ	7.90	9.22	Ⅰ	B	胴		長.角.白	○	にぶい橙	灰褐		楕円文		
34	7C12	Ⅲ	3.95	4.15	Ⅰ	B	胴		白.石.角	○	橙	にぶい橙		楕円文		内外:スス
35	7B8	Ⅱ	5.26	2.20	Ⅰ	B	胴		長.石.雲.白	○	灰褐	灰褐		楕円文　一部斜位施文　重複構成		
36		表採	－	－	Ⅰ	C5	口		石.長.角	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		楕円文（重複構成）＋斜位沈線か （複数一単位）		
37	5D7	Ⅱ	3.85	2.91	Ⅰ	C1	胴		石.雲.長	○	にぶい黄橙	黒褐		楕円文＋山形文		
38	6C20	Ⅱ	9.45	7.90	Ⅰ	C2	口～胴	17.6	石.雲	○	黒.にぶい黄橙	褐		楕円文＋矢羽状山形文		原体長 楕円 22mm 山形 34mm 内:胴下オコゲ
	6C25	Ⅱ	9.78	9.80												
	6C25	Ⅱ	9.70	9.83												
	6C25	Ⅱ	8.40	9.09												
	6C25	Ⅱ	9.78	9.92												
	6C25	Ⅱ	9.78	9.90												
39	7B8	Ⅱ	4.74	2.78	Ⅰ	C2	口		石.角.雲	○	灰褐	灰褐		楕円文＋矢羽状山形文		
40	6H11.16	風	－	－	Ⅰ	C2	胴		雲.石.角	○	灰褐	にぶい黄橙		楕円文＋矢羽状山形文		原体長　21mm
41	6B6	Ⅰ	1.97	2.83	Ⅰ	C2	胴		石.雲.白	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		楕円文＋矢羽状山形文		
	6B7	Ⅰ	2.09	2.74												
	6B7	Ⅱ	2.07	2.84												
42	5C18	Ⅱ	5.93	6.60	Ⅰ	C2	胴		石.角	○	灰褐.黒褐	にぶい橙.灰褐		楕円文＋矢羽状山形文（変形） 下部無文帯か		
	5D9	Ⅰ	6.89	2.40												
43	7D12	Ⅱ	3.64	5.38	Ⅰ	C2	胴		石.角	○	にぶい黄橙	黒褐		楕円文＋矢羽状山形文（変形）		
44	9D12	Ⅱ	－	－	Ⅰ	C3	胴		石.角	○	にぶい黄橙	灰黄褐		楕円文＋重層山形文（変形）		
45	5F13	Ⅱ	5.20	4.54	Ⅰ	C3	胴		石.角.白	○	褐	灰褐		重層山形文		
46	6B17	Ⅱ	2.54	6.87	Ⅰ	C3	胴		石.角（多）	○	にぶい黄橙	黒褐		楕円文＋重層山形文（変形）		
	6B17	不明	2.46	7.05												
47	7B8	Ⅰ	5.00	2.62	Ⅰ	C3	胴		石（多）.雲（少）	○	にぶい黄橙	灰黄褐		楕円文＋重層山形文（変形）		
48	8B12	Ⅰ	2.17	5.28	Ⅰ	C3	胴		石.白.角	○	褐	褐		楕円文＋重層山形文（変形）		
49	7D11	Ⅱ	0.95	5.07	Ⅰ	C3	口		石.角.チャ	○	にぶい黄橙	灰黄褐		楕円文＋重層山形文（変形）		
50	6B17	Ⅰ	2.98	6.38	Ⅰ	C3	胴		石.角	○	にぶい黄橙	灰黄褐		楕円文＋重層山形文（変形）		
51	7B16	Ⅱ	1.33	6.15	Ⅰ	C4	胴		石.チャ.角	○	明褐	黒褐		楕円文＋格子目文		
52	6A9	Ⅱ	6.88	2.56	Ⅰ	C5	口		石.白.角	○	にぶい黄橙	にぶい橙		楕円文＋平行線状文（縦・横位）		楕円粒扁平
53	7C19	風	7.77	6.56	Ⅱ	A	胴		石.雲	×	橙	橙		横位沈線		
54	7B1	Ⅱ	1.33	1.26	Ⅱ	A	口		白.石.角	○	褐灰.橙. にぶい橙	褐灰.灰褐	内:ナデ	横位沈線間に複合鋸歯文（浅い） 一部押引文	口端:押圧（角棒状工具）	
	7B1	Ⅰ	1.46	1.55												
	7B1	Ⅰ	1.72	1.85												
	7B1	Ⅰ	1.96	1.68												
	7B1	Ⅰ	1.87	1.83												
	7B2	Ⅰ	2.10	1.43												
	7B2	Ⅰ	2.24	1.42												
56	8F17	Ⅱ			Ⅱ	B2	胴		長	○	明赤褐	黒褐	外:ナデ　内:ナデ	V字状沈線　頂部に刺突（丸棒状工具）		内:スス

報告No.	グリッド	層位	出土位置 西から	出土位置 北から	群	分類	残存部位	口径 底径	胎土	繊維痕	色調 内面	色調 外面	調整	文様 内面	文様 外面	備考
55	9E1	Ⅱ	−	−	Ⅱ	A	口		雲.石	○	にぶい褐	にぶい褐		横位沈線・鋸歯文	口端:横位沈線・刺突 口:斜位刺突	
57	4A24	Ⅰ	7.56	9.68	Ⅱ	B1	口～胴	24.6	石.雲.土	○	橙	橙		口:波状・横位沈線区画内 複合鋸歯文（押引文） 胴:斜格子目文＋波状文	口端・外:斜位刺突	他にも同一個体破片あり
	4A24	Ⅰ	7.61	9.87												
	5A4	Ⅰ	7.77	0.32												
	5A4	Ⅰ	7.64	0.01												
	5A4	Ⅰ	7.74	0.01												
	5A4	Ⅱ	7.49	0.76												
	5A4	Ⅱ	7.64	0.43												
	5A4	Ⅱ	7.66	0.05												
	5A4	Ⅱ	7.60	0.07												
	5A5	Ⅰ	8.46	0.64												
	5A5	Ⅰ	8.00	0.34												
	5A5	Ⅱ	8.27	0.31												
58	9C20	Ⅰ	−	−	Ⅱ	B3	胴		雲.白.角	○	灰褐	にぶい褐	外:条痕　内:擦痕	楕円形状沈線		
59	8F15.17	Ⅱ	−	−	Ⅱ	B3	胴		長.白	×	にぶい褐	褐灰	内:ナデ	横位沈線・鋸歯文		
60	8D20	Ⅱ	−	−	Ⅱ	B3	口	18.0	長.チャ	○	褐灰	褐灰		口:L字状沈線　頸:横位・波状沈線	口端:波状沈線	
61	6B6	Ⅰ	1.19	2.12	Ⅱ	B3	口		石.角.白	○	にぶい黄橙	灰黄褐		山形状・横位沈線	口:刺突（丸棒状工具側面）	外：ススト
	6B6	Ⅰ	1.13	2.18												
62	6B6	Ⅰ	0.70	2.39	Ⅱ	B3	口		石.角.白	○	灰褐	にぶい橙	内:ナデ	山形状沈線	口:刺突（丸棒状工具側面）	
	6B6	Ⅰ	0.95	2.97												
63	6C16	Ⅱ	0.71	6.96	Ⅱ	B3	口		石.白.角	×	褐	褐	内:ナデ	横位沈線・鋸歯文		
64	5A15	Ⅱ	8.54	5.63	Ⅱ	B3	胴		石.白.長	×	褐灰	褐灰		斜位沈線交差		
65	4C23	風	5.36	9.64	Ⅱ	B2	胴		石.雲	○	灰褐	灰褐		斜位刺突・横位沈線（櫛歯状工具）		
66	6B6	Ⅰ	1.19	2.25	Ⅱ	B3	胴		石.角	×	褐灰	橙		沈線　菱形状		
67	4D24	Ⅱ	7.68	9.08	Ⅱ	B3	口		白.石.長	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		横位・斜位沈線		
68	7B9	Ⅰ	7.60	3.36	Ⅱ	B3	口・胴		石.白.角	○	灰褐	灰褐	外:条痕 内:ナデ	横位沈線間に斜行沈線 （複合鋸歯文か）		外：ススト
	7B9	Ⅰ	7.40	2.50												
	7B9	Ⅰ	7.22	3.51												
	7B10	Ⅰ	8.14	3.01												
	7B10	Ⅰ	8.20	3.48												
	7B10	Ⅰ	8.05	2.91												
69	8F17	Ⅱ	−	−	Ⅱ	B3	胴		石.雲	◎	暗赤褐	黒褐		X字状・斜位沈線		
70	7D24	Ⅰ	6.32	8.04	Ⅱ	B3	胴		石.白.角	×	灰黄褐	灰黄褐	内:ナデ	横位沈線間に鋸歯文		
71	5D23	Ⅱ	4.78	8.70	Ⅱ	B3	胴		長.白.角（少）	×	灰黄褐	灰黄褐	外:ナデ	横位沈線間に鋸歯文		
72	4D14	Ⅱ	6.06	4.99	Ⅱ	B3	口	25.6	長.石.雲	×	灰褐	にぶい橙	外:条痕　内:ナデ	横位沈線間に波状文	口端:刺突（ヘラ状工具）	
73	5C18	Ⅱ	5.66	7.53	Ⅱ	C1	胴		雲（多）.長	×	にぶい黄橙	橙.にぶい黄橙	外:ナデ 内:ナデ	横位沈線・波状文		93と同一個体
	5C19	Ⅱ	6.64	6.99												
74	5D17	Ⅱ	3.80	6.78	Ⅱ	C2	口		雲.石.白	×	灰褐	灰褐	外:条痕　内:ナデ	横位沈線間に爪形状刺突(貝殻腹縁)		
75	5D13	Ⅱ	4.38	5.95	Ⅱ	C2	口		雲.白.石	×	灰褐	灰褐	外:条痕 内:ナデ	横位沈線間に爪形状刺突(貝殻腹縁)	口端:刺突（丸棒状工具）	
	5D13	Ⅱ	4.74	5.18												

報告No.	グリッド	層位	出土位置		群	分類	残存部位	口径底径	胎　土	繊維痕	色　調		調　整	文　様		備　考
			西から	北から							外　面	内　面		外　面	内　面	
76	7B9	Ⅰ	6.60	3.21	Ⅱ	C4	胴		長	×	橙	橙	内:ナデ	弧状沈線間に刺突文		
77	7E18	Ⅱ	5.80	6.29	Ⅱ	C4	胴		長.雲	×	灰褐	黒褐	内:ナデ	横位沈線間に爪形状刺突(貝殻腹縁)		
78	6B6	Ⅰ	0.65	2.45	Ⅱ	C2	胴		石.雲	×	灰褐	灰褐	外:条痕　内:ナデ	横位沈線間に爪形状刺突(貝殻腹縁)		
79	5D13	Ⅱ	4.38	5.95	Ⅱ	C2	胴		白.石	×	灰褐	灰褐	外:条痕　内:ナデ	横位沈線間に爪形状刺突(貝殻腹縁)		
80	7B2	Ⅰ	2.70	1.38	Ⅱ	B2	胴		長.石	×	黒褐	黒褐	外:擦痕	縦位・斜位沈線間に刺突（丸棒状工具）		
81	7E21	Ⅲ	0.21	9.41	Ⅱ	C1	口		長.雲（少）	×	橙	にぶい赤褐		L字状沈線＋貝殻腹縁文	口端:横位沈線	
82	7E16	風	0.95	7.90	Ⅱ	C1	口		石.白	×	灰黄褐	黒褐		横位沈線間に斜位・山形状沈線＋貝殻腹　縁文＋刺突（棒状工具）	口:刺突（貝殻腹縁）	
83	8E15	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C1	口		長.石.雲	×	にぶい黄褐	黒褐	内:擦痕	入組文風沈線　貝殻腹縁文充填		外:ススト
84	8E12.13	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C1	口		長.石	×	暗褐.にぶい褐	暗赤褐	内:ナデ	口:横位沈線区画内に入組文・貝殻腹縁文充填　頸:横位沈線・波状文	口:刺突	外:ススト
85	5D23	Ⅱ	5.19	8.89	Ⅱ	C1	口		石.角.長	×	褐灰	褐灰	内:ナデ	横位沈線区画内に斜位・弧状沈線 貝殻腹縁文充填	口端:刺突（貝殻腹縁）	
	3D13	Ⅱ	5.55	5.24												
86	5C18	Ⅱ	5.41	7.14	Ⅱ	C1	口		雲.角.長	×	にぶい黄橙	にぶい褐		口:横位沈線区画内にクランク状沈線　貝殻腹縁文充填 頸:横位沈線・波状文	口端:刺突（角棒状工具）	外:ススト
	5C17	Ⅱ	3.35	7.52												
	5C18	Ⅱ	5.82	6.28												
	5C19	Ⅱ	6.83	6.35												
87	8E18	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C1	口		長.チャ	×	褐	褐		横位沈線区画内にクランク状沈線・貝殻腹縁文充填	口端:横位沈線	内:ススト
88	8F16・21	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C1	口		石.角	×	黒褐	黒褐		口:横位沈線区画内にクランク状沈線 貝殻腹縁文充填　頸:横位・波状沈線		内外:オコゲ
89	8E15	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C1	口～頸		長.白.角	×	にぶい褐	にぶい褐		口:入組文風沈線　貝殻腹縁文充填 頸:横位・斜位沈線　貝殻腹縁文充填	口端:一部刺突（丸棒状工具）	外:ススト
90	6B15	Ⅰ	9.66	4.09	Ⅱ	C1	口		長.白.石.チャ	×	暗褐	褐	外:条痕 内:条痕	L字状沈線　貝殻腹縁文充填 横位沈線間に刺突	口端:刺突（丸棒状工具）	
	6B15	Ⅲ	9.66	4.09												
91	7B23	Ⅰ	5.92	8.83	Ⅱ	C1	頸		長.角.雲	×	浅黄橙	にぶい黄橙		クランク状沈線間に貝殻腹縁文充填		
92	8F12	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C1	頸		石.角	×	にぶい黄橙	黒褐		斜位沈線　貝殻腹縁文充填		
93	5C14	Ⅱ	6.01	5.69	Ⅱ	C1	口～胴	29.0	雲.石（少）	×	橙.黒褐.赤褐. 褐.にぶい褐	橙.黒褐.明褐. 褐.赤褐	外:ナデ 内:ナデ	口:入組文　貝殻腹縁文・波状文充填 頸:コの字または四角形状沈線内に波状文	口:刺突（貝殻腹縁）	73と同一個体 他にも同一個体破片あり
	5C18	Ⅰ	5.68	6.14												
	5C18	Ⅰ	5.19	7.49												
	5C18	Ⅱ	4.58	7.36												
	5C18	Ⅱ	5.51	7.30												
	5C18	Ⅱ	5.44	7.39												
	5C18	Ⅱ	5.81	7.63												
	5C18	Ⅱ	5.95	7.19												
	5C19	Ⅱ	6.04	6.98												
	5C19	Ⅱ	6.31	7.74												
	5C19	Ⅱ	7.53	7.20												
	5C19	Ⅱ	7.70	7.02												
	5C19	Ⅱ	6.39	7.02												
	5C23	Ⅱ	4.24	8.50												
	5C24	Ⅱ	6.28	8.40												

報告No.	グリッド	層位	出土位置		群	分類	残存部位	口径底径	胎土	繊維痕	色調		調整	文様		備考
			西から	北から							外面	内面		外面	内面	
94	5E12	Ⅱ	2.87	5.95	Ⅱ	C1	口		長.白.土	×	にぶい黄橙	にぶい黄橙		横位沈線・斜位沈線間に貝殻腹縁文充填	口端:刺突（貝殻腹縁）	
95		不明	−	−	Ⅱ	C1	胴		石.雲	×	橙	褐灰		横・斜位沈線間に貝殻腹縁文充填		
96	9E6	Ⅱ	−	−	Ⅱ	C1	頸		長.白	×	にぶい褐	灰褐		斜位沈線外に貝殻腹縁文充填		薄手
97	8A4	Ⅰ	6.67	1.63	Ⅱ	C1	胴		石.白.長.チャ.雲	×	橙	暗褐		横・斜位沈線間に貝殻腹縁文充填（菱形状か）		内外:スス
98	8E15	Ⅱ	−	−	Ⅱ	C1	胴		石.白	×	にぶい褐	にぶい黄橙		斜・横位沈線間に貝殻腹縁文充填		
99	7B8	Ⅰ	4.65	2.96	Ⅱ	B2	胴		白（多）.石.角	○	褐灰	褐灰		斜位・横位沈線間に刺突(角棒状工具)		
100	4C20	風	9.75	7.70	Ⅱ	C1	胴		長.石	×	橙	にぶい橙		斜位沈線　貝殻腹縁文充填		貝殻腹縁刺突　垂直・斜位
101	6D5.6E1	Ⅱ	−	−	Ⅱ	C1	胴		長.チャ.角.石	×	灰黄褐	灰黄褐		横位・弧状沈線間に貝殻腹縁文充填		
102	5B13	Ⅰ	4.08	5.57	Ⅱ	C1	胴		角.長.石	○	明黄褐	褐		弧状・斜位沈線　貝殻腹縁文充填		
103	8E13	Ⅱ	−	−	Ⅱ	C1	胴		長.角.石.チャ	×	褐	にぶい褐		横位・弧状沈線　貝殻腹縁文充填		
104	7B12	Ⅰ	2.97	5.19	Ⅱ	C1	胴		長.白	○	にぶい褐	にぶい褐		弧状沈線　貝殻腹縁文充填		
105	5B18	Ⅱ	4.38	6.64	Ⅱ	C1	胴		長.角	×	にぶい褐	褐		弧状・横位沈線　貝殻腹縁文充填		
106	4E1	Ⅱ	1.18	1.75	Ⅱ	C1	胴		長.角	×	にぶい黄橙	灰黄褐		縦位・弧状沈線　貝殻腹縁文充填		沈線浅い
107	7G13	Ⅱ	4.80	5.48	Ⅱ	C1	胴		石（多）.角	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		斜位・弧状・横位沈線 貝殻腹縁文（横位）		
108	7D14	Ⅱ	6.35	4.59	Ⅱ	C4	胴		白.長.角	○	橙	橙		横位・弧状沈線　貝殻腹縁文充填		
109	6C22	Ⅰ	2.62	9.48	Ⅱ	C4	口	24.4	石.雲.角（少）	○	黒褐.暗褐	暗褐.黒褐	内:ナデ	横位・楕円状沈線　貝殻腹縁文		
	6C22	Ⅱ	3.57	8.95												
	6C23	Ⅰ	4.51	9.78												
110	8F12	Ⅱ	−	−	Ⅱ	C4	胴		長.角	×	にぶい黄橙	灰黄褐		鋸歯文・横位沈線　貝殻腹縁文充填		器厚薄い
111	6D18	撹乱	5.36	7.65	Ⅱ	C4	胴		角.白.長	×	黒褐	橙		横位沈線・鋸歯文　貝殻腹縁文充填		
112	5D7	Ⅱ	2.11	3.95	Ⅱ	C2	胴		石.チャ（少）	○	にぶい黄橙	黒褐		横位沈線間に波状文　貝殻腹縁文充填		
113	8F21	Ⅱ	−	−	Ⅱ	C2	胴		石.角（多）	×	にぶい赤褐	黒褐		横位沈線間に波状文　貝殻腹縁文充填		内:オコゲ
114		不明	−	−	Ⅱ	C2	口		長.チャ（少）	×	橙	橙		横位沈線　貝殻腹縁文充填		
115	4C20	Ⅱ	9.87	7.25	Ⅱ	C2	口	16.2	石.角.チャ	○	橙・灰褐	橙.褐		横位沈線間に波状文 貝殻腹縁文充填	口端:刺突（貝殻腹縁か）	内:一部スス
	4D16	風	0.57	7.98												
	4D16	Ⅱ	0.80	7.71												
	4D21	Ⅱ	0.86	8.06												
	4D24	Ⅱ	6.03	8.90												
	4D24	Ⅱ	7.74	9.95												
	5D18	Ⅱ	5.15	6.96												
	5D23	Ⅱ	4.63	8.76												
	6D3	Ⅱ	4.96	0.47												
	6D3	Ⅱ	4.89	0.45												
116	5D21	風	1.03	9.03	Ⅱ	C2	胴		角.長	×	褐	灰褐		横位沈線間に波状文　貝殻腹縁文充填		
117	6B10	Ⅰ	9.49	3.86	Ⅱ	C2	胴		長.石	○	橙	灰褐		横位沈線間に波状文　貝殻腹縁文充填		
118	9F1	Ⅱ	−	−	Ⅱ	C2	胴		石（多）.角	×	明赤褐	灰褐		横位沈線間に波状文　貝殻腹縁文充填		
119	5D22	風	2.37	8.28	Ⅱ	C2	口		長.角.石（少）	×	明褐	にぶい褐		横位沈線　貝殻腹縁文充填	口端:横位沈線	内:スス
120	8F17	Ⅱ	−	−	Ⅱ	C2	口		チャ.長	×	黒褐	橙		横・斜位沈線　貝殻腹縁文充填		

報告No.	グリッド	層位	出土位置		群	分類	残存部位	口径底径	胎　土	繊維痕	色　調		調　整	文　様		備　考
			西から	北から							外　面	内　面		外　面	内　面	
121	5B8	Ⅱ	5.01	2.56	Ⅱ	C2	口・胴		チャ.長.石（多）	○	暗褐	褐.赤褐		横位沈線（一部L字状）間に波状文 貝殻腹縁文充填	口:内外刺突	
	6B4	Ⅰ	6.92	0.73												
	7B9	Ⅱ	6.45	2.86												
122	7D7	Ⅱ	2.36	3.62	Ⅱ	C2	胴		チャ.長.白.石	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		横位沈線・波状文交互　貝殻腹縁文充填		
123	8F17	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C2	口		長.角	×	橙.灰褐	黒褐		横位沈線　貝殻腹縁文充填		内:スス
124	8D25	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C2	胴		長.石	×	明褐	灰褐		横位・波状沈線（一部斜位） 貝殻腹縁文充填		内:スス
125		表採	－	－	Ⅱ	C2	口		石（多）.長.角	○	にぶい黄橙	灰黄褐		横位沈線間に貝殻腹縁文充填	口:刺突（丸棒状工具側面）	
126	7B3	Ⅰ	5.88	1.77	Ⅱ	C2	口		石（多）.角	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		横位沈線間に貝殻腹縁文充填	口:刺突か（貝殻腹縁か）	
127	7B8	Ⅰ	5.25	2.88	Ⅱ	C2	胴		石（多）.白（多）.角	○	灰黄褐	灰黄褐		横位沈線間に貝殻腹縁文充填		
128	9D8	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C2	胴		石（多）.角	○	明赤褐	褐		横位沈線間に貝殻腹縁文充填		
129	4D25	Ⅱ	8.34	8.63	Ⅱ	C4	胴		チャ.長	○	にぶい褐	灰褐		横位沈線・波状文　貝殻腹縁文		沈線浅い
130	7D18	Ⅰ	4.49	6.07	Ⅱ	C4	胴		長（多）.チャ.角	○	灰褐	褐		斜位沈線間に貝殻腹縁文平行充填		
	7D13	Ⅱ	4.58	5.81												
131	4B15	Ⅲ	8.60	4.46	Ⅱ	C4	口		長.石.角	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		横位・斜位沈線　貝殻腹縁文平行充填		
132	6B1	Ⅰ	1.91	1.28	Ⅱ	C4	口		長.石	○	明黄褐	にぶい黄橙		横位沈線・斜位沈線間に貝殻腹縁文 平行　充填		
133	4C7	Ⅱ	2.11	3.44	Ⅱ	C4	胴		長.石.角.チャ	○	灰黄褐	にぶい橙		横位沈線（一部L字状）間に貝殻腹 縁文　充填		
134	7E14	Ⅱ	6.77	5.76	Ⅱ	C4	胴		長.チャ	○	褐	灰黄褐		弧状沈線　貝殻腹縁文		外:一部スス
135	7C10	Ⅱ	9.13	2.40	Ⅱ	C3	口		石（多）.角	○	灰褐	灰褐		横位沈線・ 鋸歯文間に貝殻腹縁文一部充填	口:刺突（貝殻腹縁）	
	7C10	不明	9.31	2.13												
136	8G15	Ⅱ,風	－	－	Ⅱ	C3	口		石.角.雲	○	にぶい褐	にぶい褐		横位沈線＋縦位短沈線 鋸歯文間に貝殻腹縁文平行充填	口:刺突（貝殻腹縁）	外:スス
137	9D20	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C3	口		長.チャ	○	灰褐	にぶい褐	外:擦痕	横位沈線＋貝殻腹縁文・ 山形状沈線＋貝殻腹縁文		外:スス
138	7D6	Ⅱ	1.74	3.68	Ⅱ	C3	胴		石（多）.白.角	○	にぶい黄橙	灰黄褐		鋸歯文間に貝殻腹縁文平行充填		
139	6D3	Ⅱ	5.71	1.74	Ⅱ	C3	胴		石（多）.角.雲	○	灰褐	にぶい橙		鋸歯文間に貝殻腹縁文平行充填		
140	5D12	Ⅰ	3.92	5.94	Ⅱ	C3	胴		石（多）.角（多）.雲	○	褐	黒褐		三角形状沈線　貝殻腹縁文平行充填		
141	3E20	Ⅱ	9.75	6.36	Ⅱ	C3	胴		石.長.角.雲	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		鋸歯文間に貝殻腹縁文平行充填		
142	4D11	Ⅱ	1.08	5.89	Ⅱ	C4	胴		石.角.長	○	にぶい黄橙	灰黄褐		横位短沈線・弧状沈線＋貝殻腹縁文		
143	7C4	Ⅱ	6.79	1.75	Ⅱ	C4	胴		石.雲	○	黒褐	黒褐		弧状・斜位・横位沈線＋貝殻腹縁文		
144	7C10	Ⅱ	9.65	2.05	Ⅱ	C4	胴		石.白.角	○	灰褐	灰褐		斜位沈線　貝殻腹縁文を平行充填		
145	7B3	Ⅰ	5.91	0.15	Ⅱ	C3	胴		石（多）.角（多）.雲	○	橙	灰褐		斜位・横位沈線　貝殻腹縁文平行充填		
146	6D3	Ⅰ	5.08	1.72	Ⅱ	C3	胴		石（多）.角.雲	○	褐	灰褐.にぶい橙		斜位沈線　貝殻腹縁文平行充填		
147	5C23	Ⅱ	4.13	8.29	Ⅱ	C4	胴		石.白.角	○	灰褐	灰褐		横位沈線　貝殻腹縁文矢羽状		
148	5D5	風	8.75	1.60	Ⅱ	C4	胴		石（多）.角（多）.雲	○	にぶい黄橙	黒褐		横位沈線　貝殻腹縁文		
149	6D3	Ⅱ	5.01	0.73	Ⅱ	C4	胴		石（多）.角	○	橙	にぶい橙		斜位沈線　貝殻腹縁文		
150	6C6	Ⅰ	1.38	2.75	Ⅱ	C4	口		長.チャ	○	褐	灰褐		横位沈線　貝殻腹縁文	口端:刺突（貝殻腹縁か）	
151	6F14	Ⅱ	6.89	5.63	Ⅱ	C4	口		長.白.雲	○	灰黄褐	にぶい黄橙		横位沈線　貝殻腹縁文	口端:刺突	
152	8G15	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C4	胴		チャ.長	○	灰褐	にぶい橙	内:ナデ	貝殻腹縁文　横位沈線		

報告No.	グリッド	層位	出土位置		群	分類	残存部位	口径底径	胎土	繊維痕	色調		調整	文様		備考
			西から	北から							外面	内面		外面	内面	
153	8C2	Ⅱ	2.91	1.64	Ⅱ	C4	胴		チャ.長（少）	○	褐	灰褐		横位沈線　貝殻腹縁文		
154	5C23	Ⅱ	4.93	8.23	Ⅱ	C4	胴		長（多）.角.石	○	橙	灰黄褐	外:ナデ	貝殻腹縁文		
155	5C13	Ⅰ	5.65	4.75	Ⅱ	C4	胴		長.チャ.石	○	褐	黒褐	内:ナデ	斜位沈線　貝殻腹縁文		外:ススト
156	7D14	Ⅱ	6.51	4.27	Ⅱ	C4	胴		長.チャ	○	灰褐	にぶい橙	内:ナデ	弧状・斜位沈線（貝殻腹縁文押圧→沈線か）		
157	4D19	Ⅱ	7.96	6.25	Ⅱ	D1	口		石（多）.角.雲（少）	○	暗褐	褐	内:ナデ	縦位細沈線＋爪形状刺突（縦・横方向）		
158	5E5	Ⅱ	8.61	1.26	Ⅱ	D1	胴		石（多）.角	○	褐	暗褐		横位細沈線＋爪形状刺突		
159	7B3	Ⅰ	4.96	0.08	Ⅱ	D1	胴		白（多）.石.角.チャ	○	暗褐	黒褐		横位細沈線＋爪形状刺突		
160	5F13	Ⅱ	5.72	5.47	Ⅱ	D1	胴		石.角（少）	○	灰褐	灰褐		刺突（櫛歯状工具）・横位細沈線		
161	5F8	Ⅱ	5.41	3.49	Ⅱ	D1	胴		石（多）.角	○	褐	暗褐		横位細沈線間に刺突（櫛歯状工具）		
162	6C6	Ⅰ	1.34	2.25	Ⅱ	D1	胴		長.雲.白.石	○	暗褐	暗褐		斜位細沈線＋円形状刺突		
	6C6	Ⅰ	1.27	2.40												
163	8A5	Ⅰ	9.37	0.65	Ⅱ	D1	胴		長.雲（少）	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		斜位細沈線＋刺突（１単位３条）		
	8A5	Ⅰ	9.05	0.91												
164	5D2	Ⅱ	3.96	0.87	Ⅱ	D1	胴		白（多）.長（多）.雲.チャ	○	黒褐	黒褐		斜位細沈線＋円形状刺突		
165	8B4	Ⅱ	6.22	0.11	Ⅱ	D1	胴		長（多）.石	○	にぶい橙	灰黄褐		斜位・横位細沈線（１単位４条）＋刺突（角棒状工具）		
166	6H16.21	風	－	－	Ⅱ	D1	胴		石（多）.長（多）.土.チャ	○	灰黄褐	灰黄褐	外:条痕	押引状刺突（斜方向）		
167	7B6	Ⅰ	1.61	3.27	Ⅱ	D2	口		土.角.雲.石.長（少）	○	褐灰	褐灰	外:擦痕	縦位細沈線（１単位２条）	口端:一部刺突	
168	3E1	Ⅱ	1.01	0.69	Ⅱ	D2	口		石（多）.角.チャ	○	明黄褐	にぶい黄褐		縦位細沈線		
169	5B2	Ⅰ	2.52	1.47	Ⅱ	D2	口		角.石.土	○	にぶい褐.黒	灰褐		縦位細沈線（ヘラ状工具か）		外:ススト
170	6A8	Ⅰ	5.61	3.59	Ⅱ	D2	口		雲.石	○	にぶい橙	橙		縦位・斜位細沈線	口端:刺突	
171	4C16	Ⅱ	1.65	7.84	Ⅱ	D2	口		石.長	○	明黄褐	灰黄褐		横位細沈線	口:刺突	
173	5G12	Ⅱ	3.68	4.84	Ⅱ	D2	口		白（多）.石.雲	○	黒褐	褐		口:刺突　横・縦位沈線（１単位４条）		
174	7A10	Ⅱ	9.33	3.52	Ⅱ	D2	口		白（多）.石	◎	にぶい橙	にぶい黄橙		口:刺突　横・縦位細沈線	口:刺突	
175	5C7	Ⅱ	3.61	3.59	Ⅱ	D2	口		石.角	○	にぶい褐	にぶい橙		横位細沈線（１単位４条）	口端:刺突（ヘラ状工具）	
176	4D18	Ⅱ	5.59	7.89	Ⅱ	D2	口		石（多）.角	○	灰褐	にぶい黄橙		横位細沈線	口端:刺突	
177	5C2	Ⅱ	3.87	1.68	Ⅱ	D2	口		石.雲.長	○	暗褐	橙		刺突（ヘラ状工具）　斜位細沈線交差	内:刺突	
178	7B24	Ⅰ	6.55	9.16	Ⅱ	D2	口		石.雲.長	○	橙	褐		口:刺突　横位・斜位細沈線	内:刺突	
179	8B7	Ⅲ	2.09	2.85	Ⅱ	D2	口		石.雲	○	褐	暗褐		横位細沈線	口端:刺突（ヘラ状工具）	
180	7C4	Ⅰ	6.85	0.73	Ⅱ	D2	口		白.角	○	灰黄褐	灰黄褐		横位・斜位細沈線		
181	8A10	Ⅰ	9.02	3.02	Ⅱ	D2	口		白.石	○	にぶい褐	灰黄褐		斜・横位細沈線	口端:刺突	
	8A10	Ⅰ	9.31	2.99												
	8A10	Ⅰ	9.33	2.98												
182	5D13	Ⅱ	4.38	5.95	Ⅱ	D2	口		白.石（少）.雲（少）	○	灰褐	黒褐		斜・横位細沈線	口端:刺突	
183	4D23	Ⅱ	4.76	8.86	Ⅱ	D2	口		白.石.雲（少）	○	にぶい黄橙	黒褐		刺突　斜・横位細沈線		
	4D23	Ⅱ	5.11	8.87												
184	8B1	Ⅱ	1.50	1.70	Ⅱ	D2	口		石.角	○	褐	橙		斜位細沈線	口端:刺突	
185	7B24	Ⅰ	6.60	8.64	Ⅱ	D2	口		白.石.角（少）	○	にぶい黄橙	灰黄褐		斜・横位細沈線	口端:刺突	
186	4C25	風	8.83	8.43	Ⅱ	D2	口		白.石.チャ	○	橙	灰褐		斜位細沈線	口端:刺突	
187	3C18	Ⅱ	5.03	6.66	Ⅱ	D2	口		白（多）.石.角	○	黒.にぶい黄橙	褐灰		横位・斜位細沈線交差	口端:刺突	
188	5A19	Ⅰ	7.16	6.08	Ⅱ	D2	口		石.白.角.チャ	○	褐	褐		斜位細沈線（１単位３条）	口:刺突	

報告No.	グリッド	層位	出土位置		群	分類	残存部位	口径 底径	胎　土	繊維痕	色　調		調　整	文　様		備　考
			西から	北から							外　面	内　面		外　面	内　面	
172	5B1	Ⅰ	1.79	0.92	Ⅱ	D2	口	27.0	白.石.長（少）	○	にぶい褐	にぶい褐	内:ナデ	刺突（角棒状工具）　縦位細沈線→ 横位・菱形状細沈線（１単位４条）	口:刺突（角棒状工具）	一部摩耗 他にも同一個体破片あり
	5B2	Ⅰ	2.07	0.23												
	5B2	Ⅰ	2.10	0.21												
	5B2	Ⅰ	2.14	0.23												
	5B2	Ⅰ	2.26	0.88												
	5B2	Ⅰ	2.24	0.77												
	5B2	Ⅰ	2.22	0.72												
	5B2	Ⅰ	2.33	0.48												
	5B2	Ⅰ	2.62	0.50												
	5B2	Ⅰ	2.88	0.85												
	5B2	Ⅰ	2.55	0.75												
	5B2	Ⅰ	2.47	0.63												
	5B2	Ⅰ	2.51	0.76												
	5B2	Ⅱ	2.12	0.17												
	5B2	Ⅱ	2.77	1.05												
	5B2	Ⅱ	2.22	0.53												
	5B2	Ⅱ	2.30	0.59												
	5B2	Ⅱ	2.34	0.53												
	5B2	Ⅱ	2.60	0.60												
	5B2	Ⅱ	2.37	1.10												
	5B2	Ⅱ	3.00	0.67												
	5B2	Ⅱ	2.47	0.57												
189	7B13	Ⅱ	4.46	5.35	Ⅱ	D2	口		石.白.チャ.角	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		斜位細沈線（矢羽状）	口端:刺突	
190	8B4	Ⅰ	6.52	0.14	Ⅱ	D2	口		石.長.角（少）	○	灰褐	灰褐		刺突（角棒状工具） 斜位（矢羽状）細沈線（１単位３条）	口端:刺突	
191	7B8	Ⅰ	4.48	3.90	Ⅱ	D2	口		白.石.チャ.雲	○	にぶい橙	灰褐		斜位細沈線（矢羽状）	口端:刺突	
192	4D23	Ⅱ	5.05	9.30	Ⅱ	D2	口		長.石.角	○	にぶい褐	灰褐		斜位細沈線	口端:刺突	
193	8F25	Ⅱ	－	－	Ⅱ	D2	口		石.長.白.角	○	褐	にぶい赤褐		斜位細沈線	口端:刺突	
194	8B1	Ⅱ	1.50	1.70	Ⅱ	D2	口		白（多）.石.角	○	褐灰	褐灰		斜位細沈線	口端:刺突	
195	5B22	Ⅰ	3.92	8.80	Ⅱ	D2	口		雲.白.長（少）	○	橙	にぶい橙		斜位細沈線	口端:刺突	
196	5G7	撹乱	3.50	3.95	Ⅱ	D2	口		白.石.長	○	黒	黒		刺突　斜位細沈線		
197	6A4	Ⅱ	6.54	1.52	Ⅱ	D2	口		石.角.長.雲	○	褐灰	にぶい褐		斜位細沈線	口端:刺突	
198	5C12	Ⅱ	3.58	4.11	Ⅱ	D2	口		石.角.雲	○	にぶい褐	灰褐		斜位細沈線	口端:刺突	
199	4B5	Ⅱ	9.91	0.22	Ⅱ	D2	口		白.長.角.石	○	にぶい黄橙	灰黄褐		刺突　横位・斜位細沈線（１単位４条）		
200	8B3	Ⅱ	4.48	1.30	Ⅱ	D2	口		雲.白.石	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		刺突　斜格子目状細沈線		
201	6A10	Ⅰ	9.44	2.48	Ⅱ	D2	胴		白.長.石	○	褐	黒褐		斜格子目状細沈線		
202	6A10	Ⅰ	9.08	2.38	Ⅱ	D2	胴		長.石.雲	○	褐	灰褐		斜格子状細沈線（１単位２条）		
203	4C23	Ⅱ	4.68	9.11	Ⅱ	D2	胴		石.角	○	にぶい黄褐	にぶい褐		横・縦位細沈線交差（格子目状）		外:スス
204	7C7	Ⅱ	2.78	2.75	Ⅱ	D2	胴		石.長.角	○	暗褐	褐		斜・縦位細沈線		
205	5B2	Ⅰ	3.63	0.16	Ⅱ	D2	胴		石.角.白.長	○	灰褐	にぶい褐		斜・縦位細沈線交差		
206	5B22	Ⅱ	3.39	9.42	Ⅱ	D2	胴		石.角.白	○	にぶい褐	黒褐		斜位細沈線		

報告No.	グリッド	層位	出土位置		群	分類	残存部位	口径底径	胎土	繊維痕	色調		調整	文様		備考
			西から	北から							外面	内面		外面	内面	
207	5C17	Ⅱ	3.24	7.71	Ⅱ	D2	胴		長.白.チャ.石	○	暗褐	褐灰		横・斜位細沈線一部交差		
208	8B4	Ⅱ	6.31	0.09	Ⅱ	D2	胴		白.石.チャ.角	○	にぶい黄橙	灰黄褐		斜位細沈線（矢羽状）		
	8B4	Ⅱ	6.50	0.10												
209	7B3	Ⅰ	4.60	0.36	Ⅱ	D2	胴		白（多）.雲.石	○	暗褐	黒褐		横・縦位・斜位細沈線		
210	6A9	Ⅰ	7.11	2.36	Ⅱ	D2	胴		石（多）.雲.角	○	暗褐	にぶい褐		斜位細沈線		
211	5D12	Ⅱ	2.20	4.78	Ⅱ	D2	胴		白.石.角	○	灰褐	にぶい褐	内:ナデ	斜位細沈線		
212	4C17	Ⅱ	3.21	7.83	Ⅱ	D2	胴		石.雲.角.長	○	にぶい褐	灰褐	外:擦痕	斜位細沈線		
	4C22	Ⅱ	2.64	8.08												
213	5C8	Ⅱ	4.52	3.07	Ⅱ	D2	胴		長.雲.石	○	にぶい褐	にぶい橙		縦位・斜位細沈線		
214	5D17	Ⅰ	3.35	7.06	Ⅱ	D2	胴		白.石.雲（少）	○	黒褐	灰褐	内:ナデ	斜位細沈線		
215	5D11	Ⅱ	1.27	4.88	Ⅱ	D2	胴		雲.石.長（少）	○	明黄褐	橙		斜・横位細沈線		
216	4F16	Ⅱ	1.22	7.49	Ⅱ	D2	胴		白.石.雲.長	○	黒褐	灰褐		横・斜位細沈線（1単位7条か）		
217	4E20	Ⅱ	9.45	6.69	Ⅱ	D2	胴		石.雲.長	○	灰黄褐	灰褐		斜位細沈線		
218	8E8	Ⅱ	4.76	3.80	Ⅱ	D2	胴		石.雲	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		横・斜・縦位細沈線		
219	5C17	Ⅱ	2.94	7.57	Ⅱ	D2	胴		長.石.チャ.雲	○	褐	褐灰.橙		横位細沈線		
220	4D11	Ⅱ	1.42	5.42	Ⅱ	D2	胴		白.石.雲.土.チャ	○	黒褐	黒褐		横位細沈線　無文帯あり		
221	7B1	Ⅰ	0.18	1.28	Ⅱ	D2	胴		白.石.雲.チャ	○	にぶい褐	灰褐		斜位細沈線交差		
222	7B3	Ⅰ	4.98	1.14	Ⅱ	D2	胴		白.石.雲.角	○	明赤褐	明褐		縦位細沈線		
	7B3	Ⅰ	5.20	1.20												
223	7D8	Ⅱ	4.96	2.95	Ⅱ	D2	胴		雲.石.長	○	赤褐	にぶい赤褐		斜位細沈線（条痕か）		
224	6B21	Ⅰ	0.82	9.98	Ⅱ	D2	底		長.雲.石	○	にぶい褐	橙		斜位・横位細沈線（条痕か）		
225	5D1	Ⅱ	1.10	0.96	Ⅱ	D2	胴		白.石.チャ	○	灰褐	黒褐	内:擦痕	縦位細沈線		
226	5A25	Ⅰ	9.99	9.42	Ⅱ	D2	胴		白（多）.石.雲.角	○	赤褐	にぶい褐	内:ナデ	斜位細沈線		
227	5D1	風	0.34	1.31	Ⅱ	E	胴		石.長	○	褐灰	褐灰	内:ナデ	横・斜位細沈線　貝殻腹縁文 絡条体側面圧痕（L）		
228	4E24	Ⅱ	6.33	8.24	Ⅲ	A	口	27.0	石（多）.雲.角（少）	◎	にぶい褐. にぶい黄橙	黒褐.にぶい褐. 橙.暗褐	内:条痕（絡条体）	三角形状隆帯 絡条体側面圧痕（Rか）	口端:絡条体側面圧痕	
	4E24	Ⅲ	6.45	8.29												
	4E25	Ⅲ	5.68	1.04												
	5E3	Ⅱ	8.59	8.80												
229	8B10.15	Ⅰ	−	−	Ⅲ	A	胴		石.長.雲.チャ	◎	橙	橙	内:条痕	隆帯２条　絡条体側面圧痕（L）		
230	8B3	Ⅰ	5.27	0.65	Ⅲ	A	胴		石.雲.角	◎	橙	明黄褐	内:条痕	隆帯２条　絡条体側面圧痕　地文縄文LR		
231	4B19	Ⅰ	6.59	6.15	Ⅲ	A	口		石.角	◎	にぶい黄橙	黒褐		隆帯２条　絡条体側面圧痕 （胴部鋸歯状）		
232	5H15	Ⅱ上	8.10	5.19	Ⅲ	A	口		土.チャ.石.雲	◎	にぶい橙	にぶい橙		隆帯１条　絡条体側面圧痕	口端:絡条体側面圧痕	
233	9E6	Ⅱ	−	−	Ⅲ	A	口		白.チャ	◎	にぶい褐.黒褐	にぶい褐		隆帯１条　絡条体側面圧痕（L）	口端:絡条体側面圧痕	外:スス
234	4B6	Ⅱ	0.19	3.15	Ⅲ	A	口（端欠損）		白.長（少）	◎	褐灰	褐灰		逆Ｔ字状隆帯　絡条体側面圧痕（隆帯間鋸歯状）絡条体芋虫状		器面摩耗
235	8E21	Ⅱ	−	−	Ⅲ	A	口		白.石	○	黒	黒		隆帯１条　絡条体側面圧痕		
236	6G23	風	−	−	Ⅲ	A	胴		白.石.チャ（多）	○	暗褐	黒褐	外:条痕	絡条体側面圧痕　横位多段		
237	9E6	Ⅱ	−	−	Ⅲ	A	口		長（少）	◎	にぶい黄橙	にぶい黄橙		Ｕ字状隆帯上に絡条体側面圧痕		
238	4G16	Ⅱ	0.35	6.78	Ⅲ	A	口		長.チャ	◎	灰褐	にぶい褐	外:条痕　内:擦痕	絡条体側面圧痕　絡条体芋虫状		

報告No.	グリッド	層位	出土位置 西から	出土位置 北から	群	分類	残存部位	口径 底径	胎土	繊維痕	色調 外面	色調 内面	調整	文様 外面	文様 内面	備考
239	5B1	Ⅰ	1.80	0.83	Ⅲ	B1	口		白.石.雲（少）.長	◎	黒褐	灰褐		縄文LR　絡条体側面圧痕（山形状）	口端:絡条体側面圧痕	
	5B1	Ⅱ	1.75	0.80												
240	5B2	Ⅰ	2.08	0.39	Ⅲ	B1	胴		石（多）.白.角	◎	にぶい褐	黒褐		縄文LR　絡条体側面圧痕		
241	5C7	Ⅱ	3.40	3.22	Ⅲ	B1	胴		石.雲	◎	にぶい黄橙	にぶい黄橙	内:条痕	縄文RL　絡条体側面圧痕（山形状） 絡条体L		
242	8E22.23	Ⅱ	−	−	Ⅲ	B3	口・胴		白.長.石	●	黒	黒	口内:ナデ	絡条体側面圧痕２段・ 絡条体回転縄文（LR）	口端:絡条体回転縄文	
243	4A24	Ⅱ	7.97	8.56	Ⅲ	B1	口	24.6	石（多）.雲.長	◎	橙.灰褐	橙		縄文RL　絡条体側面圧痕	口端:絡条体側面圧痕	口縁４単位突起か
	4A25	Ⅰ	8.03	8.95												
	4A24	Ⅰ	7.91	8.93												
244	6D1.2	Ⅱ	−	−	Ⅲ	B1	口		白.長.石	◎	暗褐	にぶい褐	内:条痕	縄文LR　口:絡条体側面圧痕低隆帯１条		
245	7E22	Ⅱ	3.91	9.27	Ⅲ	B2	胴		長.石	◎	黒褐	にぶい褐	内:擦痕	撚糸文L　絡条体側面圧痕		外:スス
246	5D4	Ⅱ	7.05	1.78	Ⅲ	B3	口	25.8	石（多）.チャ（少）	◎	黒褐・褐	暗褐.褐		撚糸文L（絡状体原体回転） 隆帯上に絡条体側面圧痕	口端:撚糸文L回転	
	4F22	Ⅱ	3.44	9.32												
	5D5	Ⅱ	8.38	1.47												
	5D10	Ⅱ	8.67	3.18												
	5D14	Ⅱ	7.72	5.33												
247	8E2	Ⅱ	2.33	1.09	Ⅲ	C1	口		白（多）.石（多）.角	◎	暗褐	暗褐	内:条痕	縄文LR　隆帯１条		
	8E2	Ⅱ	2.41	1.08												
248	7D10	Ⅱ	9.17	3.80	Ⅲ	C1	口		白（多）.石（少）.雲（少）	◎	灰褐	黒褐	内:条痕	縄文RL		口縁内剥ぎ状
249	6C10	Ⅰ	9.00	2.57	Ⅲ	C2	胴		長.石.雲	○	赤褐	明赤褐		縄文RL・LR　横位沈線	縄文RL＋条痕	
250	8E20	Ⅱ	−	−	Ⅳ	A1	口		白.石.雲.チャ	○	黒褐	暗褐	内:ナデ	口:撚糸側面圧痕R・L2本組　胴:縄文RL横位　隆帯上刺突（丸棒状工具側面）		外:スス
251	9C23	Ⅱ	−	−	Ⅳ	A2	口・胴	22.8	石.白.雲.チャ.長	◎	褐	明褐		縄文LR横位 横位隆帯上刺突（丸棒状工具側面）		外:スス
252	8G16	Ⅱ	−	−	Ⅳ	A2	口		長.石.白	○	橙.黒褐	にぶい褐		非結束羽状縄文LR・RL　隆帯上刺突		外:スス
253	4C24.25	Ⅱ	−	−	Ⅳ	B1	胴		長.白.チャ	○	橙	にぶい褐	内:ナデ	非結束羽状縄文LR縦位・横位		
254	8A4	Ⅰ	6.58	0.76	Ⅳ	B1	胴		石.長.角.チャ	○	にぶい橙	にぶい黄橙		羽状縄文LR・RL（撚り細かい）		
255	6G23	風	−	−	Ⅳ	B1	胴		長.石.チャ.角	○	にぶい褐.黒褐	にぶい褐		非結束羽状縄文LR・RL		
	6G23	風	5.37	9.99												
256	6F12	Ⅱ	2.81	4.69	Ⅳ	B1	胴		雲.石（少）	○	灰褐・橙	橙		非結束羽状縄文LR・RL		
	6F12	Ⅱ	2.92	4.74												
	6F12	Ⅱ	3.09	4.78												
	6F12	Ⅱ	2.82	4.87												
257	6F13	Ⅱ	4.27	4.83	Ⅳ	B1	胴		白.雲.長.チャ	○	暗褐	橙		縄文LR（羽状か）		外:スス
258	7D8	Ⅱ	5.41	2.31	Ⅳ	B1	胴		土.石	○	にぶい褐	黒褐	内:ナデ	非結束羽状縄文LR・RL　菱形構成		外:スス
259	8F22	Ⅱ	−	−	Ⅳ	B2	胴		白	○	明褐	暗褐		縄文LR		内:スス
260	6F12	Ⅱ	2.87	4.87	Ⅳ	B1	胴（底）		白.雲.石	◎	橙	灰褐		非結束羽状縄文LR・RL縦位　菱形構成		内:スス
	6F12	Ⅱ	3.02	4.81												
	6F12	Ⅱ	2.80	4.84												
	6F12	Ⅲ	3.08	4.83												

報告No.	グリッド	層位	出土位置		群	分類	残存部位	口径 底径	胎土	繊維痕	色調		調整	文様		備考
			西から	北から							外面	内面		外面	内面	
261	6D22	Ⅱ	3.04	9.05	Ⅳ	B1	口		長.チャ.雲	○	橙	明黄褐		縄文LR・異方向施文（菱形構成か）		
262	8B9	Ⅰ	7.59	2.18	Ⅳ	B2	口		長.白.チャ	○	明赤褐	黒	内:ナデ	縄文LR	口端:縄文LR	
263	8B9	Ⅰ	7.59	3.54	Ⅳ	B2	口		チャ.長.石	○	黒褐	暗褐		縄文LR斜位	口端:縄文LR	
264	3C21	Ⅱ	1.21	9.39	Ⅳ	B2	胴		長.石.チャ.雲	◎	灰褐	灰褐		縄文LR横位		
265	8E18	Ⅱ	－	－	Ⅳ	B2	胴		長.石.白	●	黒	黒		縄文RL・多方向施文		
266	7C4	Ⅰ	7.50	1.52	Ⅳ	B2	胴		石.長.雲	◎	灰褐	にぶい黄橙		縄文LR横位		
267	6C20	Ⅰ	8.73	7.94	Ⅳ	C	口		白.石.長.雲.チャ	◎	にぶい黄褐	にぶい黄褐		撚糸文R・L2本組回転		
268	4D20	Ⅱ	9.67	7.25	Ⅳ	B2		口径 24.0 器高 （33.8） 底径 6.7	白.石.長（多）	○	黒褐.にぶい橙	灰褐.橙	内:ナデ	縄文０段多条（口縁横位・胴部斜位） 横位沈線１条 口外:刺突（丸棒状工具側面圧痕） 底:刺突（角棒状工具）		
	4D24	Ⅱ	7.70	8.88												
	4D24	Ⅱ	7.56	9.32												
	4F25	Ⅱ	8.45	9.46												
	5E2	Ⅱ	2.94	1.54												
	5E2	Ⅱ	3.01	1.89												
	5E7	Ⅱ	3.30	2.20												
	5F3	Ⅱ	5.34	0.69												
	5F4	Ⅱ	6.09	1.27												
269	7B14	Ⅱ	6.58	4.22			底		白.石.角	○	灰褐	黒褐				
270	8F25	Ⅱ	－	－			底		白.石.雲.長	○	にぶい橙	にぶい橙				
271	6E6	風	0.42	3.95			底		白.長	○	橙	橙				
272	8F25	Ⅱ	－	－	Ⅳ	B2	胴		石.雲	○	黒褐	赤褐	内:ナデ	縄文RL斜位・０段多条横位か		
273	7D13	Ⅱ	5.85	5.00	Ⅳ	B2	胴		白.石.長.チャ	○	黒褐	にぶい黄橙		縄文LR横位		
274	6E6	Ⅰ	1.55	2.14	Ⅳ	C	胴		白.石.長.雲.チャ	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐		撚糸文R・L2本組回転		
275	6D12	Ⅱ	3.30	5.82	Ⅳ	C	胴		白.長.石.雲	○	にぶい黄褐	にぶい黄橙		非結束羽状撚糸文　R・L2本組横位回転		
	6D12	Ⅱ	2.85	5.85												
276	6D13	Ⅱ	4.10	5.78	Ⅳ	C	胴		白.石.雲	○	暗褐	暗褐		撚糸文R・L2本組回転		外:スス
	6D13	Ⅱ	4.03	5.95												
277	3G4	Ⅱ	6.41	0.86			口		長.石.チャ	×	黒褐	にぶい黄橙	内:ナデ	沈線文		
278	7D9	Ⅱ	7.85	3.78			胴		石.長	×	黒	灰褐		刺突列（複数１単位工具）		外:スス
279	6G19	風	－	－			口		長（多）.石.雲	×	にぶい橙	にぶい黄橙		横位沈線		
280	7E6	Ⅱ	1.14	2.34			胴		長（多）.雲	×	橙	にぶい黄橙		渦巻文		
281	7C12	Ⅲ	2.84	5.97			口		白.石（少）.雲（少）	×	にぶい黄橙	灰褐	内:ナデ	０段多条横・斜位か		
282	2G8	Ⅱ	4.61	3.97			胴		白	×	褐灰	にぶい黄橙	内:ナデ	非結束羽状縄文LR・RL		
283	7C21	Ⅰ	0.07	9.12			底		長.石.雲	×	にぶい黄橙	橙				
284	4F4	Ⅱ	6.87	1.76			底		白（多）.長.雲（少）	×	灰褐	黒褐	外:ナデ			
285	4G14	撹乱	6.20	4.85			口		長.石	×	褐灰	褐灰		渦巻状文		外:沈線内赤彩
286	8E19 9D17	Ⅰ	－	－			口	25.0	長.角.石	×	にぶい褐	褐		横位沈線間に刺突列（丸棒状工具）	口:横位沈線１条	外:沈線内赤彩
287	7D11	Ⅱ	0.68	5.54			口		石.雲.角	×	明赤褐	明赤褐		横位沈線間に刺突列（沈線浅い）		外:オコゲ　内:スス
288		不明	－	－			胴		石.雲	×	黒褐	明赤褐		横位沈線・刺突列（丸棒状工具）		
290	7C21	Ⅱ	0.77	8.33			口		長.石	×	灰褐	暗灰黄	内外:ミガキ		口:横位沈線１条	外:スス
291	5D2	風	2.77	1.94			口		海.長	×	灰褐	にぶい黄橙	内外:ミガキ	ミガキ横位沈線２条（浅い）		

報告No.	グリッド	層位	出土位置		群	分類	残存部位	口径 底径	胎　土	繊維痕	色　調		調　整	文　様		備　考
			西から	北から							外　面	内　面		外　面	内　面	
289	2F10	Ⅱ	9.96	3.03			口	25.5	白.長.石.雲	×	黒褐	にぶい橙	外:ケズリ→ミガキ 内:ナデ			
	2G6	Ⅱ	0.05	2.93												
	2G6	Ⅱ	0.11	2.84												
	2G6	Ⅱ	0.48	2.50												
	2G8	Ⅱ	4.56	3.88												
292	5F13	Ⅱ	4.84	5.25			口～胴	29.9	石.角	×	にぶい黄橙	褐灰. にぶい黄橙	内外:ミガキ横			
	5F13	Ⅱ	4.88	5.42												
	5F13	Ⅱ	4.97	5.82												
	4G21	Ⅱ風	0.15	8.33												
293	7C20	風	8.71	6.71			口	10.6	白.長.雲	×	褐	灰褐	内外:ナデ			
294	9D17	Ⅰ	－	－			口	16.5	長.雲	×	橙	橙	外:ロクロナデ・カキ目 内:ロクロナデ			外:オコゲ
第7図1	7B9	Ⅰ	2.37	4.91			口		白.石.長	×	灰褐	灰黄褐	内外:ミガキ			内:一部オコゲ
第7図2	9D24	Ⅱ	－	－	Ⅱ	C4	胴		チャ.石.角.長	○	灰褐	褐		横位沈線の上下　貝殻腹縁文矢羽状		貝殻腹縁文原体２種使用
第7図3	7C14	風	－	－			胴		白.長	○	灰黄褐	明褐	内外:条痕			
第7図4	7B17	Ⅰ	2.29	6.26	Ⅳ	B1	胴		石.雲.角	○	にぶい黄橙	橙	内:擦痕	縄文LR・RL縦・横位か 縦長の菱形構成		外:オコゲ
	7B11	Ⅱ	1.71	5.01												

石器観察表

報告No.	グリッド	層位	器　種	分類	出土位置		最大長（cm）	最大幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	遺存状態	備　考
					西から	北から							
295	7B11	Ⅱ	石鏃		0.75	5.53	2.30	1.40	0.45	0.94	黒曜石		
296	5D24	Ⅱ	石鏃		7.16	8.45	1.70	1.55	0.35	0.67	黒曜石		
297	7D3	Ⅰ	石鏃		5.53	0.54	1.45	1.65	0.40	0.57	黒曜石		
298	9E17	不明	石鏃		－	－	2.06	1.82	0.58	1.20	石英		
299	9D12	Ⅰ	石鏃		－	－	1.60	1.40	0.40	0.79	黒曜石	上端欠	
300	6E11	風	石鏃		0.38	5.92	1.40	1.25	0.35	0.46	黒曜石		
301	5F18	Ⅱ風	石鏃未成品		4.14	6.64	2.60	1.60	0.35	1.13	チャートか	上端左折れ	
302	6D17	Ⅰ	石鏃未成品		2.08	7.97	2.60	1.55	0.90	1.63	黒曜石		
303	6F22	Ⅱ	石鏃未成品		3.15	8.20	2.50	1.70	0.55	2.08	黒曜石	上端折れ	
304	5C19	Ⅱ	石鏃未成品		6.63	7.53	3.70	2.00	0.70	2.83	無斑晶質安山岩		
305	4C17	Ⅱ	石鏃未成品		2.10	7.98	3.60	2.10	0.70	5.39	無斑晶質安山岩	右側折れ	
306	6B20	Ⅱ	石匙		9.41	7.87	6.75	2.70	0.80	14.90	無斑晶質安山岩		
307	7B13	Ⅱ	石匙		5.31	4.12	5.90	3.60	1.60	19.82	流紋岩		
308	5B22	Ⅱ	石匙		3.01	8.90	3.35	4.75	1.20	15.25	無斑晶質安山岩		
309	6B5	Ⅱ	石錐		8.09	0.43	2.90	1.10	0.55	2.02	チャート		
310	5F2	Ⅱ	両極石器		3.69	0.42	2.60	2.70	0.50	3.33	チャート		
311	6A4	Ⅰ	両極石器		6.96	0.11	3.90	4.20	1.50	26.98	無斑晶質安山岩		
312	4F24	Ⅲ	両極石器		7.93	10.00	2.90	1.70	0.80	3.46	チャート		
313	7A25	Ⅰ	不定形石器	A	8.40	9.61	3.80	7.00	1.40	26.95	チャート		
314	5D14	Ⅱ	不定形石器	K	7.42	4.02	4.90	4.10	1.10	24.44	無斑晶質安山岩		
315	7A24	Ⅰ	両面加工石器		7.77	8.67	9.70	5.60	2.60	177.25	珪質凝灰岩		
316	8A20	Ⅰ	両面加工石器		8.37	6.63	9.40	6.10	1.80	117.16	無斑晶質安山岩		
317	8A18	Ⅱ	打製石斧		5.81	6.28	12.60	8.60	2.00	236.95	無斑晶質安山岩		
318	7A9	Ⅰ	磨製石斧		7.64	3.84	5.00	3.55	1.30	39.11	蛇紋岩		
319	8B20・25	Ⅰ	磨製石斧		－	－	6.05	3.20	1.30	34.03	砂岩		
320	6C13・14	Ⅱ	磨製石斧		－	－	6.15	3.10	0.70	21.64	蛇紋岩		
321	不明	不明	磨製石斧未成品		－	－	5.70	4.00	1.55	53.73	蛇紋岩		両極剥離
322	7A25	Ⅰ	磨製石斧		8.40	9.61	7.20	3.90	1.10	51.41	砂岩		
323	不明	表採	磨製石斧		－	－	8.20	4.50	1.30	84.68	片岩？		
324	7A20	Ⅰ	磨製石斧		8.70	7.52	7.80	4.20	1.40	82.02	蛇紋岩		中期か
325	不明	表採	石錘		－	－	6.70	8.20	3.30	255.96	安山岩		
326	7B6	Ⅰ	磨石類	A	0.63	2.62	10.90	7.00	4.90	512.05	安山岩		
327	6G4	風	磨石類	A	6.16	0.33	7.80	6.80	5.80	375.90	安山岩		
328	6G9	風	磨石類	E	7.07	2.63	9.60	5.60	3.60	259.27	安山岩		
329	7D7	Ⅱ	磨石類	B	2.19	3.93	8.60	7.00	3.70	258.86	安山岩		
330	5A15	Ⅱ	磨石類	B	8.54	5.63	10.00	8.10	5.60	629.02	安山岩		
331	不明	不明	磨石類	B	－	－	8.10	8.30	6.00	488.05	砂岩		
332	5A4	Ⅰ	磨石類	B	7.85	0.30	14.50	5.80	3.10	365.44	硬質砂岩		
333	6F12	Ⅱ	磨石類	B	3.90	4.83	15.00	6.80	3.20	416.53	安山岩		
334	6D13	Ⅱ	特殊磨石	A	9.08	3.92	19.50	6.70	3.70	662.69	硬質砂岩		
335	4B11	Ⅱ	特殊磨石	B	1.67	5.90	13.90	6.30	5.60	725.11	安山岩		
336	7G10・15	風	特殊磨石	B	－	－	14.70	5.00	5.90	722.40	安山岩		
337	5F5	不明	特殊磨石	B	－	－	13.90	5.90	4.50	527.09	安山岩		SK6出土
338	6B6	Ⅰ	特殊磨石	B	1.94	3.79	13.90	7.20	5.50	780.77	安山岩		
339	5D5	Ⅱ	特殊磨石	C	8.51	1.62	15.80	6.70	4.20	765.30	安山岩		
340	5C3	Ⅱ	砥石		4.98	1.67	8.50	7.40	3.80	217.17	砂岩		
341	6A10	Ⅰ	石皿		8.09	2.67	25.50	12.00	5.70	2430.00	砂岩		
342	5H22	Ⅱ下	石皿		3.72	9.03	24.00	14.50	4.80	2100.00	砂岩		
	6B3	Ⅰ	石匙		5.03	0.38	4.09	1.66	0.63	3.82	チャート	下半欠	
	8F24	Ⅱ	両極石器		－	－	4.16	5.47	1.84	61.35	無斑晶質安山岩		
	7B2	Ⅰ	両極石器		2.66	1.82	1.70	1.60	0.42	1.12	チャート		2極
	6B4	Ⅰ	両極石器		6.03	0.67	3.30	1.50	0.69	3.87	チャート		2極
	7D2	Ⅱ	両極石器		2.34	1.44	4.14	2.88	0.83	11.83	チャート		2極
	6C9	Ⅰ	両極石器		7.46	2.77	4.21	3.70	1.37	15.98	チャート		2極
	4F23	Ⅱ	両極石器		4.24	9.52	3.10	2.19	0.92	5.52	チャート		2極

報告No.	グリッド	層位	器　種	分類	出土位置		最大長（cm）	最大幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	遺存状態	備　考
					西から	北から							
	4F24	Ⅲ	両極石器		7.93	10.00	3.21	2.04	0.60	3.33	チャート		2極
	5F1	Ⅱ	両極石器		1.41	0.26	1.92	2.27	0.50	2.43	チャート		2極
	5F8	Ⅱ	両極石器		4.22	2.74	2.11	2.06	0.50	1.84	チャート		2極
	7G11	Ⅱ	両極石器		0.67	4.09	2.64	1.81	0.76	3.02	黒曜石		
	6D23	撹乱	不定形石器	B	4.65	8.28	2.99	4.15	0.62	8.07	無斑晶質安山岩		
	6D11	Ⅱ	不定形石器	C	1.74	5.35	2.50	2.89	0.65	5.87	無斑晶質安山岩		
	8A10	Ⅰ	不定形石器	C	8.47	3.21	3.60	9.68	1.30	46.67	無斑晶質安山岩		
	9F1	Ⅱ	不定形石器	C	－	－	7.26	6.37	1.70	84.08	凝灰岩		
	不明		不定形石器	C	－	－	6.62	7.47	1.38	57.34	無斑晶質安山岩		1次調査出土
	4E13	Ⅱ	不定形石器	E	4.77	4.20	3.34	4.50	1.80	22.49	無斑晶質安山岩		
	8A5	Ⅲ	不定形石器	E	9.57	0.25	6.95	5.35	1.90	63.76	無斑晶質安山岩		
	8E13	Ⅱ	不定形石器	E	4.02	4.40	6.39	5.24	1.95	56.52	無斑晶質安山岩		
	5G7	撹乱	不定形石器	F	3.54	3.87	5.38	5.82	0.85	33.61	無斑晶質安山岩		
	6A10	Ⅰ	不定形石器	F	8.64	2.96	6.46	5.10	2.15	47.87	無斑晶質安山岩		
	7C16	Ⅲ	不定形石器	F	1.18	7.15	5.05	5.15	1.15	35.99	無斑晶質安山岩		
	4C20	Ⅱ	不定形石器	G	8.60	6.94	3.54	4.61	1.51	18.23	無斑晶質安山岩		
	5A23	Ⅰ	不定形石器	K	5.39	8.39	7.00	7.55	3.01	156.40	無斑晶質安山岩		
	5D10	Ⅱ	不定形石器	K	9.50	2.79	6.35	4.54	1.50	51.99	無斑晶質安山岩		
	5D23	Ⅱ	不定形石器	K	5.15	8.86	2.41	2.51	0.78	5.14	無斑晶質安山岩		
	6B23	Ⅱ	不定形石器	K	5.00	9.35	2.80	3.07	0.85	6.56	無斑晶質安山岩		
	9E3	Ⅱ	不定形石器	K	－	－	2.08	4.08	1.14	17.50	無斑晶質安山岩		
	5F7	Ⅲ	両面加工石器		2.77	3.91	9.10	7.24	2.91	224.75	無斑晶質安山岩		
	－	表採	両面加工石器		－	－	7.10	8.28	3.05	248.69	無斑晶質安山岩	下半欠	
	－		石核		－	－	2.90	3.82	1.24	19.24	無斑晶質安山岩		
	6D12	Ⅰ	石核		3.80	5.97	2.55	1.31	1.05	3.25	黒曜石		両極石器か
	－	表採	打製石斧		－	－	7.26	6.15	3.10	145.41	無斑晶質安山岩		
	9D3	Ⅱ	磨製石斧		－	－	3.74	2.00	0.55	3.20	蛇紋岩	破片	
	5A24	Ⅰ	磨製石斧		7.62	9.79	1.22	2.85	0.70	2.91	蛇紋岩	破片	
	8A10	Ⅰ	磨製石斧		8.13	3.07	2.72	2.72	0.55	4.97	蛇紋岩	破片	
	－		磨製石斧		－	－	4.42	2.60	0.92	7.10	蛇紋岩	破片	
	5F12	Ⅱ	磨製石斧		2.97	4.04	7.16	4.13	1.22	59.68	（安山岩？）		未成品
	4D11	Ⅱ	磨製石斧未成品		1.03	5.84	4.23	3.00	0.95	12.26	蛇紋岩		研磨痕あり
	9E5	Ⅱ	特殊磨石	A	－	－	10.18	8.10	6.51	750.53	硬質砂岩	下半欠	
	5B	－	特殊磨石	A	－	－	13.62	8.17	7.10	1069.84	安山岩		2号集石出土
	5B23	Ⅰ	特殊磨石	A	5.31	9.40	8.35	8.04	5.30	276.08	砂岩	下半欠	
	8B4	Ⅰ	特殊磨石	A	7.29	0.47	12.78	4.75	4.48	404.09	安山岩		
	6C4	風	特殊磨石	A	7.34	0.50	8.00	6.10	5.30	318.01	硬質砂岩	下半欠	
	5D4	Ⅱ	特殊磨石	A	7.80	1.72	10.73	7.48	6.01	781.92	砂岩	下半欠	
	5F12	Ⅱ	特殊磨石	A	2.31	4.74	12.95	6.17	5.25	565.49	安山岩		
	4E20	Ⅱ	特殊磨石	A	8.30	7.72	11.30	4.56	6.22	388.95	安山岩？	下半欠	
	9C24	Ⅱ	特殊磨石	B	－	－	13.21	6.50	6.88	931.98	安山岩		
	5B	－	特殊磨石	B	－	－	18.30	7.13	5.05	864.48	安山岩	側面欠	2号集石出土
	7B16	Ⅲ	特殊磨石	B	0.51	7.32	15.47	7.77	4.40	916.42	安山岩		
	5B22	Ⅰ	特殊磨石	B	3.60	8.15	9.25	8.70	8.02	1188.03	安山岩		
	7C21	Ⅲ	特殊磨石	B	0.29	9.73	16.30	9.11	7.80	1174.26	安山岩		
	5D11	Ⅱ	特殊磨石	B	0.74	4.01	9.21	4.75	5.42	375.97	安山岩	下半欠	
	不明	Ⅱ	特殊磨石	B	－	－	10.70	7.63	5.50	561.99	安山岩	下半欠	
	7D17	Ⅱ	特殊磨石	B	3.77	6.96	18.00	7.38	7.58	1236.58	安山岩		
	5D9	Ⅱ	特殊磨石	B	6.57	3.00	12.17	6.90	5.68	525.61	安山岩	下半欠	
	6D18	Ⅰ	特殊磨石	B	5.98	7.19	9.20	6.13	6.94	479.16	安山岩	下半欠	
	不明	－	特殊磨石	B	－	－	8.00	5.28	5.33	272.76	硬質砂岩	下半欠	
	不明	表採	特殊磨石	B	－	－	9.17	7.10	6.05	389.64	硬質砂岩	上下欠	
	5B	－	特殊磨石	C	－	－	10.17	8.81	5.10	708.95	安山岩		2号集石出土
	8A10	Ⅰ	特殊磨石	D	8.42	3.83	17.30	7.36	4.95	798.65	安山岩		
	－	－	磨石類	A	－	－	6.71	5.65	4.35	217.51	安山岩	下半欠	1次調査出土

報告No.	グリッド	層位	器　種	分類	出土位置		最大長（cm）	最大幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	遺存状態	備　考
					西から	北から							
	8E18	Ⅱ	磨石類	A	－	－	16.47	8.95	5.60	1035.60	安山岩		
	8F20	Ⅱ	磨石類	A	－	－	10.70	4.27	3.32	200.76	安山岩		
	6A13	Ⅱ	磨石類	A	－	－	7.82	6.51	4.95	252.79	安山岩	側面・下欠	P4出土
	5A14	Ⅰ	磨石類	A	7.78	4.33	10.29	8.61	4.25	480.14	砂岩	側面・下欠	片面全面剥離
	5B1	Ⅰ	磨石類	A	0.99	1.90	8.88	8.20	4.70	380.92	砂岩		
	5A14	Ⅰ	磨石類	A	7.63	4.12	9.85	9.18	4.70	553.73	安山岩		
	5A10	Ⅱ	磨石類	A	9.08	3.14	8.89	7.18	5.52	463.87	安山岩		
	5A9	Ⅰ	磨石類	A	7.52	2.68	11.25	6.10	3.44	347.24	安山岩		
	5A5	Ⅱ	磨石類	A	8.09	0.01	9.97	6.48	2.62	229.15	安山岩	側面・下欠	
	6A5	Ⅰ	磨石類	A	9.29	1.34	7.24	5.67	4.20	203.88	安山岩	下半欠	
	6B6	Ⅰ	磨石類	A	0.88	2.57	16.20	8.85	4.39	849.85	安山岩		
	8B8	Ⅲ	磨石類	A	5.28	3.32	5.01	4.82	3.40	114.14	硬質砂岩	側面・下欠	
	6B24	Ⅰ	磨石類	A	7.76	9.34	15.02	7.65	5.51	810.60	安山岩		
	7B19	Ⅰ	磨石類	A	7.59	7.70	8.60	4.51	2.55	133.62	安山岩		
	8B9	Ⅱ	磨石類	A	6.92	2.92	9.48	6.18	4.34	409.99	安山岩	下半欠	
	7B25	Ⅱ	磨石類	A	9.11	8.97	8.78	7.65	4.75	439.63	安山岩	下半欠	
	5C8	Ⅱ	磨石類	A	5.47	2.22	12.61	5.80	3.50	395.19	砂岩	被熱	
	6D21	Ⅱ	磨石類	A	0.52	9.27	10.15	4.25	3.21	225.20	砂岩		
	6D17	Ⅱ	磨石類	A	3.16	6.35	14.13	9.75	6.32	1121.70	安山岩		
	6C20	Ⅱ	磨石類	A	8.16	6.85	10.89	7.55	6.35	844.83	安山岩	下半欠	
	不明	Ⅱ	磨石類	A	－	－	14.53	6.45	4.31	610.33	砂岩		
	7C20	風	磨石類	A	8.02	6.90	9.86	7.95	4.43	365.95	安山岩		
	5D3	Ⅰ	磨石類	A	4.17	0.91	7.95	5.84	3.65	242.34	安山岩		
	4D17	Ⅱ	磨石類	A	2.04	6.25	14.87	8.61	6.71	1024.52	安山岩		
	4D4	Ⅱ	磨石類	A	6.06	0.48	16.60	8.58	5.97	1135.62	安山岩		
	5D8	Ⅰ	磨石類	A	4.31	3.06	11.65	6.73	4.45	447.51	安山岩		
	不明	Ⅲ	磨石類	A	－	－	5.20	6.18	4.92	205.20	安山岩	下半欠	
	7E18	Ⅱ	磨石類	A	4.03	7.44	12.47	7.70	5.11	628.94	硬質砂岩	側面欠	
	2G13	Ⅱ	磨石類	A	4.47	6.00	9.13	6.74	4.25	326.56	砂岩		
	3G13	Ⅲ	磨石類	A	5.78	6.00	5.54	4.89	3.45	126.70	安山岩		
	5G15	Ⅱ	磨石類	A	9.55	5.33	9.50	7.70	4.51	429.29	安山岩		
	不明	－	磨石類	A	－	－	12.80	6.00	5.87	570.36	安山岩		
	不明	－	磨石類	A	－	－	8.55	6.50	3.30	275.38	砂岩	下半欠	
	不明	－	磨石類	A	－	－	16.72	8.93	6.55	1144.70	安山岩		
	不明	－	磨石類	A	－	－	10.88	5.00	2.87	208.67	安山岩		
	6B2	Ⅰ	磨石類	A?	2.17	1.28	5.82	5.17	1.60	54.70	安山岩	側面・下欠	
	－	表採	磨石類	B	－	－	7.18	6.15	4.28	278.65	安山岩		
	6A10	Ⅰ	磨石類	B	9.94	2.23	9.79	7.70	4.30	399.26	安山岩		
	7B23	Ⅰ	磨石類	B	4.80	9.84	12.20	7.03	3.84	375.23	安山岩		
	7E22	風	磨石類	B	2.88	8.80	10.30	9.11	4.20	505.32	安山岩		
	不明	－	磨石類	B	－	－	11.00	7.82	4.65	536.89	安山岩		
	6D18	Ⅱ	磨石類	C	4.93	6.13	11.35	8.72	5.88	832.00	安山岩		
	8F20	Ⅱ	磨石類	E	－	－	8.95	5.03	3.62	220.89	安山岩		
	5A14	Ⅰ	磨石類	E	7.21	4.91	9.30	7.70	4.68	350.24	安山岩		
	8B11	Ⅱ	磨石類	－	1.53	4.45	6.68	5.24	2.38	93.10	安山岩	破片	
	4D15	Ⅱ	磨石類	－	9.00	5.91	5.93	6.92	1.31	69.10	砂岩	破片	
	2F16	Ⅱ	磨石類	－	0.98	7.31	4.35	6.81	1.55	39.62	チャート	破片	
	5B17	Ⅰ	砥石		2.15	6.85	6.15	9.10	2.34	132.08	砂岩	下半欠	

図　　版

凡　例

1　土器図版において、断面に網掛けのあるものは胎土に繊維を含むことを示す。

2　土器の口縁部実線を中心線両端で切っている場合は、口径を推定復元したものである。

3　石器図版において、新しい破損部分（ガジリ）は白抜きで示した。

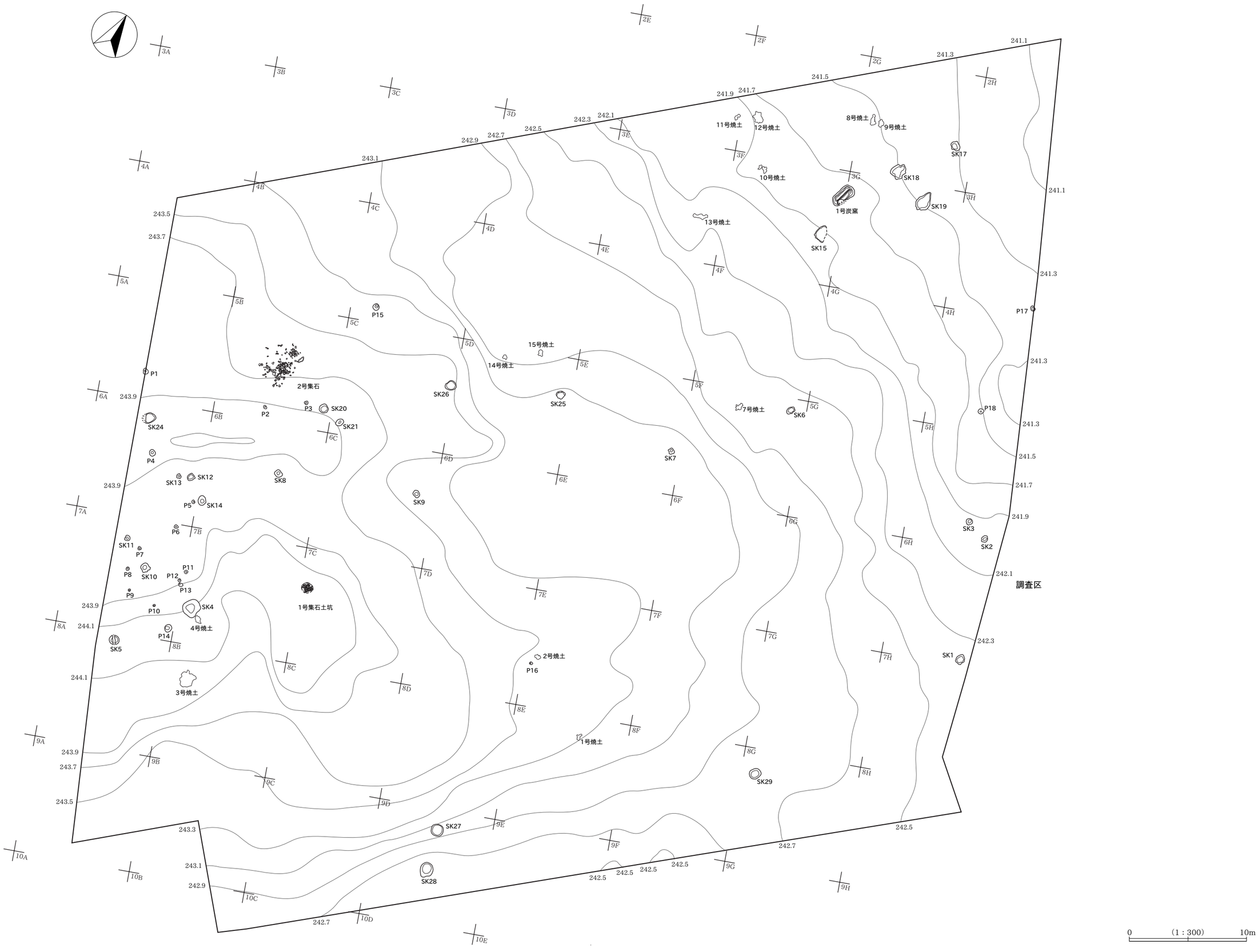
4　スクリーントーン凡例

磨　痕　

敲打痕　

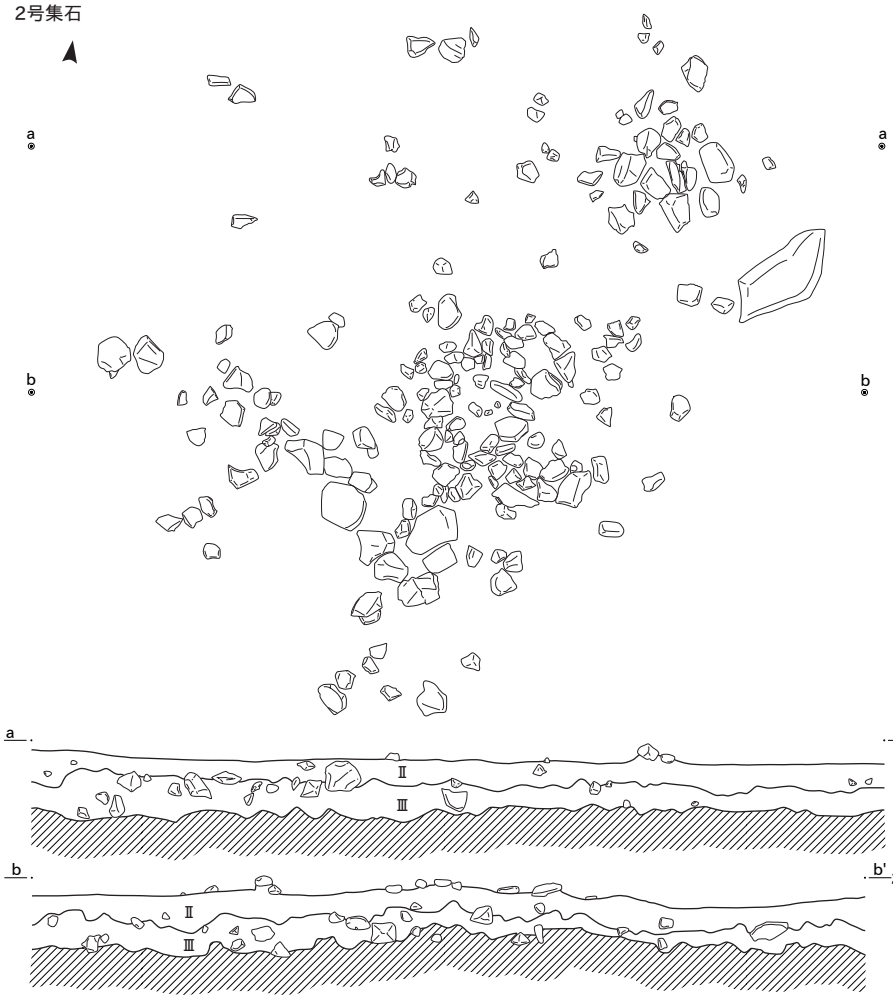
遺構全体図

図 版 1

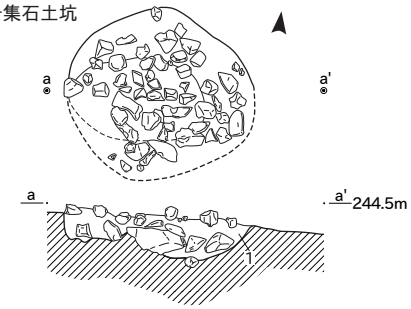


調査区
1号炭窯
1号集石土坑
2号集石
1号焼土
2号焼土
3号焼土
4号焼土
7号焼土
8号焼土
9号焼土
10号焼土
11号焼土
12号焼土
13号焼土
14号焼土
15号焼土
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
0
(1 : 300)
10m

2号集石

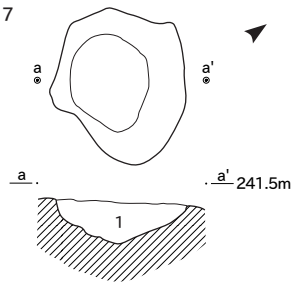


1号集石土坑



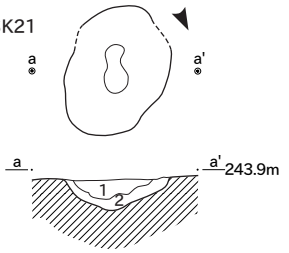
1. 黒色土（10YR1/2）　粘性なし　しまり弱
径5mm程度の礫を多く含む

SK17



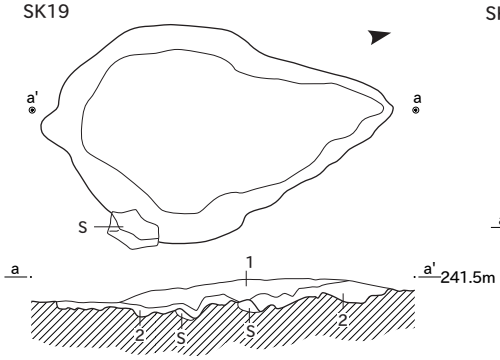
1. 黒色土　（5YR1.7/1）粘性中　しまり中
黒褐色土（7.5YR2/2）がブロック状でわずかに混入する

SK21



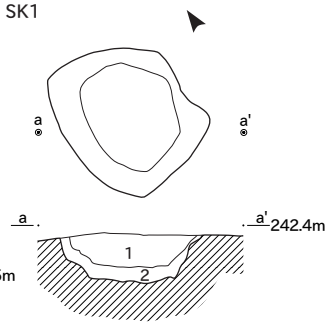
1. 黒色土（7.5YR2/1）
粘性なし　しまり中　径3～5mmの礫をやや多く含む
2. オリーブ褐色土（2.5YR4/4）
粘性なし　しまり中　径5mm程度の礫を含む　炭化物含む

SK19



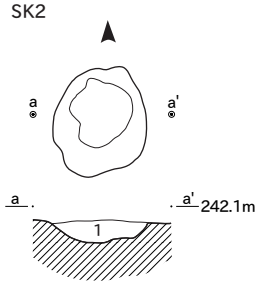
1. 黒色土（5YR1.7/1）粘性中　しまり中
径2～3mmの砂粒をわずかに含む　Ⅱ層土か
2. 黒褐色土（7.5YR3/2）粘性弱　しまり中
径2～3mmの砂礫を含む　Ⅲ層土か

SK1



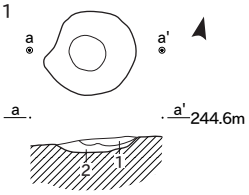
1. 黒色土（7.5YR2/1）
粘性中　しまり弱
2. 黒褐色土（7.5YR3/2）
粘性弱　しまり弱
炭化物、Ⅳ層がわずかに混入

SK2



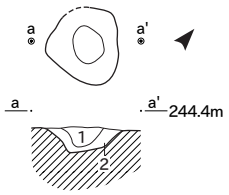
1. 黒色土（7.5YR2/1）
粘性弱　しまりなし
砂礫をわずかに含む

SK11



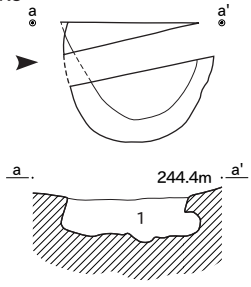
1. 黒色土（10YR1/2）
粘性弱　しまりなし
径5mm程度の礫を含む
2. 黒褐色土（10YR1/3）
粘性弱　しまり中
径3mm程度の礫を少し含む

SK13



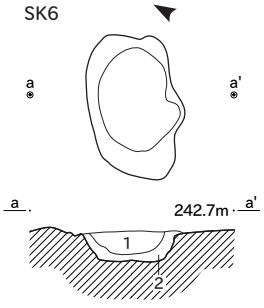
1. 黒褐色土（5YR2/1）粘性なし　しまり弱
径3～20mm程度の礫を含む
2. にぶい黄褐色土（10YR5/3）粘性弱
しまり弱　径1cm程度の礫を少し含む

SK5



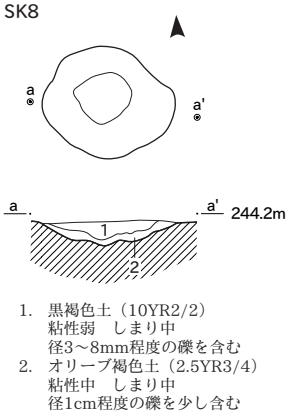
1. 黒色土　（7.5YR1/1.7）
粘性中　しまり中
径2～7mm程度の礫をやや多く含む

SK6



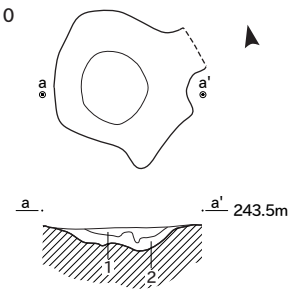
1. 黒褐色土（7.5YR2/1）
粘性弱　しまり中
径10mm以下の礫が点在
2. 黒褐色土（7.5YR2/2）
粘性弱　しまり弱
粒子は微粒で均一
径7cm程度の礫を含む

SK8



1. 黒褐色土（10YR2/2）
粘性弱　しまり中
径3～8mm程度の礫を含む
2. オリーブ褐色土（2.5YR3/4）
粘性中　しまり中
径1cm程度の礫を少し含む

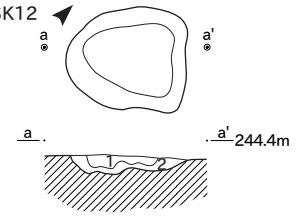
SK10



1. 黒色土（7.5YR1/2）　粘性弱　しまり中　径5～30mm
程度の礫をやや多く含む　炭化物をわずかに含む
2. 黒褐色土（5YR1/2）　粘性中　しまり中　径3mm程度
の礫をやや多く含む

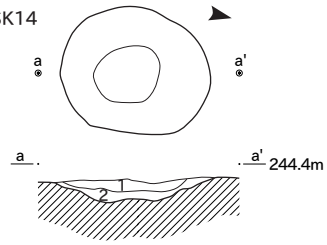
0　（1：40）　2m

SK12



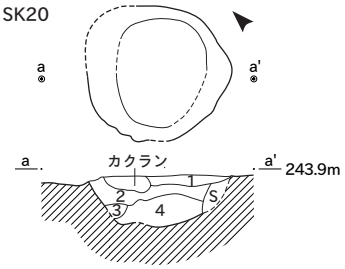
1. 極暗褐色土（7.5YR2/3）
   粘性弱　しまり中
   径3～10mm程度の礫をやや多く含む
2. 黄褐色土（10YR5/6）
   粘性弱　しまりなし
   径10mm程度の礫を少し含む

SK14



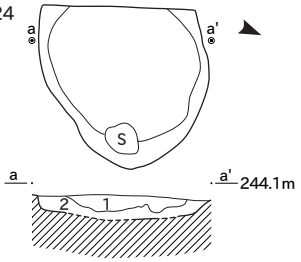
1. 黒褐色土（7.5YR2/2）粘性なし　しまり中
   径5mm程度の礫・炭化物やや多く含む
2. 黒色土（10YR2/1）粘性なし　しまり弱
   径3mm程度の礫を含む
   炭化物やや多く含む

SK20



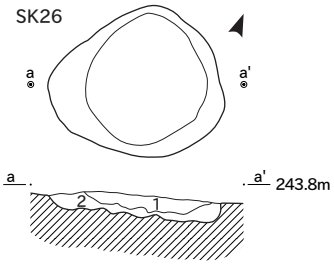
1. 黒褐色土（7.5YR3/1）
   粘性強　しまりなし　砂礫含む
2. 黒色土（7.5YR2/1）
   粘性強　しまりなし　礫含む
3. 黒色土（10YR2/1）
   粘性強　しまりなし　砂礫含む
4. 黒褐色土（10YR2/2）
   粘性強　しまりなし　砂礫含む

SK24



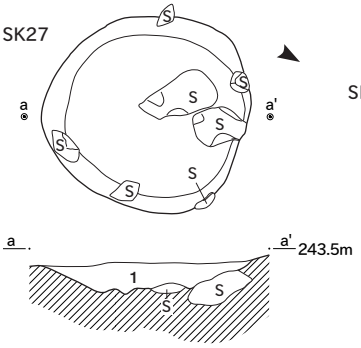
1. 黒褐色土（7.5YR3/2）
   粘性なし　しまり中
   径3～7mm程度の礫を多く含む
2. 褐色土（10YR4/4）
   粘性弱　しまり中
   径2～5mm程度の礫を多く含む

SK26



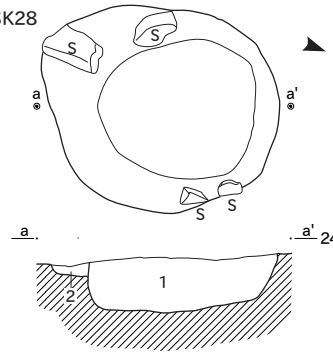
1. 黒色土（10YR2/2）
   粘性なし　しまり弱
   径5～10mm程度の礫を含む
2. オリーブ褐色土（2.5YR4/3）
   粘性なし　しまりなし
   径2～3mmの礫を含む

SK27



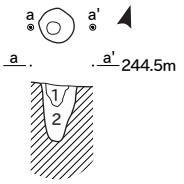
1. 極黒色シルト　径7cm程度の礫多く含む
   下部は地山に沿ってやや褐色味を帯びる

SK28



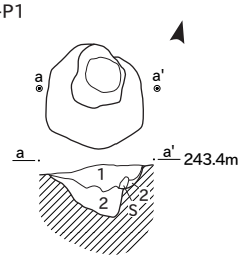
1. 黒色シルト　粘性なし　しまり中
   径5～10mm程度の礫を多く含む
2. 黒褐色シルト　粘性なし
   径7cm程度の礫を含む

1G-P2



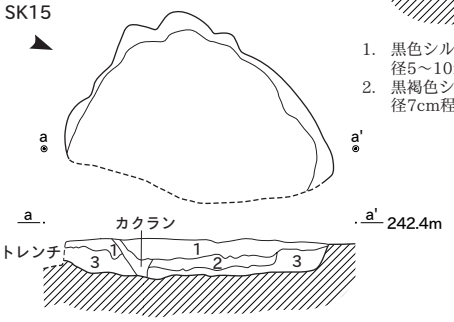
1. 赤黒色土（10YR1.7/1）
   粘性なし　しまり中
   径3mm程度の礫をわずかに含む
2. 黒褐色土（10YR2/2）
   粘性弱　しまり中
   径1～2mmの礫をわずかに含む

3D-P1



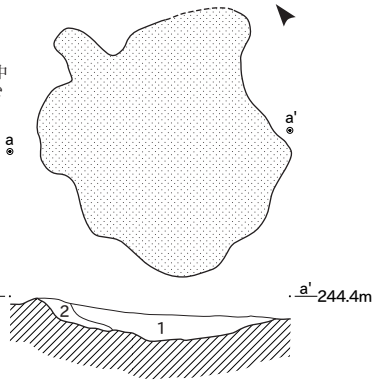
1. 黒色土（7.5YR2/1）　粘性弱　しまり中
2. 黒褐色土（7.5YR3/4）　粘性弱　しまり中

SK15



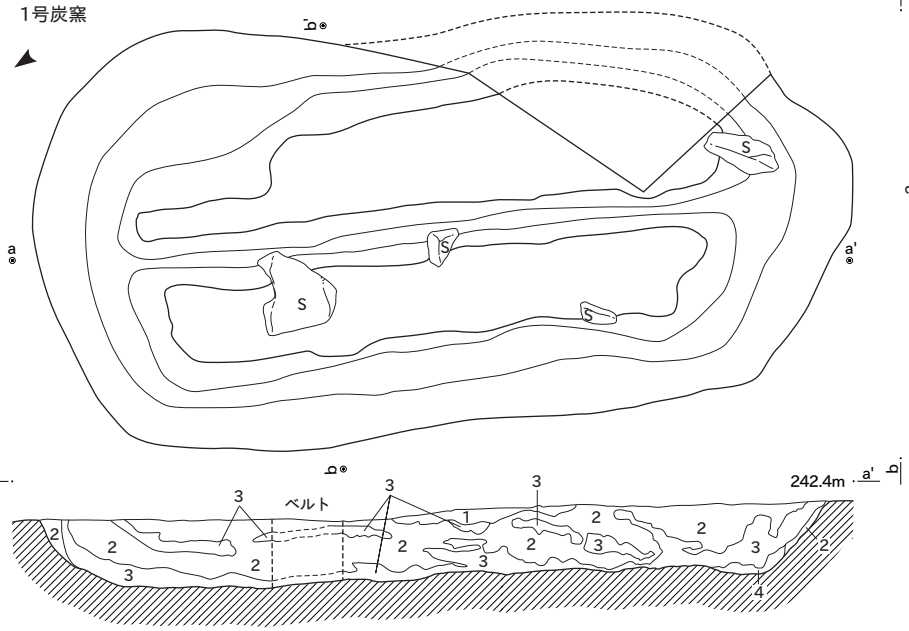
1. 黒褐色土（10YR2/2）に、にぶい褐色土（7.5YR5/3）
   が斑状、一部ブロック状に混ざる
   粘性なし　しまり弱　炭化粒をわずかに含む
2. 黒色土（5YR1.7/1）粘性弱　しまり弱
   炭化物を多く含む
3. 黒色土（7.5YR2/1）粘性弱　しまり中
   炭化物をわずかに含む

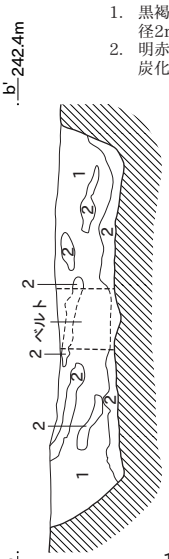
3号焼土



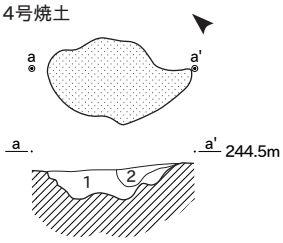
1. 黒褐色土（7.5YR1/3）粘性弱　しまり中
   径2mm程度の礫を少し含む　炭化物を含む
2. 明赤褐色土（5YR5/8）粘性弱　しまり中
   炭化物を少し含む

1号炭窯



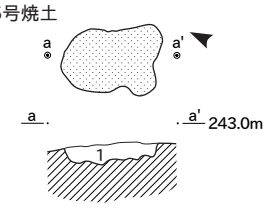


4号焼土



1. 暗赤褐色土（5YR2/3）
   粘性弱　しまりなし
   径3mm程度の礫を含む
2. 橙色土（5YR6/8）
   粘性なし　しまり弱
   径3mm程度の礫、
   炭化物をわずかに含む

15号焼土



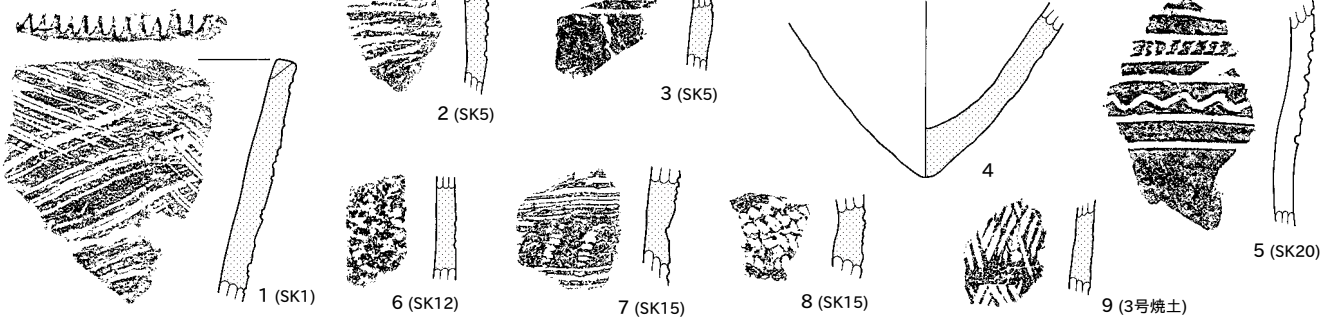
1. 黒褐色土（7.5YR3/2）
   上面近くは褐色土（7.5YR4/6）
   をブロック状に含む　Ⅱ層土が
   ブロック状に混入　下部に径2mm
   程度の礫片をわずかに含む

a-a'
1. 黒褐色土（10YR2/2）に、にぶい褐色シルト（7.5YR5/3）が斑状に混入　粘性なし　しまり中　炭化粒をわずかに含む
2. 黒色土（5YR1.7/1）　粘性弱　しまり中　炭化粒を多く含む
3. 黒色土（7.5YR2/1）　粘性弱　しまり中　炭化粒をわずかに含む　Ⅱ層土
4. 黒色土（5YR1.7/1）　粘性弱　しまり中　炭化粒を多く含む
5. 黄褐色土（10YR5/6）　粘性弱　しまり中　被熱により黄変したと思われる

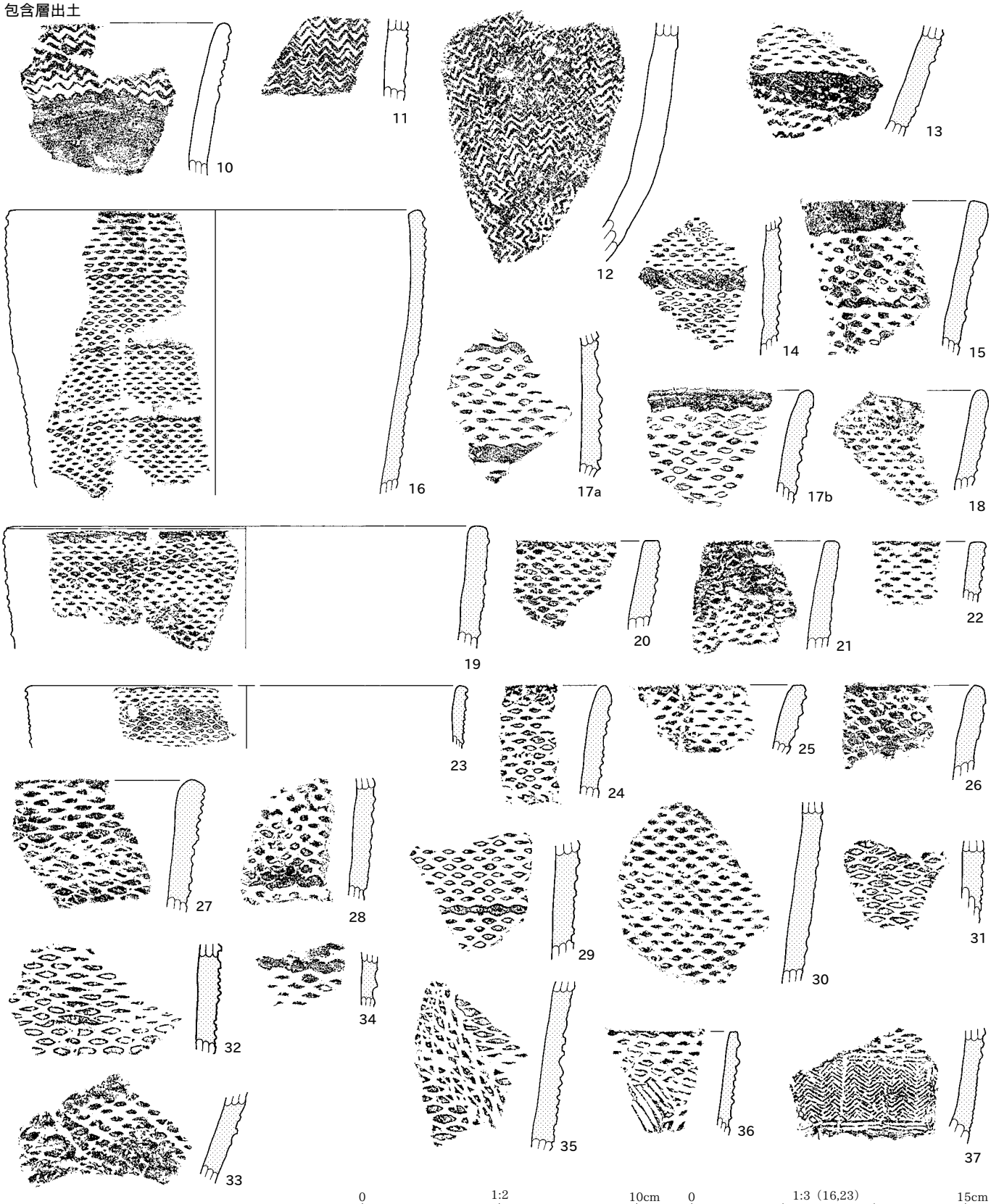
b-b'
1. 黒色土（5YR1.7/1）　粘性弱　しまり中　炭化粒を多く含む
2. 黒色土（7.5YR2/1）　粘性弱　しまり中　炭化粒をわずかに含む　Ⅱ層土か

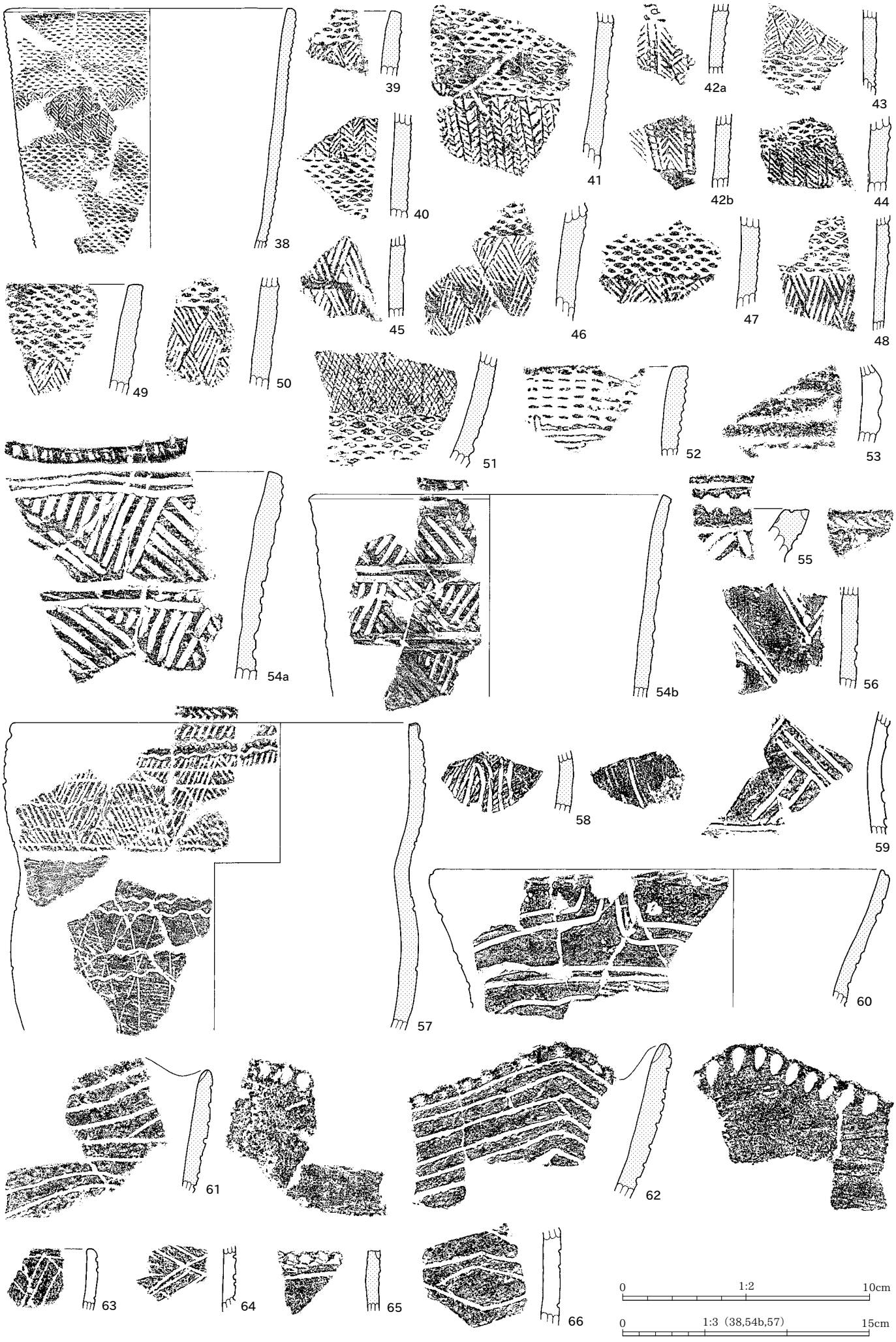
0　（1：40）　2m

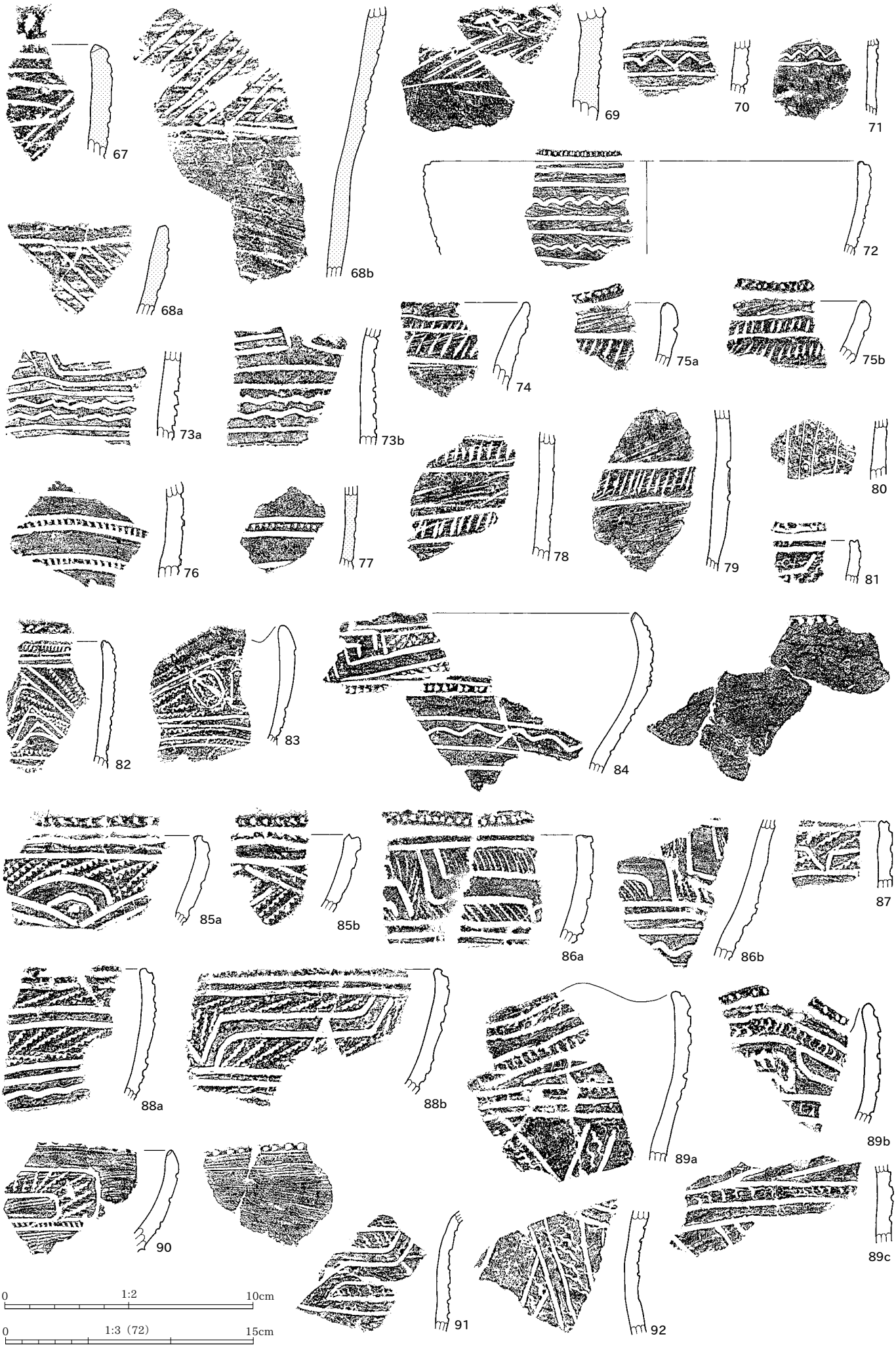
遺構出土

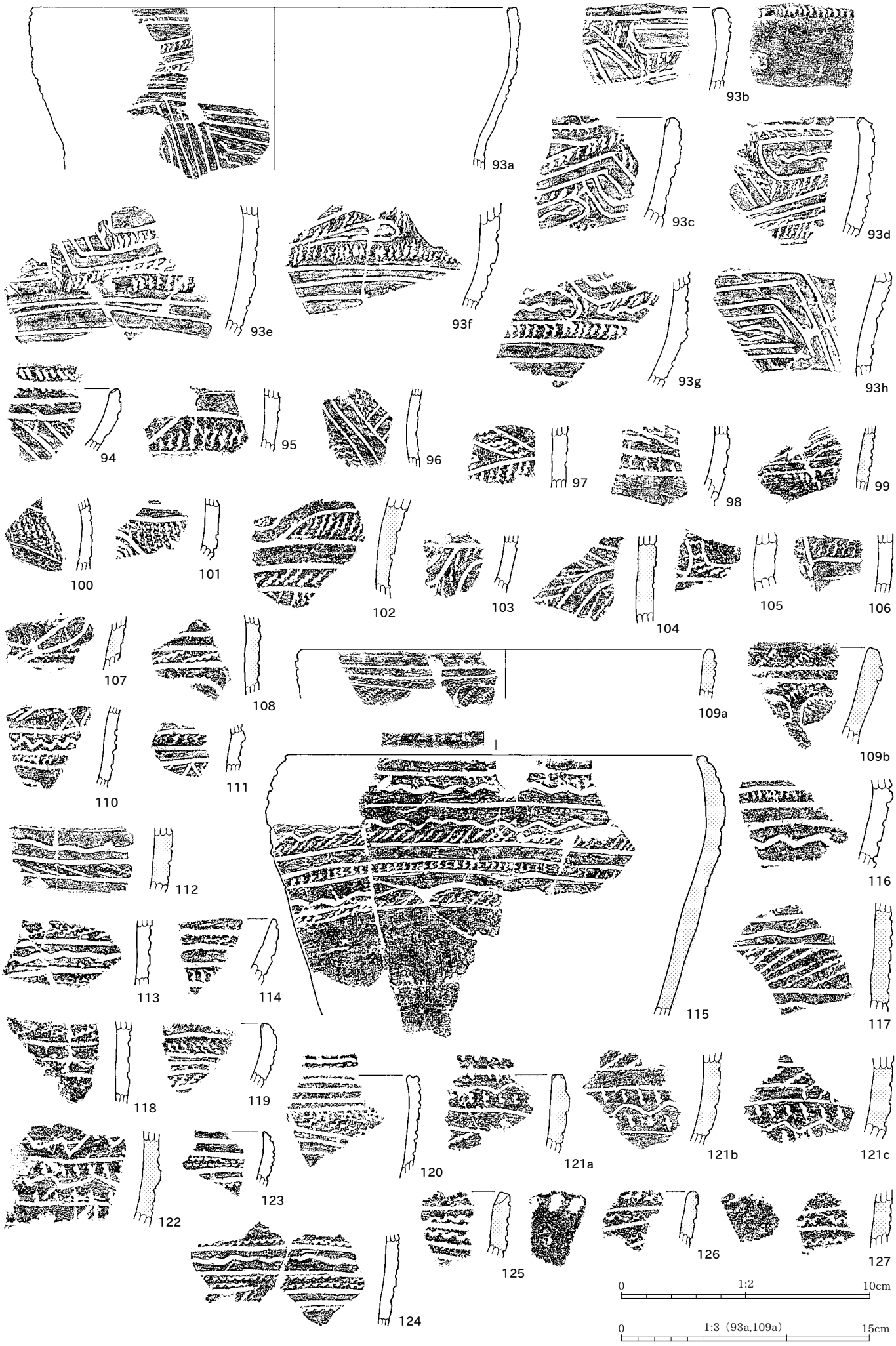

1 (SK1)
2 (SK5)
3 (SK5)
4
5 (SK20)
6 (SK12)
7 (SK15)
8 (SK15)
9 (3号焼土)

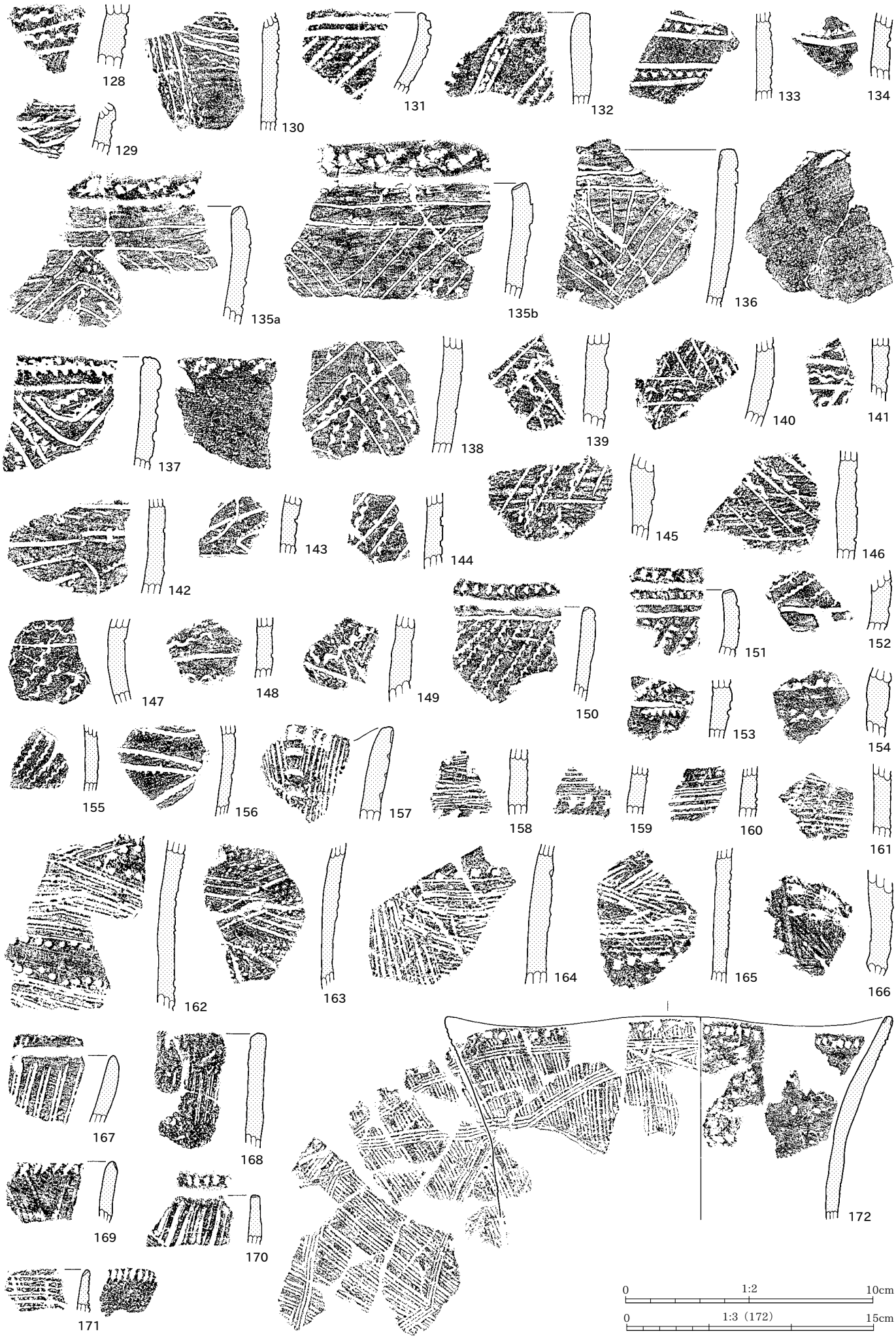
包含層出土

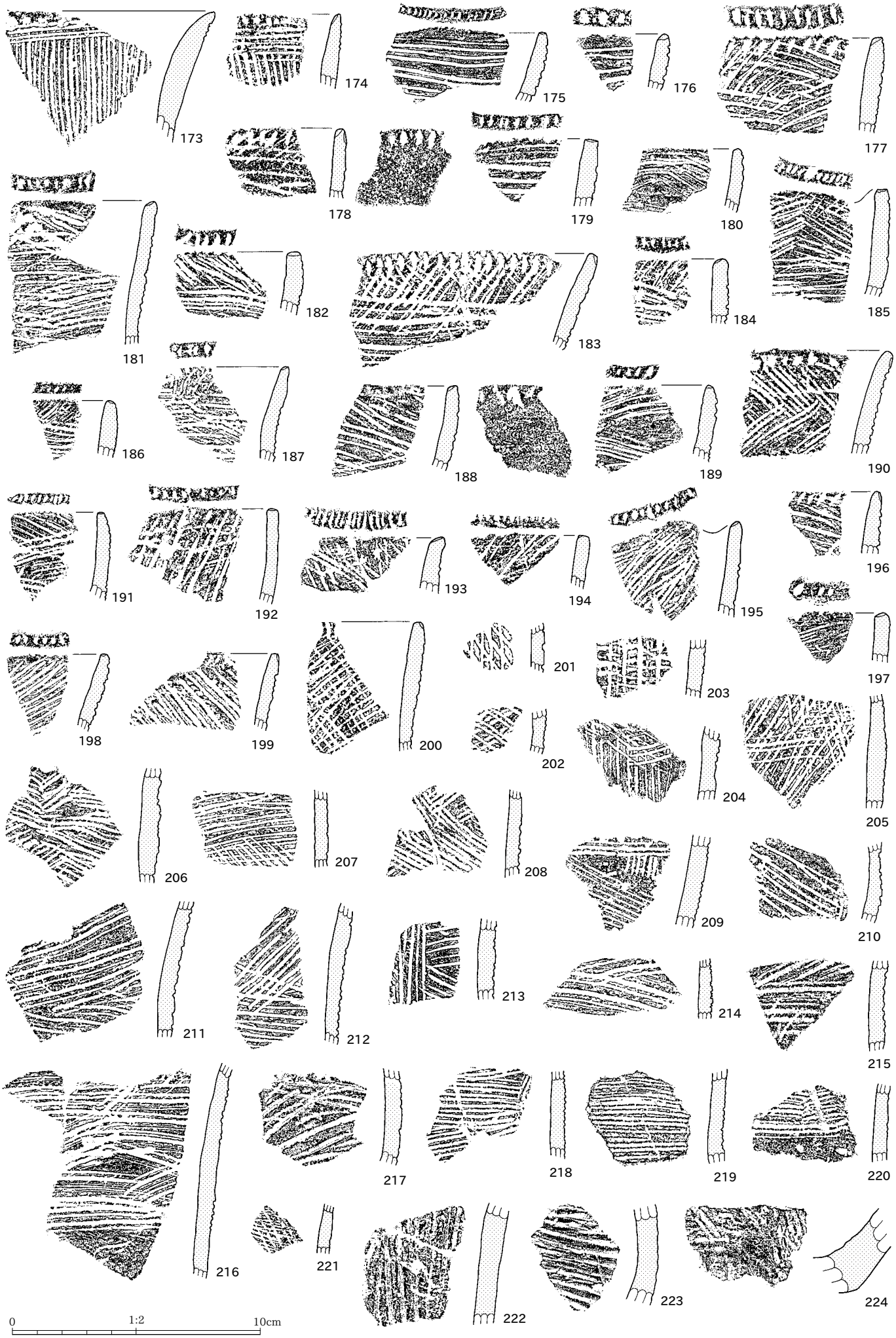

10
11
12
13
14
15
16
17a
17b
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
34
35
36
37
0
1:2
10cm
0
1:3（16,23）
15cm

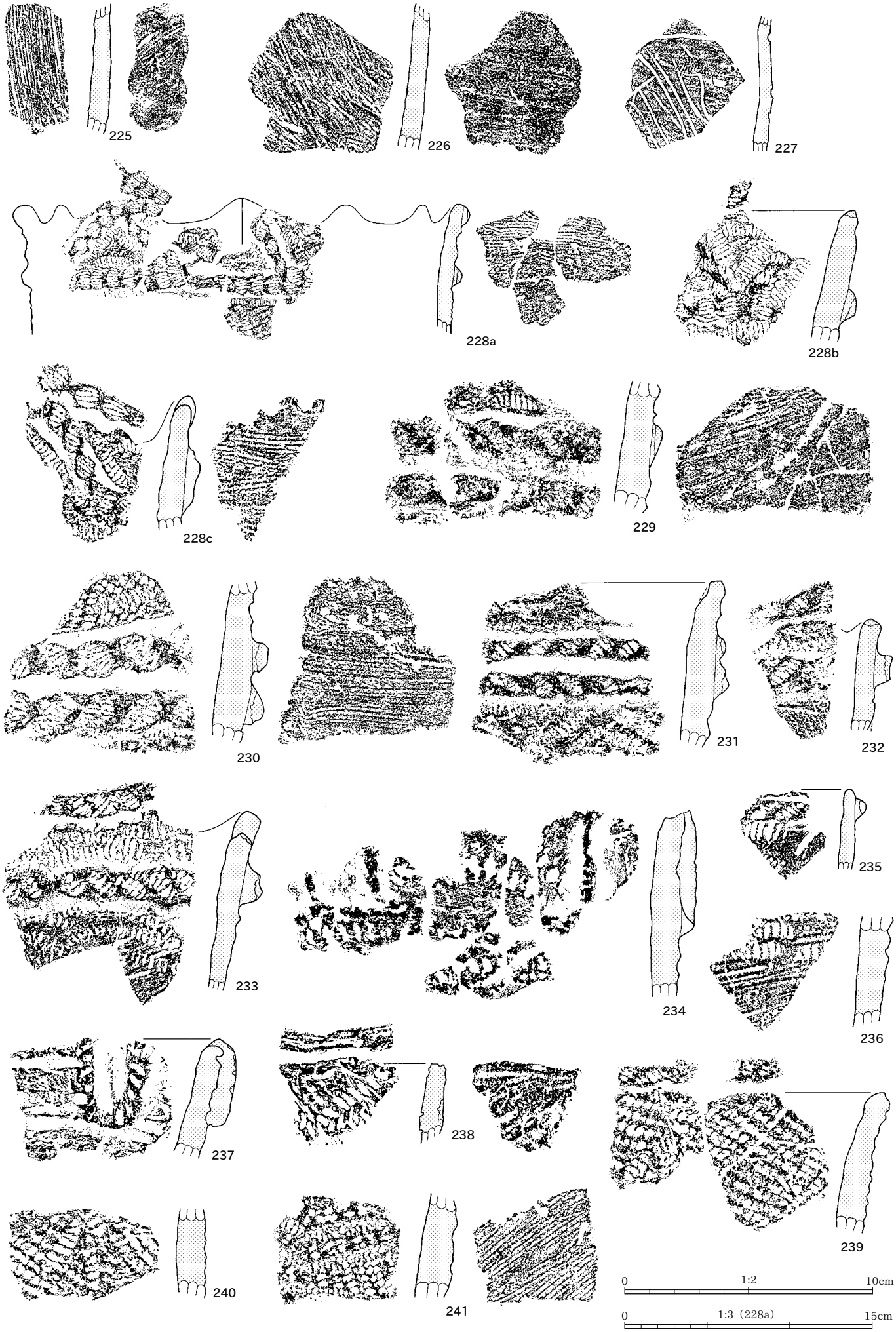

38
39
40
41
42a
42b
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54a
54b
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
0 1:2 10cm
0 1:3（38,54b,57） 15cm

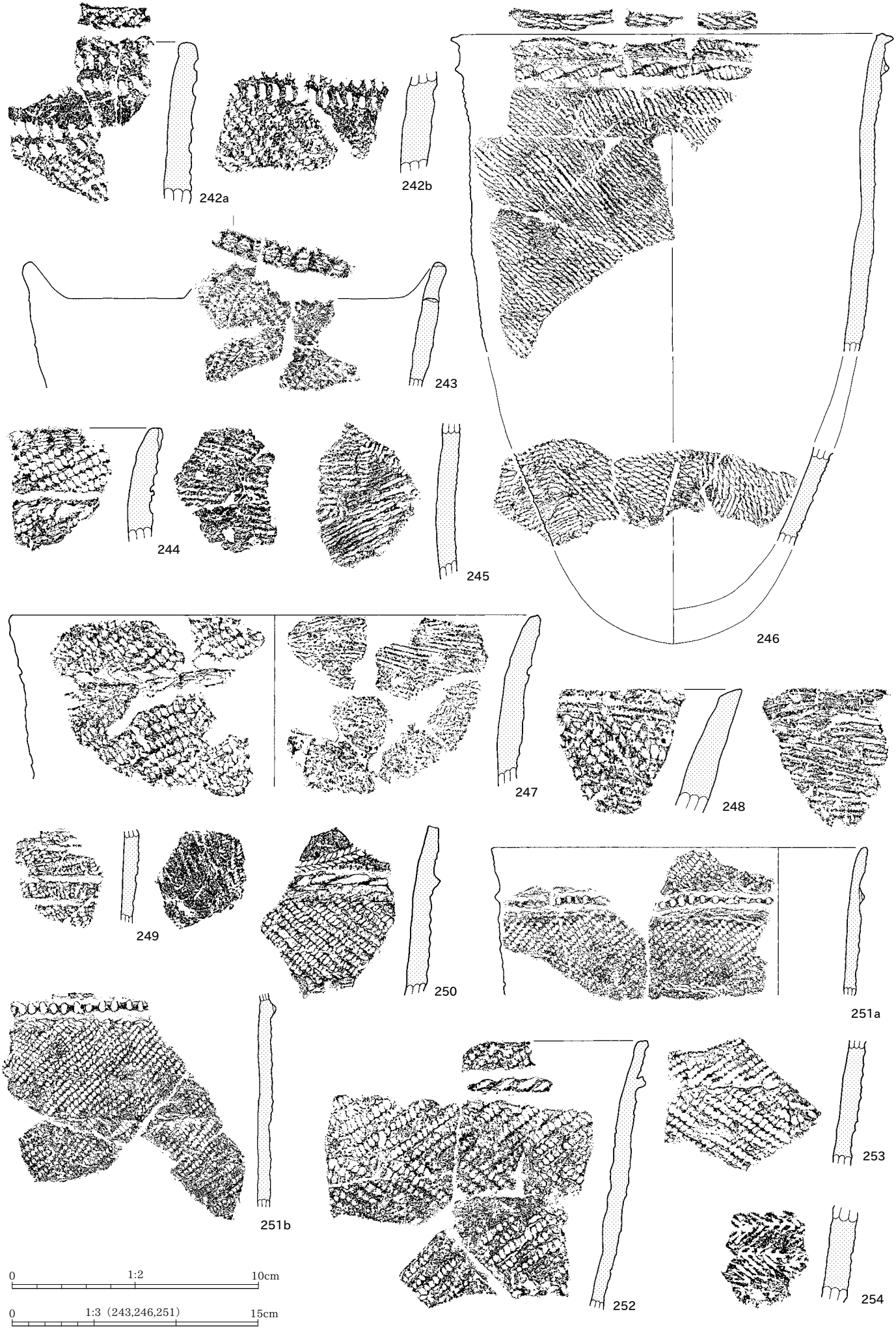

67
68b
68a
69
70
71
72
73a
73b
74
75a
75b
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85a
85b
86a
86b
87
88a
88b
89a
89b
89c
90
91
92
0 1:2 10cm
0 1:3 (72) 15cm


93a
93b
93c
93d
93e
93f
93g
93h
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109a
109b
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121a
121b
121c
122
123
124
125
126
127
0 1:2 10cm
0 1:3（93a,109a） 15cm

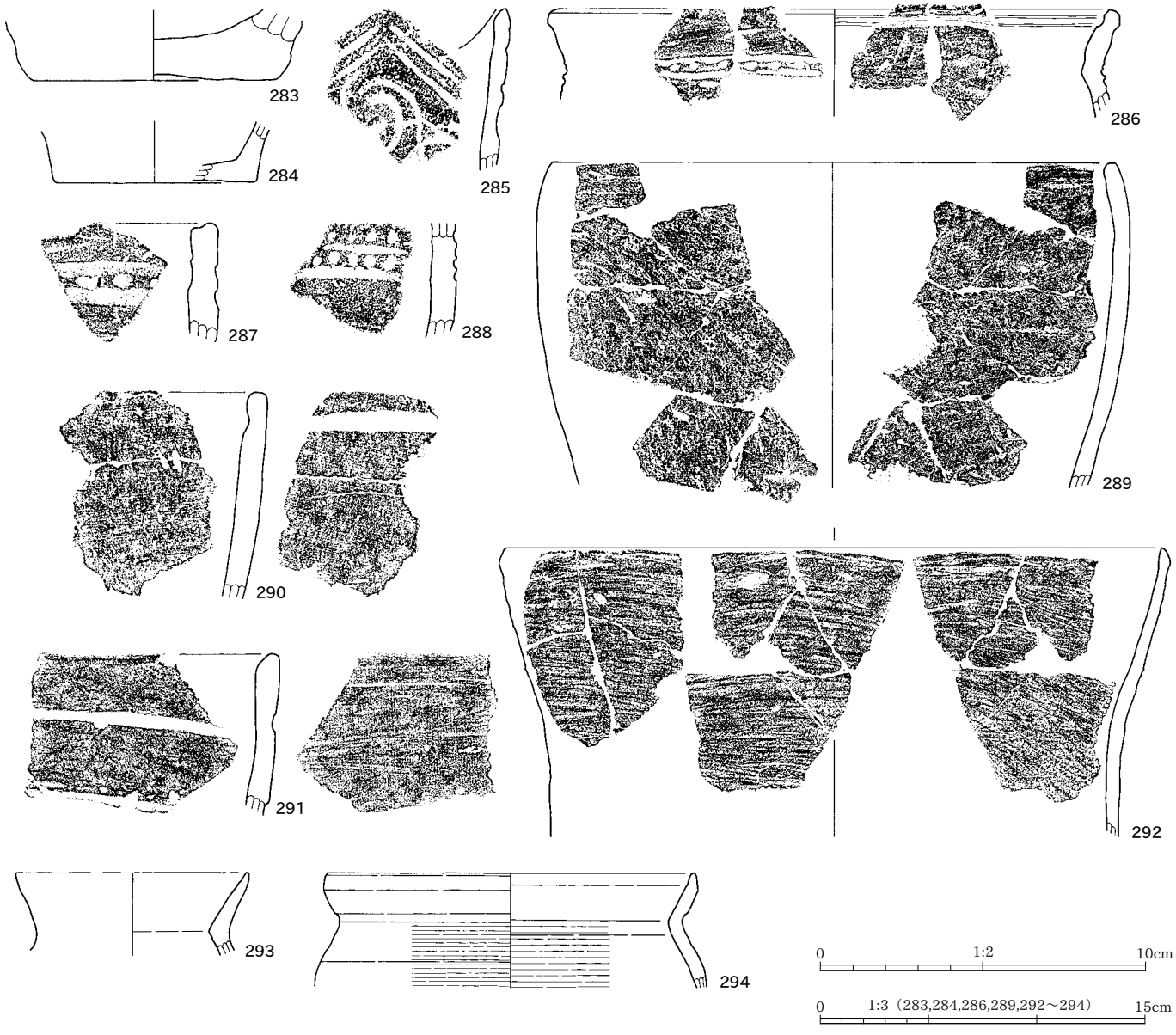

128
129
130
131
132
133
134
135a
135b
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
0 1:2 10cm
0 1:3（172） 15cm

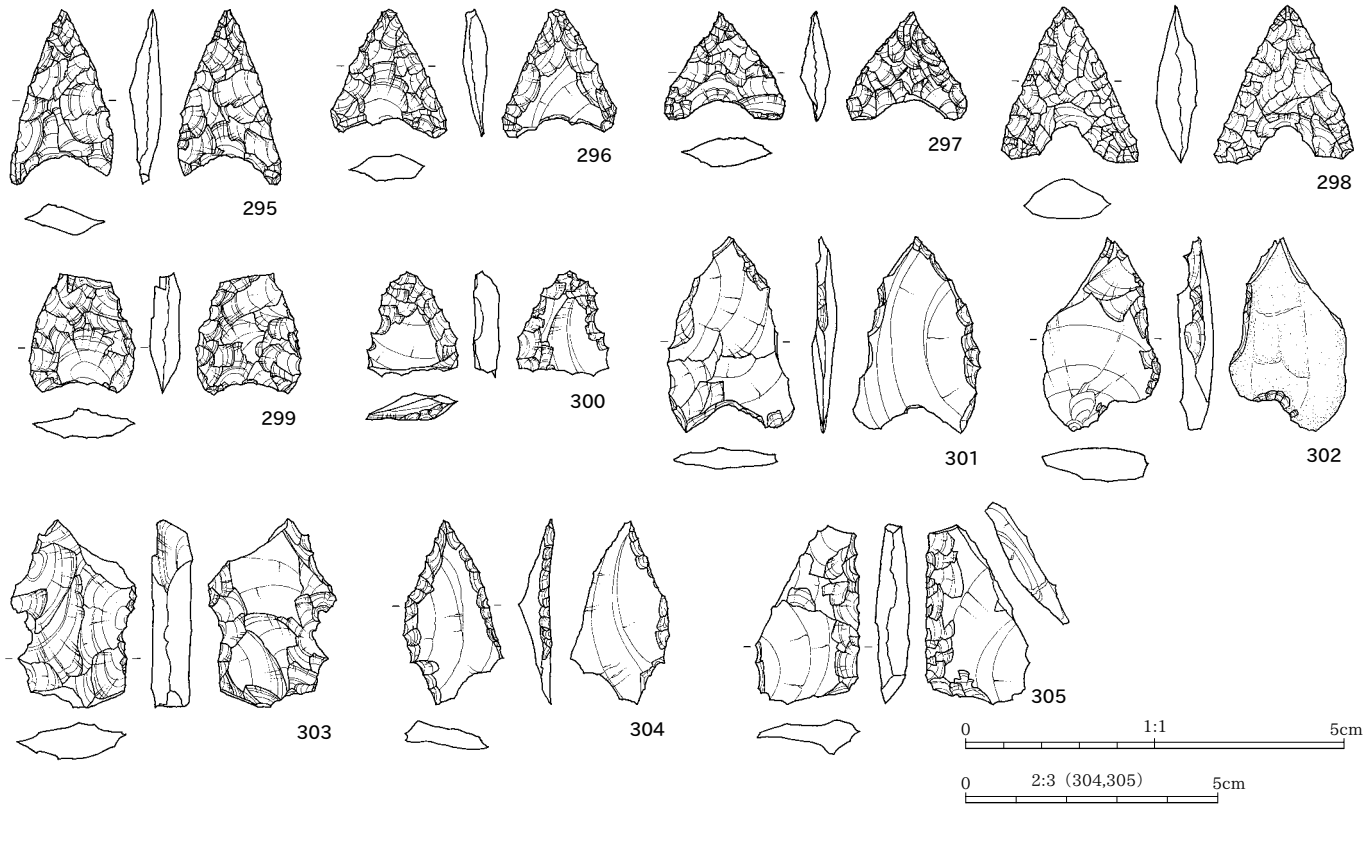

173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
0
1:2
10cm

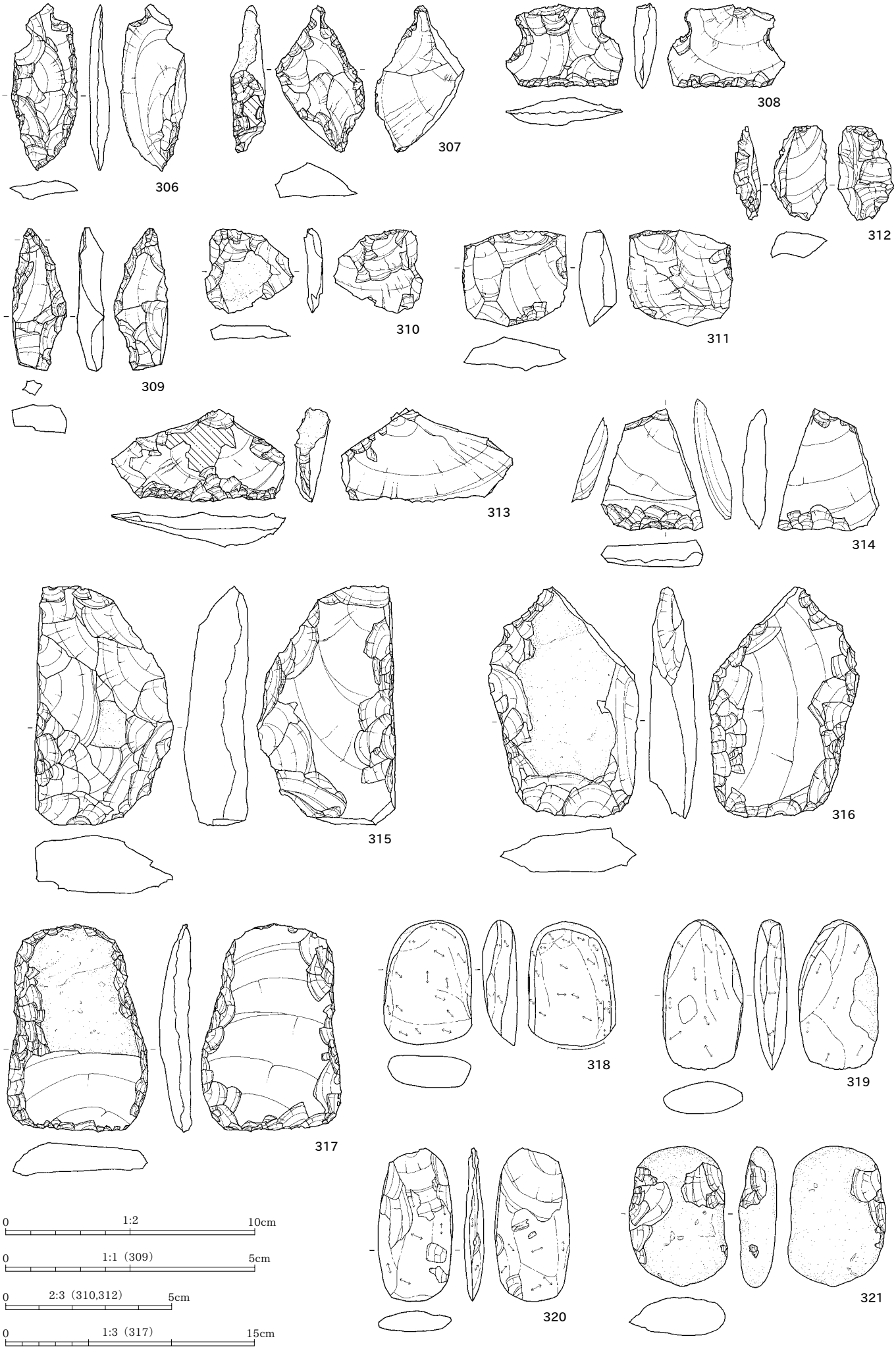

225
226
227
228a
228b
228c
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
0 1:2 10cm
0 1:3（228a） 15cm

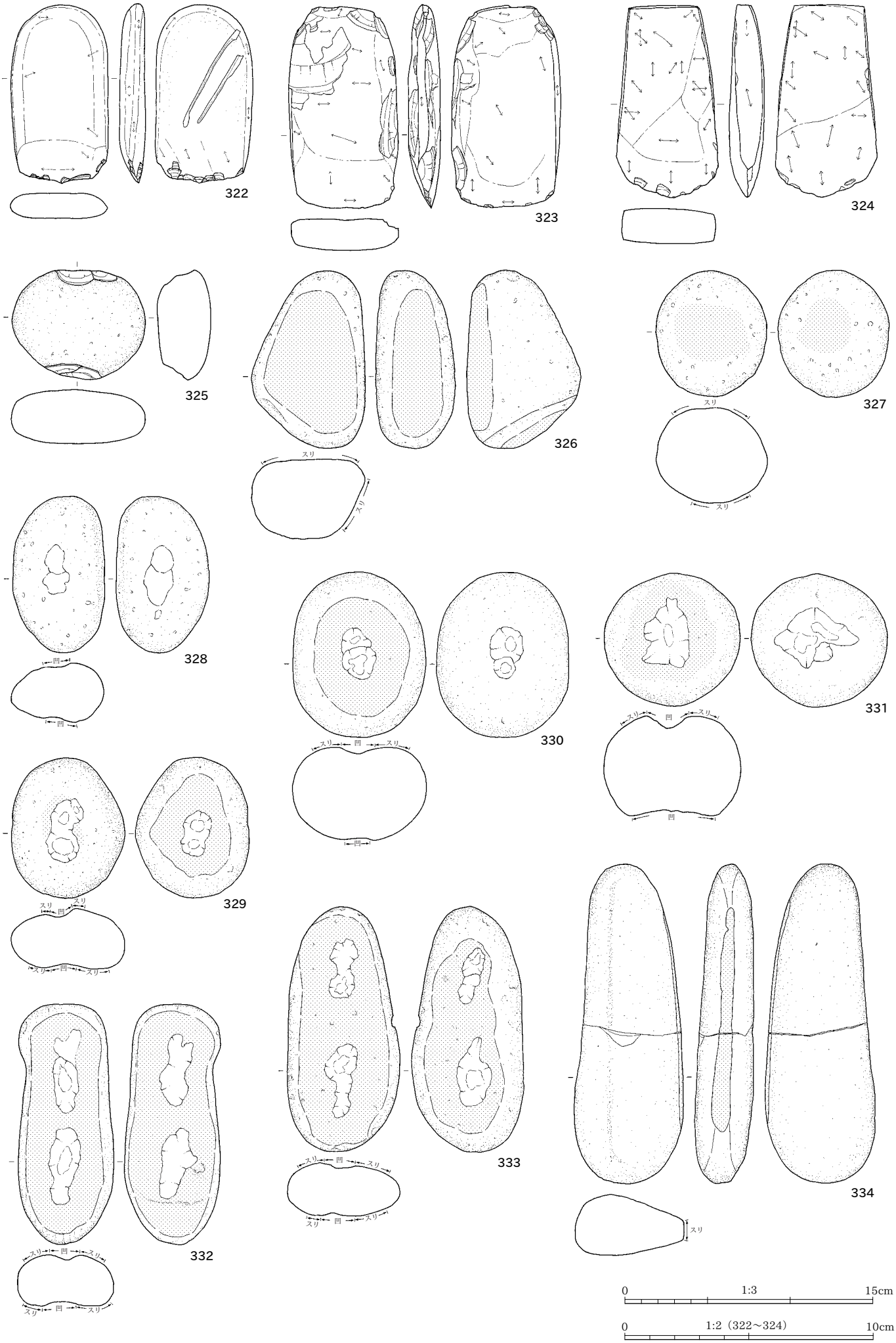

242a
242b
243
244
245
246
247
248
249
250
251a
251b
252
253
254
0 1:2 10cm
0 1:3（243,246,251） 15cm

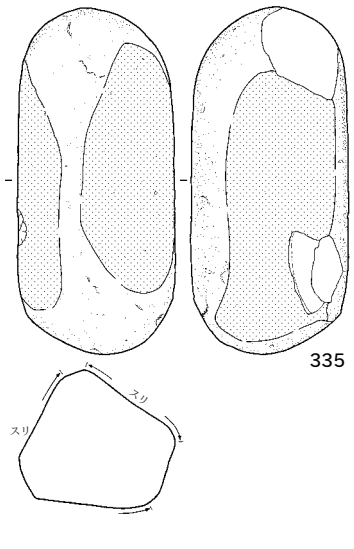
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
0
1:2
10cm
0
1:3（268）
15cm


283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
0 1:2 10cm
0 1:3（283,284,286,289,292～294） 15cm

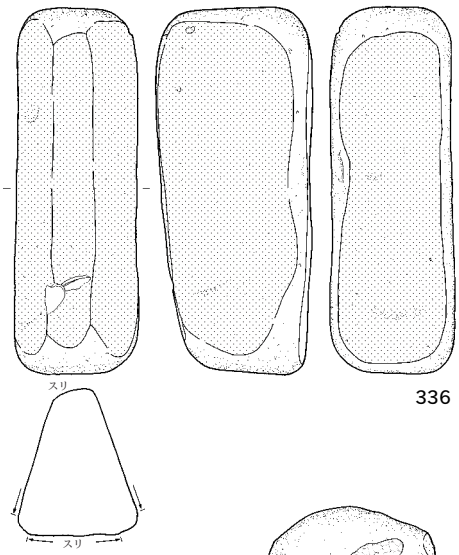

295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
0 1:1 5cm
0 2:3（304,305） 5cm


306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
0 1:2 10cm
0 1:1（309） 5cm
0 2:3（310,312） 5cm
0 1:3（317） 15cm

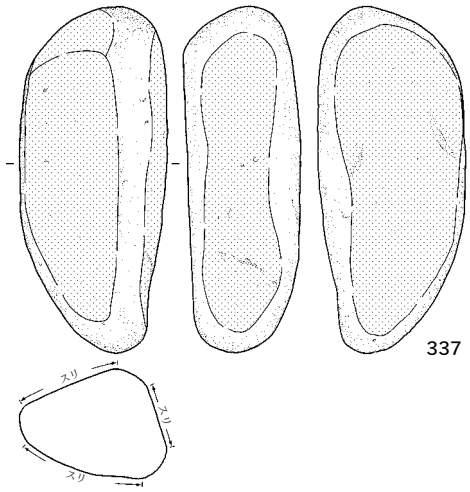

322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
スリ
凹
0　1:3　15cm
0　1:2（322～324）　10cm



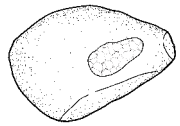
335

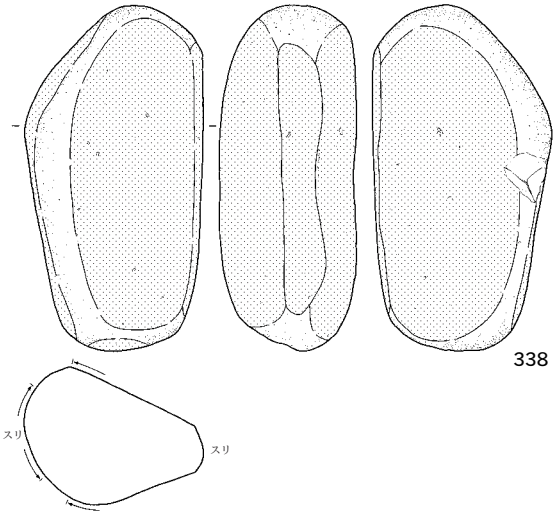


336

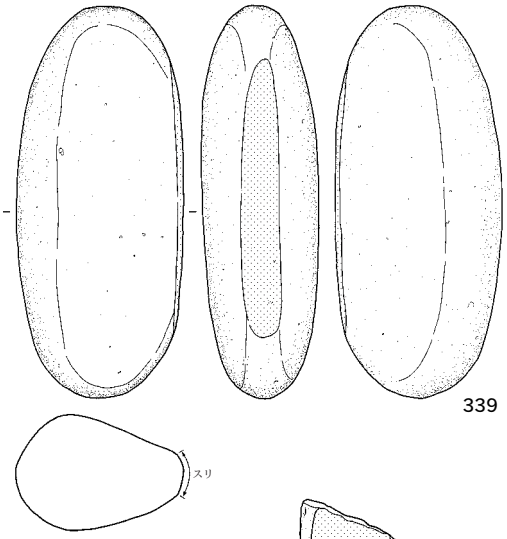


337

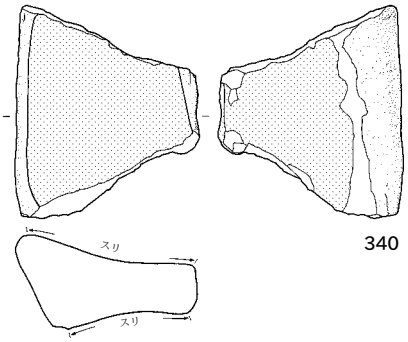




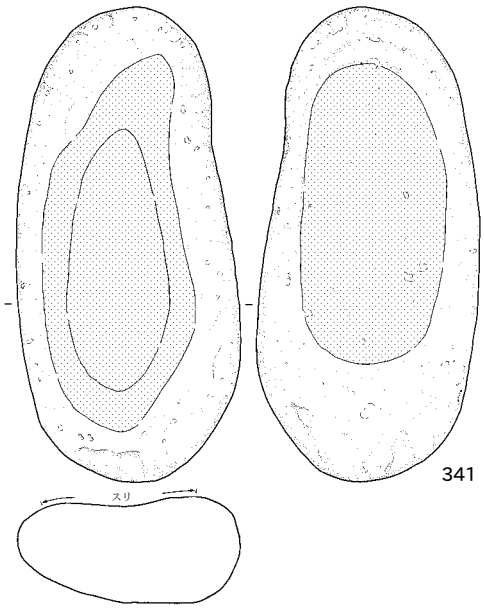
338



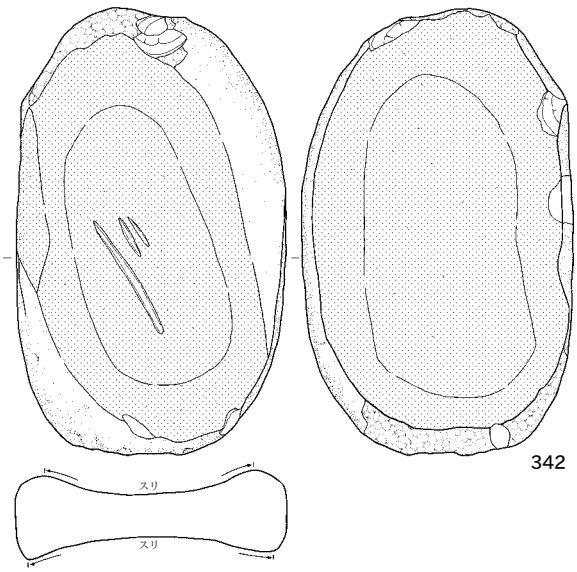
339



340



341

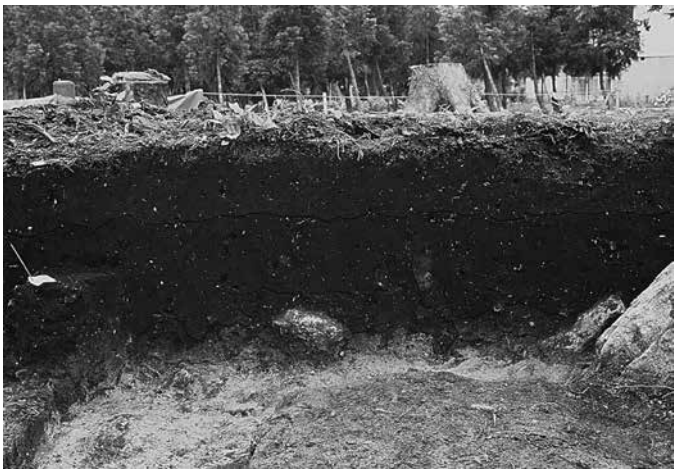


342

0 1:3 15cm

0 1:4（341,342） 20cm

八斗蒔原遺跡周辺の景観（2000年９月撮影）　（国土地理院発行）



基本層序　4G～5G（南西から）

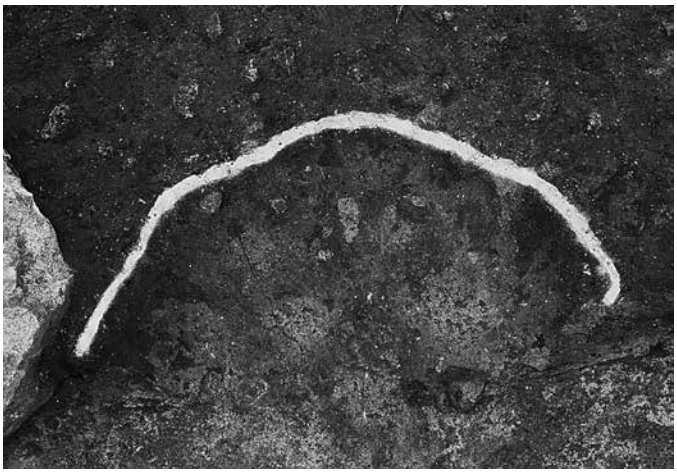
基本層序　4C（南西から）

２号集石　検出状況（東から）

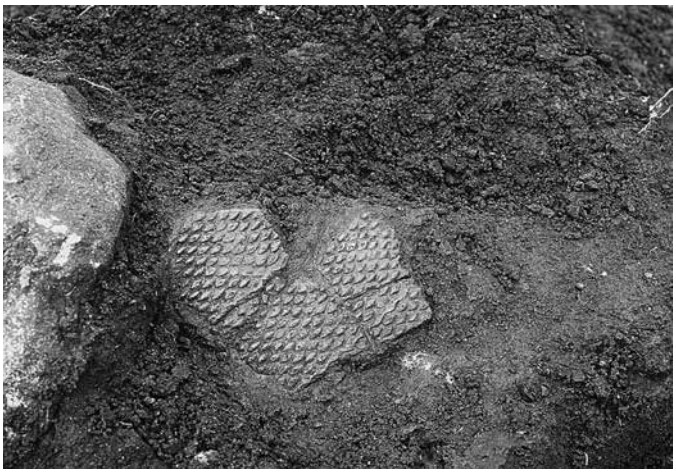
２号集石　断面（南から）

1号集石土坑　検出状況（南から）

1号集石土坑　断面（南から）



1号集石土坑　完掘（南から）

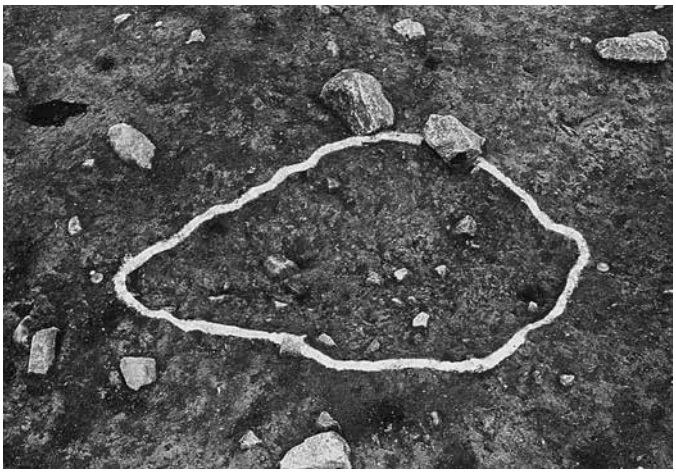


押型文土器出土状況　7B（南西から）

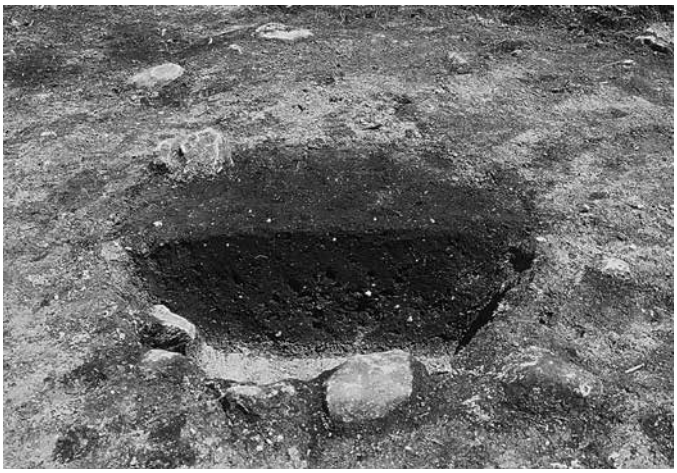
SK17　断面（南東から）

SK17　完掘（西から）

SK19　断面（西から）



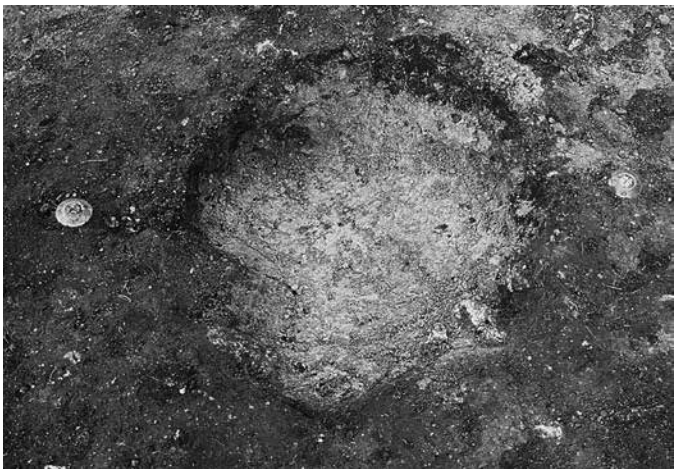
SK19　完掘（西から）



SK1　断面（南西から）

SK1　完掘（南東から）

SK2　断面（南から）

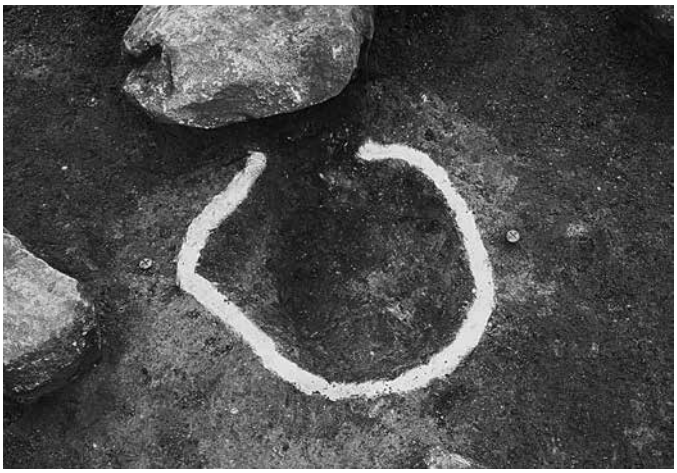


SK2　完掘（南から）

SK5　断面（東から）

SK5　完掘（東から）

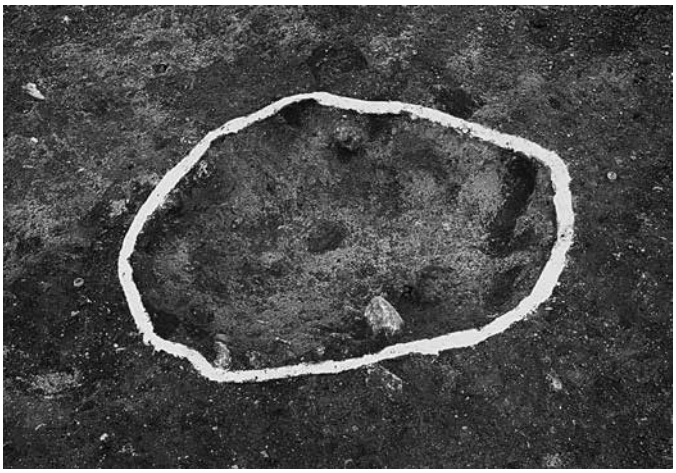
SK13　断面（南から）



SK13　完掘（南から）

図 版 20

SK14　断面（東から）



SK14　完掘（東から）

SK20　断面（西から）

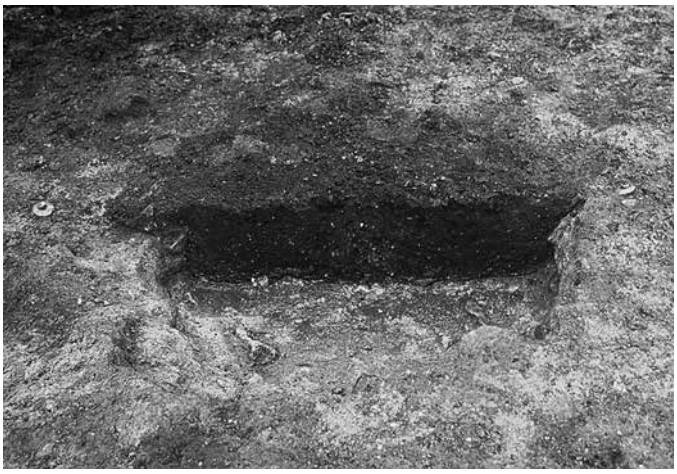
SK20　完掘（東から）

SK26　断面（南から）

SK26　完掘（南から）

SK27　断面（東から）

SK27　完掘（南から）

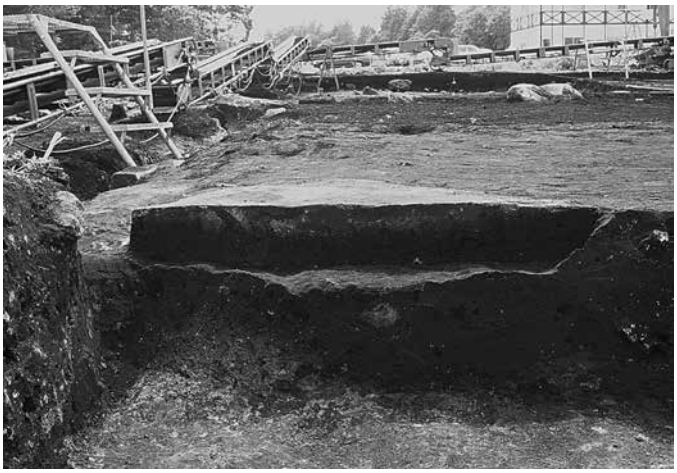


SK28　断面（東から）

SK28　完掘（南から）

P15　断面（南から）

P15　完掘（南から）



SK15　断面（北東から）

SK15　完掘（西から）

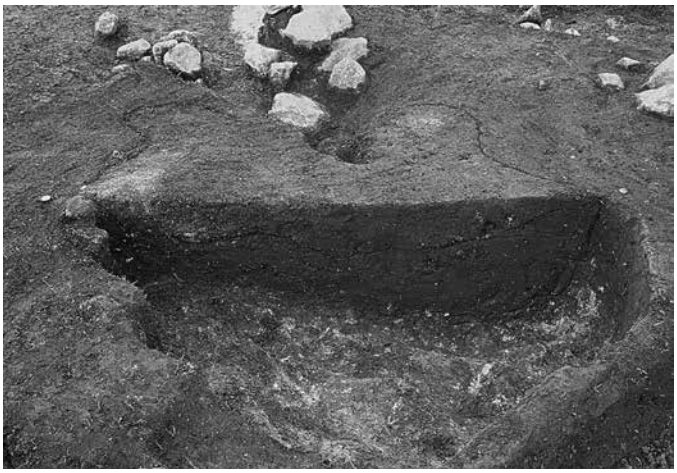
１号炭窯　断面（南から）

１号炭窯　断面（西から）

図 版 22

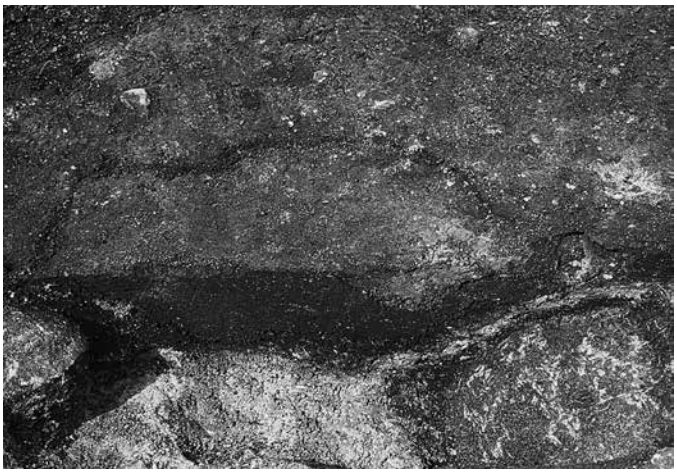
1号炭窯　完掘　（北西から）

3号焼土　検出状況（南から）



3号焼土　断面（南から）

4号焼土　検出状況（南から）

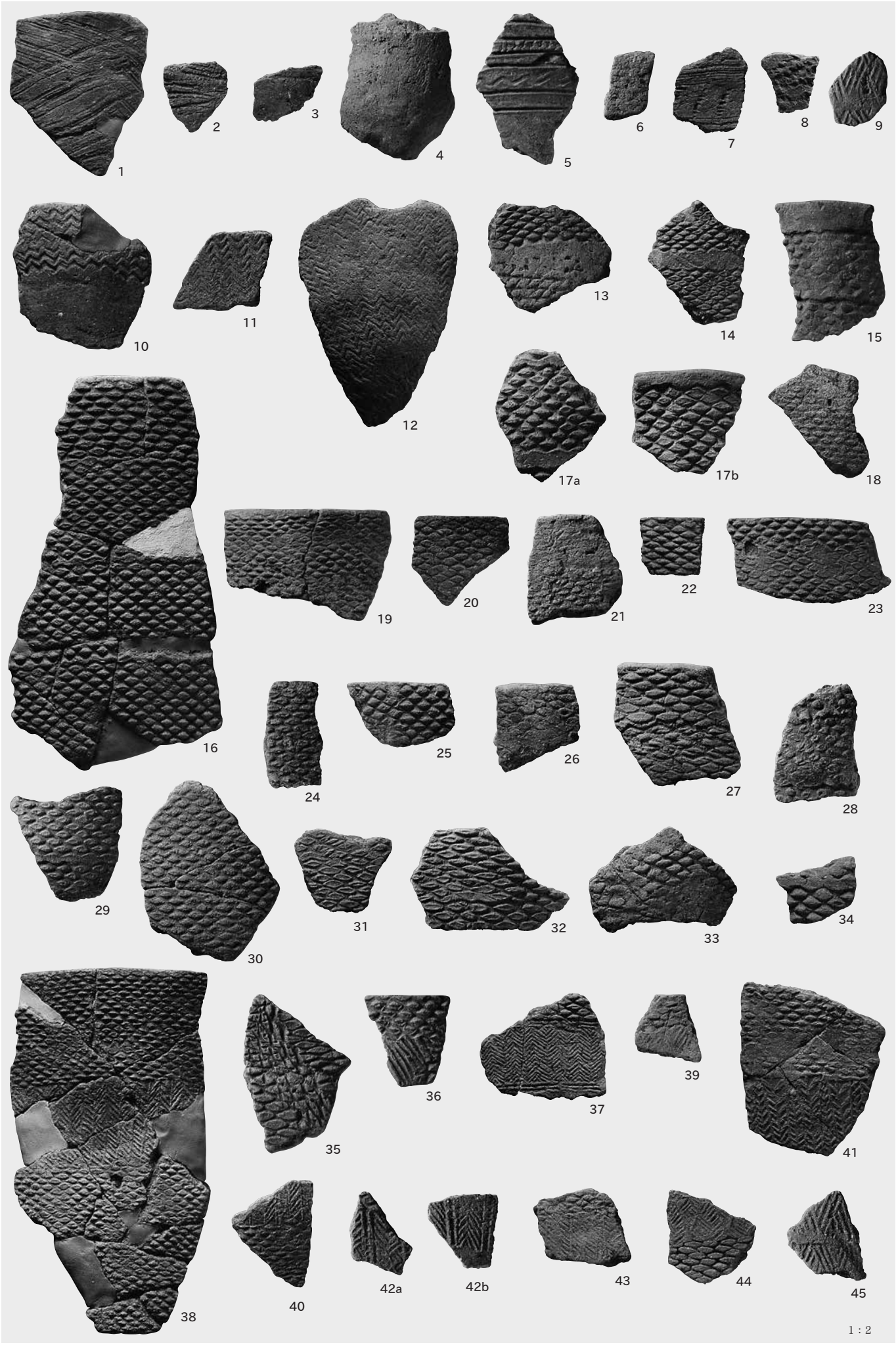


4号焼土　断面（南から）

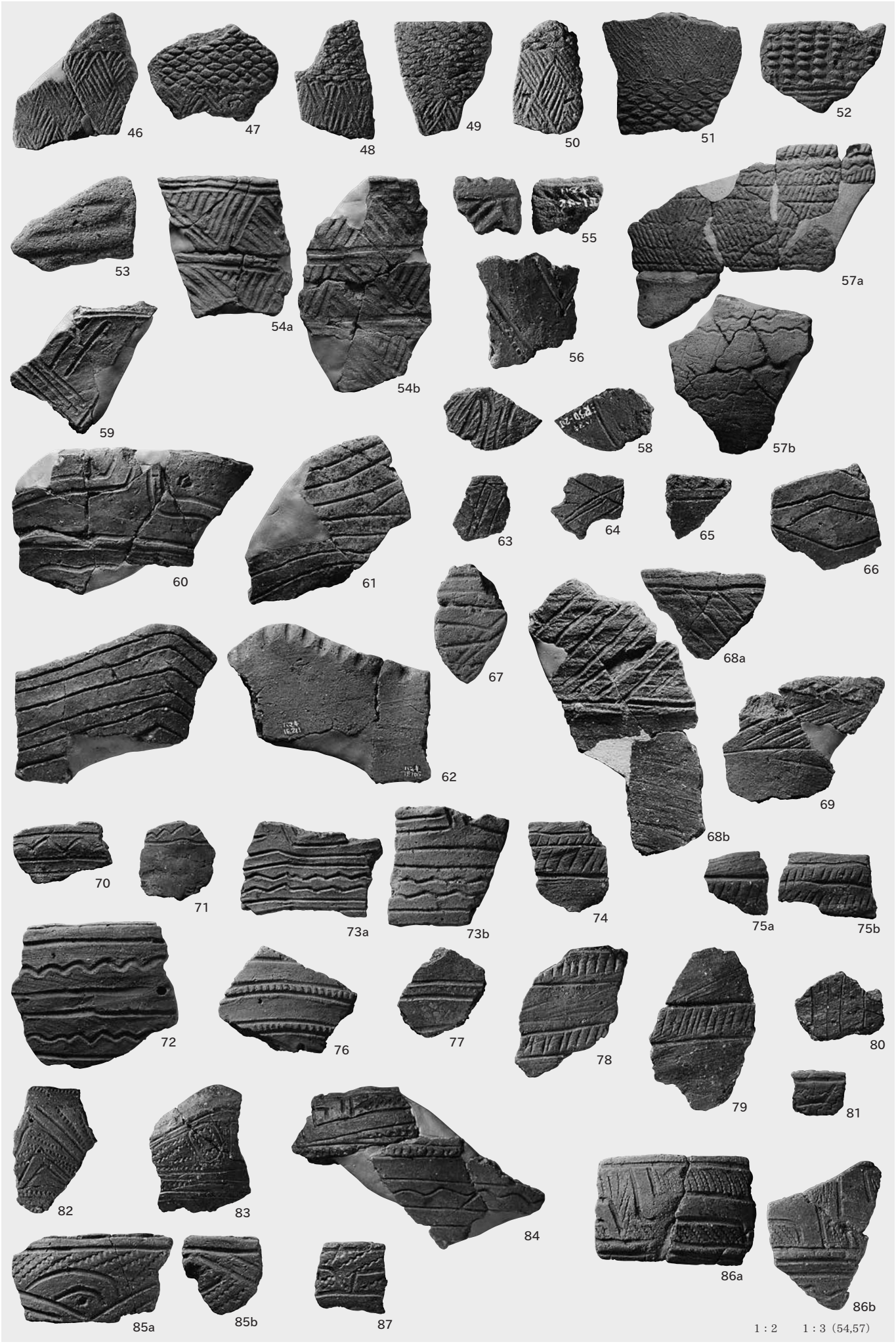
95年度調査区　完掘（南西から）

96年度調査区西側　完掘（南東から）

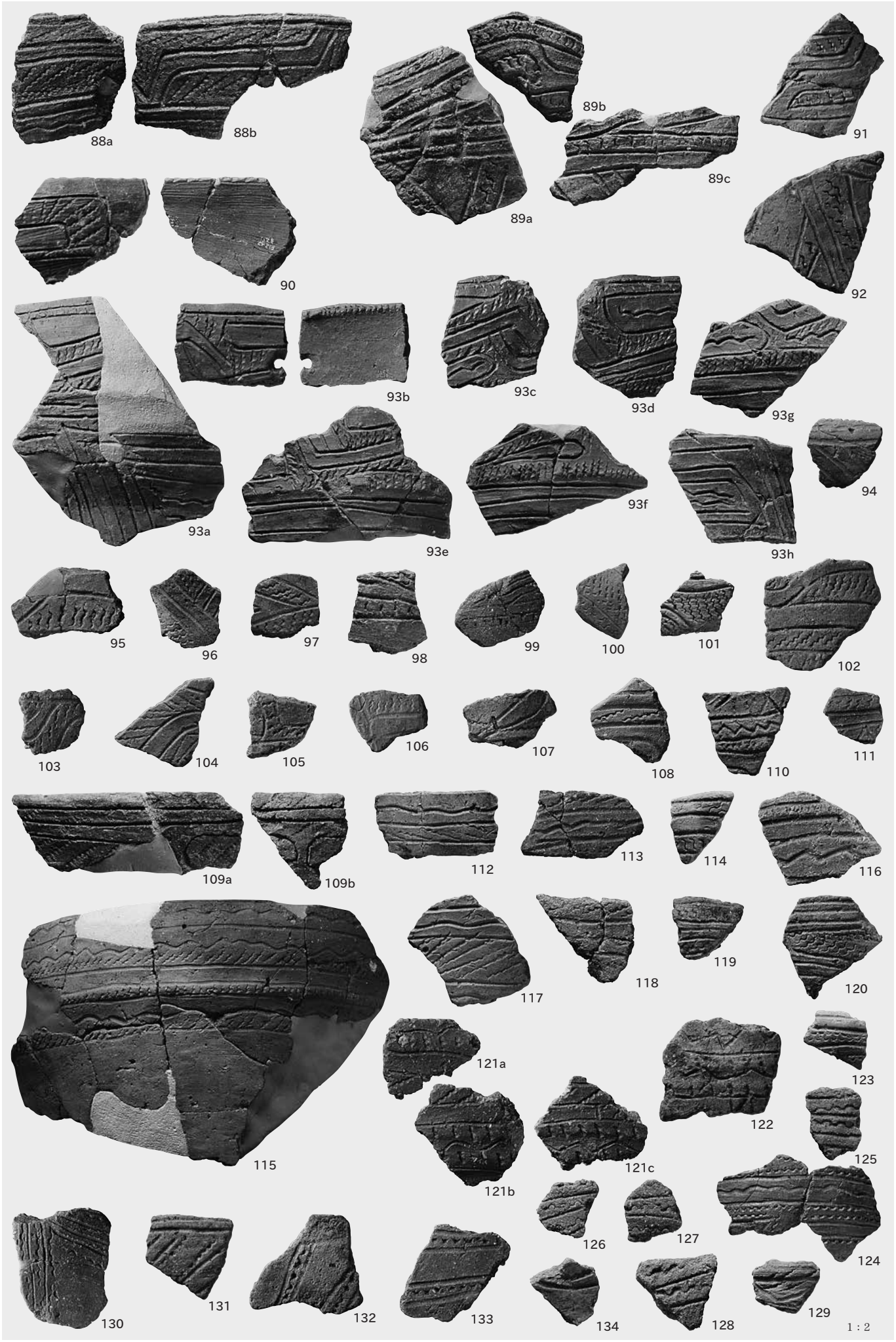
96年度調査区東側　完掘（南から）

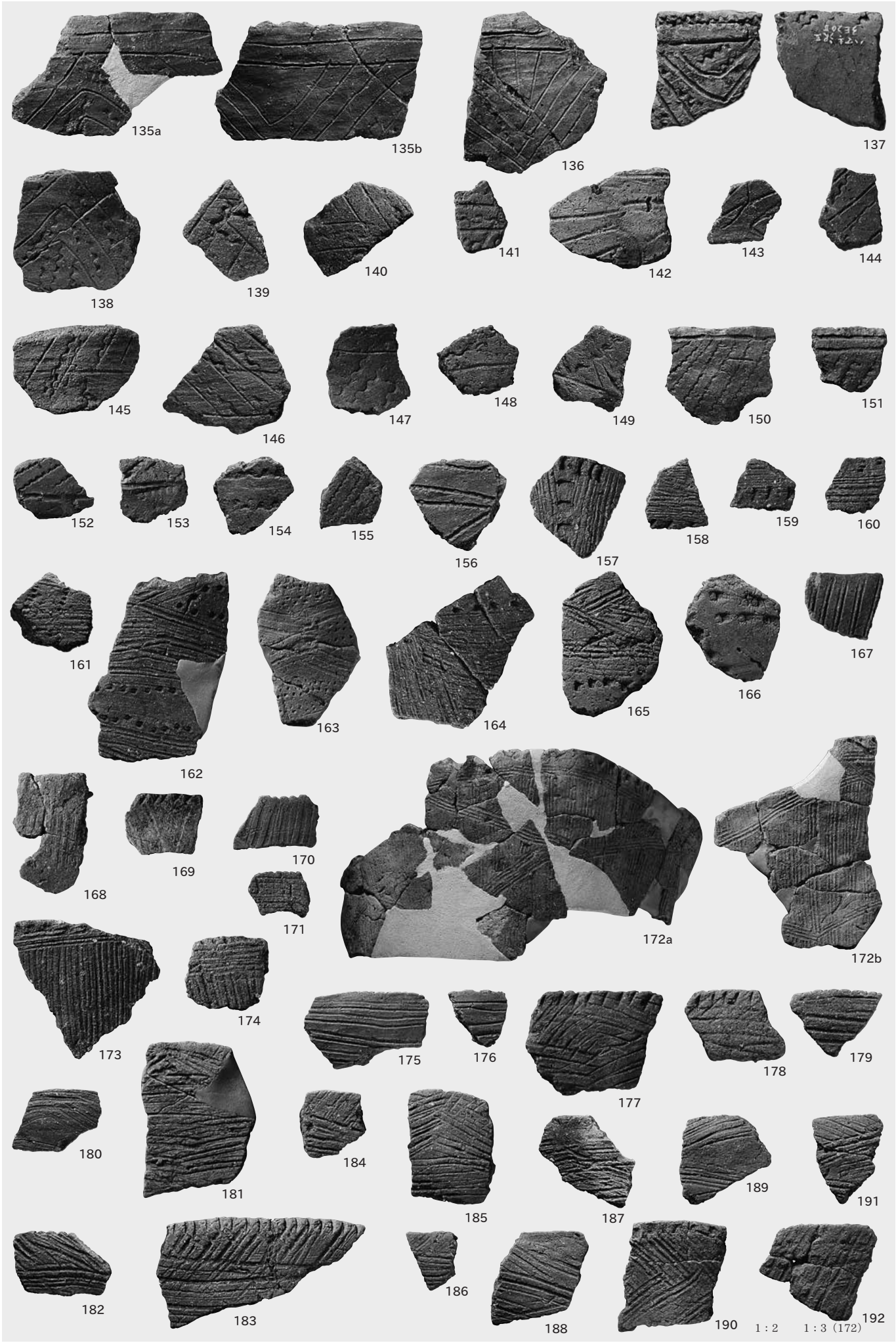

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17a
17b
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42a
42b
43
44
45

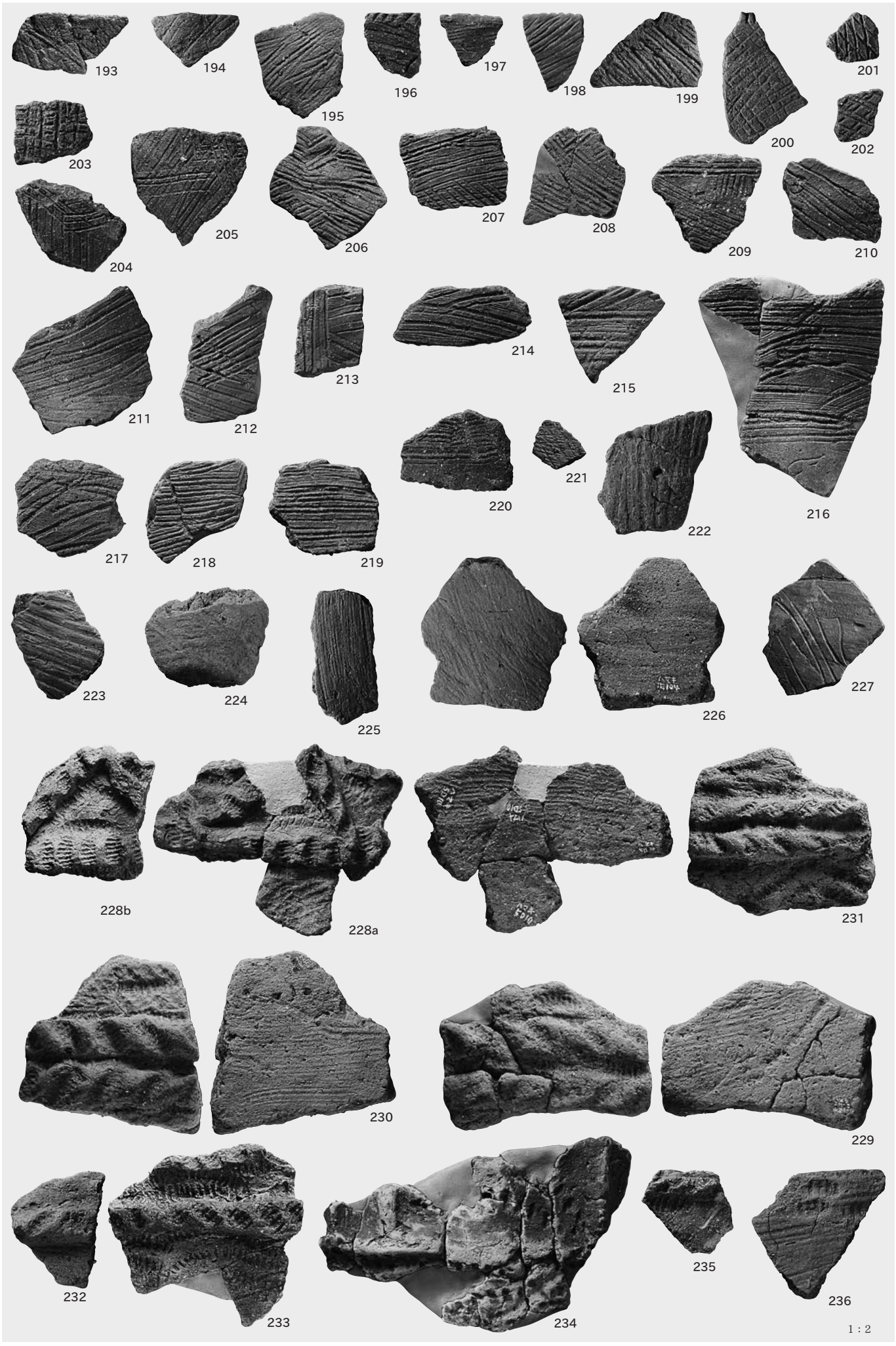
1 : 2


46
47
48
49
50
51
52
53
54a
54b
55
56
57a
57b
58
59
60
61
63
64
65
66
67
68a
68b
69
62
70
71
73a
73b
74
75a
75b
72
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85a
85b
87
86a
86b

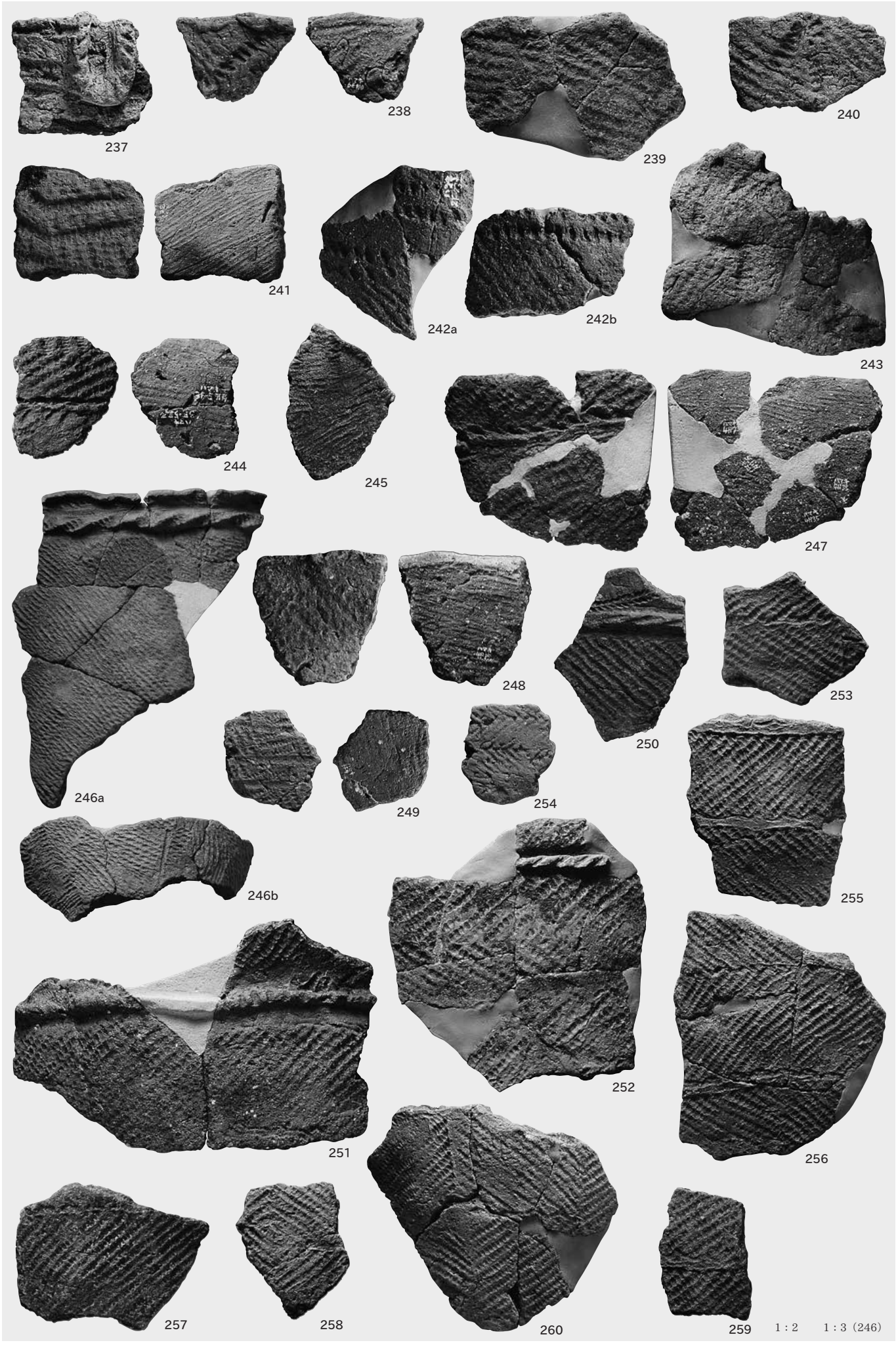
1 : 2　　1 : 3（54,57）

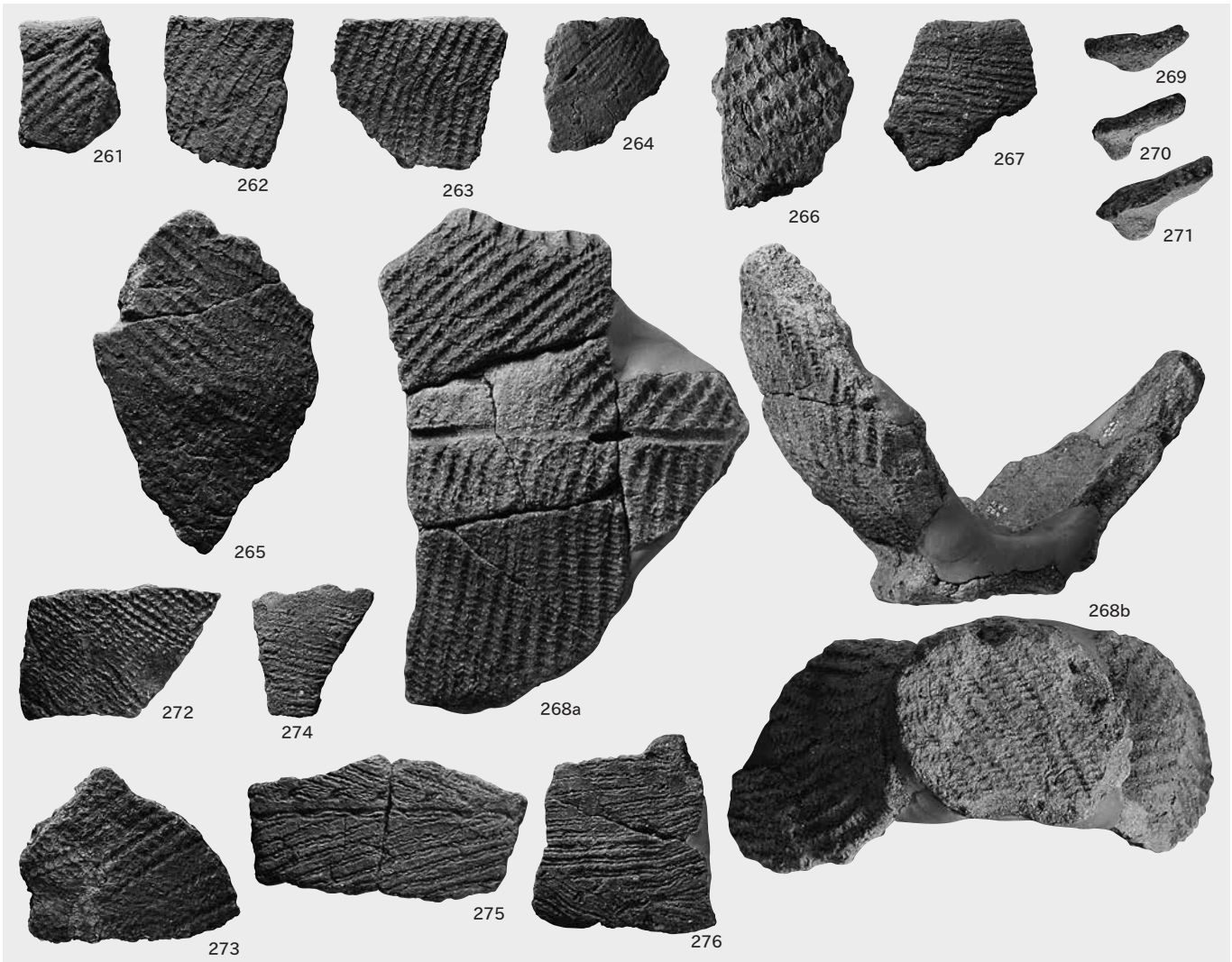

88a
88b
89b
89a
89c
91
90
92
93b
93c
93d
93g
93a
93e
93f
93h
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
110
111
109a
109b
112
113
114
116
115
117
118
119
120
121a
121b
121c
122
123
125
124
126
127
130
131
132
133
134
128
129
1 : 2

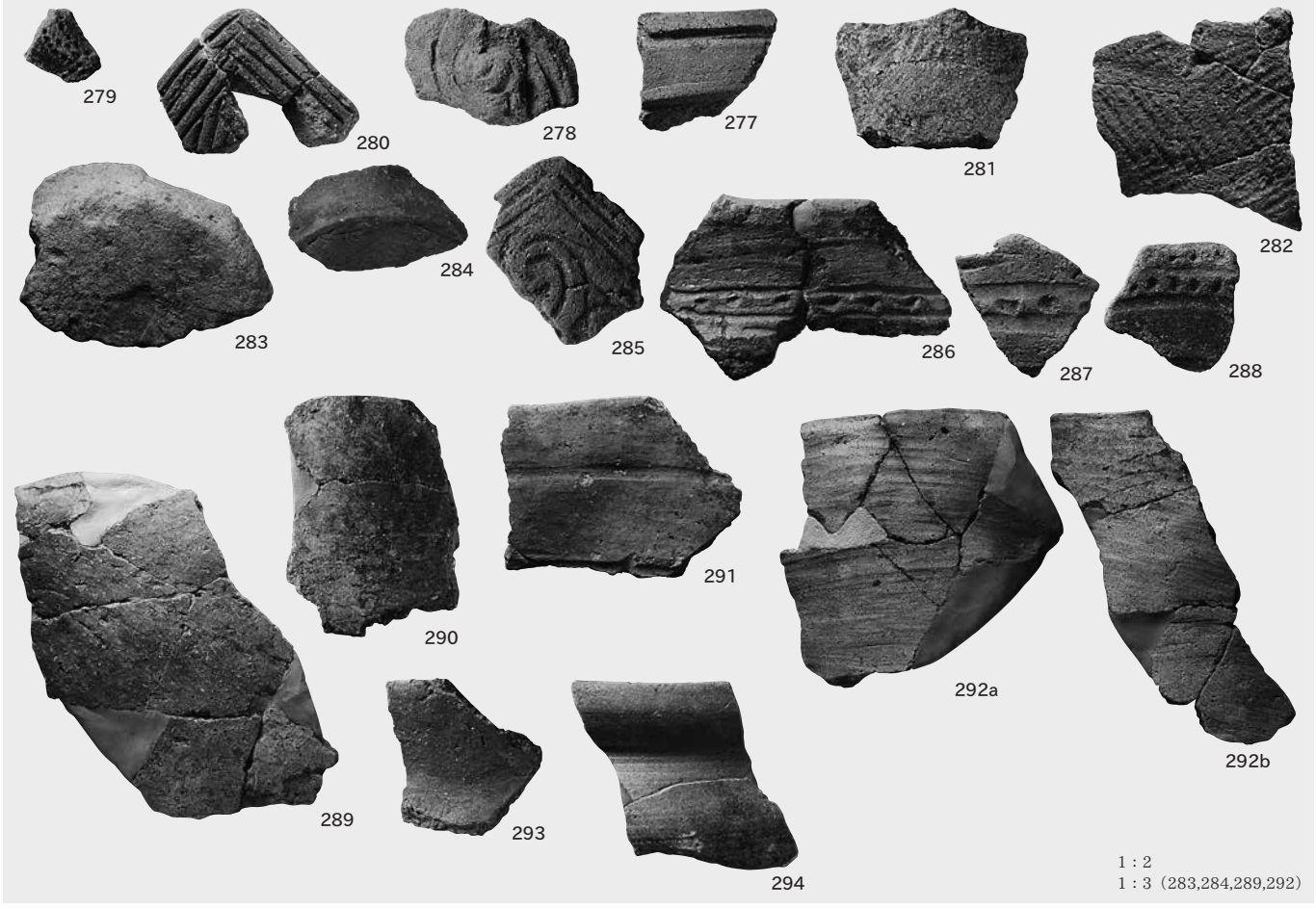

135a
135b
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172a
172b
173
174
175
176
177
178
179
180
181
184
185
187
189
191
182
183
186
188
190
192
1 : 2
1 : 3 (172)


193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228b
228a
229
230
231
232
233
234
235
236

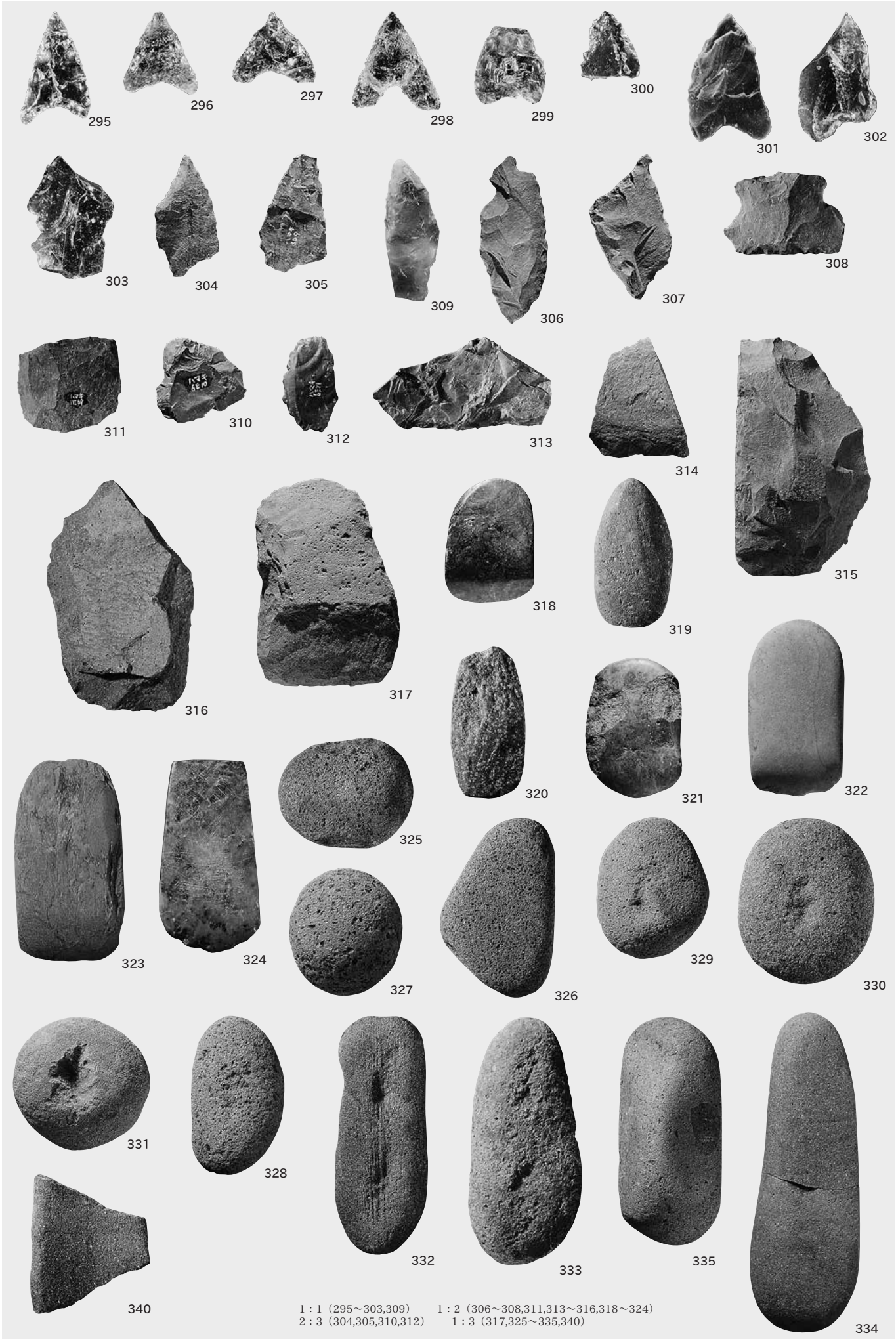
1：2


237
238
239
240
241
242a
242b
243
244
245
247
246a
248
253
250
254
249
246b
255
252
251
256
257
258
260
259
1 : 2
1 : 3 (246)

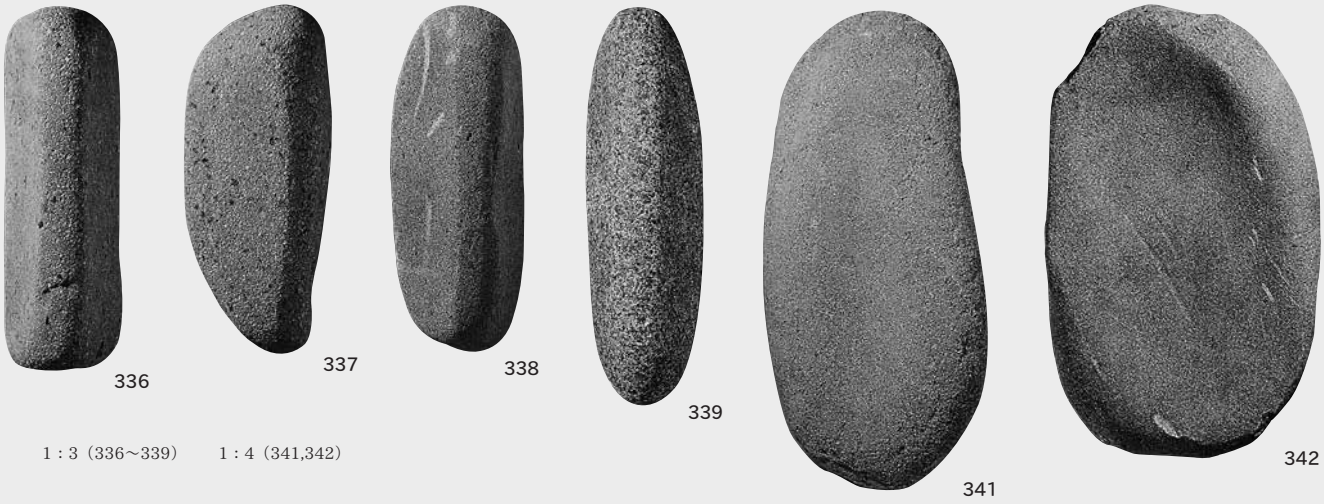




1 : 2
1 : 3（283,284,289,292）



1 : 1（295～303,309）　1 : 2（306～308,311,313～316,318～324）
2 : 3（304,305,310,312）　1 : 3（317,325～335,340）



336　337　338　339　341　342

1：3（336～339）　1：4（341,342）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はっとまきはらいせき
書　　名	八斗蒔原遺跡
副 書 名	上信越自動車道関係発掘調査報告書
巻　　次	Ⅺ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第129集
編 著 者 名	坂上有紀
編 集 機 関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒956-0845　新潟県新津市大字金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	2004（平成16）年2月13日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
八斗蒔原遺跡	新潟県中頸城郡中郷村大字板橋新田字八斗蒔原593番地1ほか	15546	49	36° 58′ 39″	138° 13′ 10″	一次調査 19940908～0914・ 19950523～0526・ 0628・1030～1101 二次調査 19950612～0706・ 19960422～0719	5,800㎡	道路(上信越自動車道)建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八斗蒔原遺跡	散布地	縄文時代（早期中葉～前期初頭）	集石土坑1基・集石1基・土坑26基・ピット18基・焼土遺構13基・炭窯1基	縄文土器・石器	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第129集

上信越自動車道関係発掘調査報告書

八斗蒔原遺跡

平成16年2月12日印刷
平成16年2月13日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新津市大字金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　長谷川印刷
〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号
電話　025（233）0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第129集

上信越自動車道関係発掘調査報告書ＸＩ　　八斗蒔原遺跡

正　誤　表

頁	行	誤	正
48	遺物No.166	6 H16･21	7 G15
50	遺物No.236	6 G23	7 H 1

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第129集『八斗蒔原遺跡』　正誤表追加

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	３６度５８分３９秒	３６度５８分４１秒
抄録	東経	１３８度１３分１０秒	１３８度１３分１４秒